
Lyrical Vesperia ~ 堕ちた不屈と凛々の明星達 ~

食器野さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L y r i c a l V e s p e r i a 堕ちた不屈と凛々の明星達

【Nコード】

N 3 3 1 6 N

【作者名】

食器野さら

【あらすじ】

JS事件の翌年、空のエースオブエースは優しさ故にその手を鮮血に染め、地に堕ちる。

そんな彼女に手を差し伸べたのは、凛々の明星達だった。

これは、EFの物語、自分の罪を悔やみ、明星達の優しさに戸惑うエースオブエースの物語。 6 / 2 5 : 完結。

零番星（前書き）

もう一つの小説が起動に乗ったばかりなのに、何新連載始めてんだって？

いいんだよ！書きたかったんだから！

ほつといたら、せつかく生まれた妄想が可愛そうじゃないか！！（

）（

そんなこんなで始める新連載。

『とある姉の原作破壊（仮）』とともに、長〜い目で見守ってもらえると光栄です。

それではどうぞ。

零番星

時計の短針と長針が重なる時間帯。

人気の無い通りを、数人の人物が歩いていった。

皆気持ちの悪い笑みを浮かべながら、中心にいる太った男に話しかけている。

「あの女も困ったもんだな」

「全くです、あいつがいなけりや俺達はもう少し楽に出来たのに・・

・・」

「まあいいじゃないですか先輩、あいつやその仲間が見つけた証拠を全部つぶせてる」

「ああそうだ、あいつの仲間にあの 査察官や 捜査官がいるのは計算違いだったが・・・・・ 裁判は我々の勝ちで決まりだな!!」

「俺はさらに 兄妹ときたもんですから、一時期はどうなることかと思つてましたが、大したことないですね!」
「まったくだ!!」

直後に全員が下品な声を上げて笑い出した。

会話の内容を見ていたあたり、汚職を見つけられて裁判を起こされたが問題無く自分達が勝つ、とても思っているのだろつ。

「己の欲望に溺れ、汚職を狂つたように繰り返すゴミ屑どもがいるは、『この世界』も変わらないようだ。

「・・・・・ん?」

ふと、中心にいる太った男は、道の先のほうからこちら側へ来ている人影を発見した。

夜中で、周りをビルに囲まれ、暗が多い、その悪条件がそろった所為か、はつきりと姿を確認することは難しい。

自分達のほんの数メートル、ビルの影が途切れて、光が入っている場所がある。

人影の正体は、向こうの上半身がその光の中に入ることやつと分かった。

「これはこれは、一等空尉殿ではありませんか？」

自分達がついさっきまで話題にしていた女性だったのだ。

太った男は に対して、わざとうやうやしく声を掛けた。

はやわらかく微笑んで答える。

「あなたのような方がこんな所で何をしていらっしゃるのですか？」

「夜道は危険ですよ？特にあなたのような綺麗な方にはねえ？」

太った男の連れ添いの何人かが、いやらしい目つきと声で、
近づく。 に

「ご気遣いありがとうございます、でもわたしには不要ですよ？」

「さあ？それはどうでしょう……」

「ね」と、ズボンのポケットに隠しておいたナイフを に振り、
肩を切った。

……はずだった。

「……え？」

振りぬかれたはずの手は、手首から先を斬り落とされていた。

鼻の奥を突く鉄の臭いが、一気に広まり、連れ添いの男達の混乱も

また、一気に広がった。

「いったでしょう？わたしには不要だって」

は笑みを消してそう言った。

彼女の両手には、本来彼女が振るっていない物が握られていた。

金髪の髪を揺らしながら、彼女は走っていた。
同居している友人が突然いなくなったのだ。
思い当たる節は一つしかない。

彼女は間に合うように、友人がするであろう『早まった真似』をさせないために、必死に走った。

そして後悔もしていた。

つい数ヶ月前から友人は、町を私物化していた外道官僚と裁判で争っていた。

だが自分を含めた仲間内で必死にかき集めた証拠は、官僚たちによって全て無かったことにされた。

最近は相手側に告訴を取り下げるように要求されていたらしい。

しかも、一人娘を人質にされて、だ。

友人がかなり悩んでいたのは目に見えていた。

だから何度も相談にのろうかと声を掛けた。

だがそのたびに友人は『自分の問題だから』とかたくなに拒否した。当時はあんまり追及するもの何かと思い、やりきれない気持ちで諦めていたが……。

「……………あ」

遠くの方に、友人の姿が見えた。

ただ、嫌な予感がしてならない。

それが外れていることを願いながら、友人に駆け寄る。

「……………!!?」

友人の名前を呼びかけ、固まる。

その瞬間女性は、目に写った光景を否定したかった。

友人の周囲は

屍でいっぱいだった。

しかも、それもこれも見覚えのある顔である。

胴体を切断され、動脈を裂かれ、首を落とされ、急所を一突きされ、全てが惨い殺され方だった。

女性はふと、友人以外で生きている者を見つけた。

あの外道官僚だ。

四肢を全て斬りおとされ、無残なものとなっていたが、確かに息はあった。

友人は、逆手で両手に持った小太刀二本を再び握りなおすと、ゆっくり官僚に近づいていく。

「ひ……ひいつ………！やめてくれ………こないでくれ………！！」

命乞いを始める官僚。

だが友人は歩く速さを変えない。

「つやめて！」

女性は懷から自分の『相棒』を取り出し、『起動』させようとしたが、

「」

『相棒』を持っているのは女性ではなかった。

友人が呟くと、桜色の輪が突然女性の四肢を拘束し、衝撃で『相棒』が手から滑り落ちる。

カラン、と虚しい音を立てて、『相棒』は地面に落ちてしまった。

「やめてくれ……殺さないでくれ………命だけは
つ………!!」

情けなく続けられる命乞いに、慈悲は与えられなかった。

冷たい刃は無情に振り下ろされ、頸動脈を一閃する。

新たに血が湧き出した。

それでもまだ官僚は息をしている。

あえぐ官僚を見つめて、友人は静かに口を開いた。

「……同じことを口にした町の人たちに、あなたは何をしましたか？」

出血による血液不足で青くなっていた官僚の顔が、さらに青くなる。

「………ただで死ねると思わないで下さい」

女性は焦った。

このままだと、友人は後戻り出来なくなると思ったのだ。

だから、拘束を解こうと必死にもがいた。

だが桜色の輪はびくともしない。

本来なら『相棒』に、相手の『相棒』をハッキングさせて解除するのだが、焦りがそれにたどりつくまでの思考回路を塞いでいた。

友人は人体の弱点を容赦なく切り裂いていく。

「やめて!やめてよ! !!」

いつの間にか女性はもがくことをやめ、友人に泣き叫ぶような制止をしていた。

同時に夢であって欲しいと願っていた。

今日の前にいる友人は、酷く冷たい目と表情をしている。

普段の彼女からは、信じられない顔だった。

官僚はぐったりとして、生きているかどうか、近づかなければ確認できない状態だ。

友人は何の前触れも無く、腕を振る。

面白いくらい簡単に、首が落ちた。

友人は刀に付いた血を振り払い、納刀する。

同時に女性の拘束も解けたが、本人はがっくりとうな垂れたままだ。黙って女性を見る友人。

「・・・・・・・・・・っ」

「・・・・・・・・？」

女性が何か言っているのが聞こえた。

本人も伝わっていないと判断したのだろう。

脱力の中で無理矢理口を動かして、

「最低だよ、なのは」

なのは友人は驚きと悲しさが混ざった表情を見せたが、すぐに寂しそうに笑った。

女性を置き去りにするように、その場を去る。

「・・・・・・・・・・ごめんね、フェイトちゃん」

すれ違いざまに、女性フェイトへの謝罪を口にした。

届いていたかどうかは分からない。

なのは友人はこれからやるべきことを考えながら、人知れず泣いていた。

「なのはママ、どうしてこれからおでかけするの？フェイトママは」
「？」

「ごめんね、ちょっと色々あつて一緒にいられなくなっちゃったの」

「むう……じゃあ、みんなにさよならいつちゃだめ？」

「……それは………できない」

「………だめなの？」

「………ごめんね………」

「………ちゃんとわけがあるんでしょ？じゃあ、しょうがないよ」

「………ありがとう」

「えへへー、ねえ、どんなところに行くの？」

「うん、それはね………」

『罪』ってなんですか？

『罰』ってなんですか？

『許し』ってなんですか？

『仲間』って？

『友達』って？

一体何が『正義』で何が『悪』なんですか？

答えは誰が知っているんですか？

の明星達

l y r i c a l v e s p e r i a } 堕ちた不屈と凛々

はじまります。

零番星（後書き）

はい、皆さんここで疑問に思っただいじゃありません。

『なのはさん、剣使えなっけ？』

この理由については後々詳しく語ります。

さて、今回は明星達が登場です。

次回も読んでいただけると幸いです。

それではこの辺で^^ノシ

一番星（前書き）

本編第一話投降です。
いきなりオリキャラが出ます。

一番星

どんな理由があれ、最低なわたしは人を殺した……

とある森の中、亜麻色の長い髪をゆらした女性が、小川のそばにたたずんでいた。

だけど今はこの子の側を離れるわけにはいかない。

腰に納められた小太刀の一本を抜く、同時に髪をとめていたリボン
をはずし変わりに手で押さえる。
そして、小太刀で髪を切った。

わたしがこの世界で死ぬまで、わたしが捕まるまで。

切った髪を川に浮かべ流す。

この子を……たった一人の娘を、守り抜く。

小太刀を納めた時、女性は背後に悪寒を感じ、振り向いた。

『テルカ・リユミレース』

三年前に、最大の災厄『星喰み』を乗り越え、代償に武醒魔導器を
除く全ての魔導器を失った世界だ。
ブラスティア

魔導器によって約束されていた安全や、生活のあれこれは無くなっ
てしまったが、ギルドや帝国の努力もあってか、治安や人々の暮ら
しは安定しつつある。

この世界には、『魔物』と呼ばれる異形のモノたちがいる。

それらは鳥の形をしていたり、蝙蝠の形をとっていたりして、時た
ま群れを成して町を襲うことがある。
シルトブラスティア

三年前までは結界魔導器から発生した結界で町を覆い護っていたの
だが、現在はその結界魔導器も失ってしまった。

そこで帝国とギルドは、町や村を護るために騎士団も一隊やギルド
を一つ以上設置することを義務付けた。

それにより町は結界魔導器ほどではないが、今日まで魔物から護ら
れることとなる。

そして、ここハルルの街に設置されたギルド、
ブレイフ・ヴェスベリア『凛々の明星』も例
外ではなかった。

「そつちにいったよ!」

「分かってる……!」

ハルル近辺の草原。

身の丈を超える斧を持った少年が、同じく身の丈ほどの片刃の剣を持った青年に合図をおくる。

青年は刀身で向かってきたイノシシのような魔物を打ち飛ばし怯ませ、頭のでっぺんから両断した。

その時、少年の背後にオウムのような魔物が飛び掛る。

が、飛来した犬とにトランプカードにそれぞれ一閃をあてられ、鮮^い血を散らした。

少年は苦笑いして、犬とトランプの主^に礼を言う。

「ごめん助かったよ、ラピード、パティ」

「後ろに気を配るのは基本じゃろ？カロール」

「ワウッ！」

トランプの主　パティは呆れた物言い
少年　カロールに喝を入れ、犬　ラピードは気にするなといわんばかりに一声鳴いた。

「でも、レイドが来て二年かあゝ、長いような短いような」

パティのジト目を受けながら、カロールは青年　レイドの話題に摩り替えた。

レイドは苦笑を浮かべて、

「そうだな、最初の頃はカロールたちに世話になってばかりだった」と返す。

「よし、退治も終わったし街に戻ろう」

カロルは斧をバッグに納めながら確認を取り、仲間達は頷いて答えた。

その時、ガサガサツと音を立てて側の茂みが揺れた。

（さっきの生き残りか？）

レイドは背中 of 剣に手をかける。

思考内容は仲間達も同じだったらしく、全員が臨戦態勢に入っていた。

ゆれが激しくなり、ラピードは唸る。

ついにそれは飛び出してきたが、皆拍子抜けした。

「う．．．．．うう．．．．．」

子供だったのだ。

それなりに大きい荷物を抱えていたので、疲れて倒れてしまった、ということだろう。

ラピードが子供の側に近寄り、喉を鳴らして「大丈夫か？」と聞く。一見ほのぼのとした光景だが、それは子供の口から出た次の言葉でぶち壊される。

「ママが．．．．．ママが．．．．．助けてえ．．．．．！」

花の街、ハルル。

ここにカロルが首領^{ボス}を勤めるギルド『凛々^{ブレイブ・ヴェスベリア}の明星』の拠点があった。元々魔物に襲われ廃棄されたままだった宿屋を、ギルド兼皆の住居として改築したものだ。

その台所に立ち、食材をさわっているのは、ギルドのメンバーの一人、ユーリ・ローウエルである。

「ねえ、せーいねーん」

「なんだよおっさん」

ユーリの後ろ、イスに座りテーブルにもたれかかっている中年男性

レイヴンが詰まらなさそうに口を開いた。

「カロル君たち、遅くない？」

「あいつ等は十分強い、心配しなくてもいいと思うぜ」

「でも、やっぱり遅いと思いますよ？」

そっぴいながら、食堂に入ってきたのは、ここで一緒に生活しているエステリーゼ・シデス・ヒュラッセイン、通称エステルだ。

「まあ、言われてみりゃそうだけどよ……そのうち帰ってくるって」

「そうでしょうか……」

「そうだよ、二人とも心配しすぎだ」

「ユーリは心配しなすぎ!」

二人同時に突っ込まれ、ユーリは苦笑いをした。そして出来た料理をテーブルに並べていく。

「お、今日はコロッケ?」

「おいしそうです!」

レイヴンは感心した様子で、エステルは目を輝かせて、昼食の献立をまじまじと見た。

その時、どたと慌しい足音が聞こえてきた。

「ほらな?」とユーリは二人にウィンクすると、食堂のドアを開ける。

「おかえりカロール、今日の昼飯……」

「そんなことより大変だよ!誰かがエッグベアに襲われているんだ!」

食堂が、戦慄した。

時間を少し遡ろう。

子供の口から出た『SOS』を聞いたカロルの行動は早かった。すぐ泣きじゃくる子供に近寄り、身をかがめて視線を合わせる。

「落ち着いて、お母さんがどうしたの？」

「ママが・・・おつきいくまさんにおそわれたの・・・それで・・・わたしだけにがしてくれて・・・だけどママもすごいけがをして・・・」

小さくなつた泣き声が再び大きくなつた。

次にパティが子供に視線をあわせ。

「落ち着くんじゃ、ママが襲われとるのは、どこなんじゃ？」

「ううっ・・・ぐすっ・・・あつちの森・・・」

子供が指差した方向をみて、一同更に緊張した。

「あつちって・・・クオイの森!？」

「じゃあ、熊って・・・エッグベア!？」

次の瞬間、何故かレイドが走り出していた。

気がついたときにはもう遅く、彼の背中に納められている大剣が日光を浴びて光る様子しか見えない。

「もう！何で勝手に・・・」

「うん、でもちようどよかった」

一人ごちるパティをなだめながら、カロルが言う。

「どういうこと？」という彼女の疑問も予測していたのだろう、子供を見て。

「ぼくがユーリ達を呼んでくる、パティとラピードはここで待機してて」

「……どうしてじゃ？」

「この子はこんなちっちゃい体で重い荷物をもってここまできたんだ、相当疲れているんだろっし、それにラピードは鼻がいいから、何か近づいてきたらすぐに反応できる」

カロールに言われ、パティはある程度納得したようだ。

「そういうことだから、パティとラピードはここで待機、ボクがユーリ達を呼んでくるから、それまでその子を護ってて」

「了解したのじゃ！」

「ワンッ！」

「それじゃ！」とカロールは走り出す。

そして今に至るのだ。

カロールにつれられ、エステル含めた凜々の明星一行は、パティとラピード、そして例の子供もいた。
ハニーブロンドの長い髪に、紅い左目と緑色の右目、かなり特徴的な容姿の女の子だ。

「レイドは？」

「戻ってきておらん」

パーティは残念そうに首を横に振る。

ラピードは今だ泣き続ける子どもをなだめる様に寄り添っていた。

「だいたいの事情はカロールから聞いている、俺とエステルはクオイの森にいつてレイドとそいつの母親探すから、おっさんはその嬢ちやんをギルドに連れて行く・・・ってことでいいか？カロール？」
「うん、いいと思うよ」

カロールは相槌をうち、ユーリの提案に肯定の意を表明する。
ユーリはにっと笑うと、エステルとともにその場を去っていった。

レイドは森の中を走り回っていた。

遠くのほうから聞こえてくる戦闘音をたよりに、獣道を通っていく。
音が近くなってきた。

突然、

派手な音をたてて、目の前を何かが横切り、木にぶつかった。

亜麻色のセミロングに、両手に握られた小太刀。

『人間だ』と認識するのに、そう時間はかからなかった。

レイドが『彼女』に駆け寄ろうとした時、飛んできた方向から、巨大な熊が現れた。

エッグベアだ。

背中の大剣に手をかけたが、次の行動はすぐに封じられる。

別に、エッグベアが先手を撃ってきたとか、そんな訳ではない。目の前で、木にもたれかかっていた『彼女』が

消えたのだ。

気がついたときには、エッグベアの肩に深い切り傷が刻まれた。

『彼女』はエッグベアの後ろで、膝をついていた。

息つくまもなく、両者は再びぶつかる。

激情したエッグベアは腕を振り上げ、相手を消そうとする。

それに対し『彼女』は飛び上がると、今度は顔に一閃をあてた。が、傷は浅かった。

更に怒りをあらわにしたエッグベアは、『彼女』を文字通り吹き飛ばし、その強靱な爪で切り裂こうとした。

レイドは一気に現実へ引き戻され、大剣を抜き放つと、エッグベアと『彼女』の間に割り込み、エッグベアの頭を叩き斬った。

ポタポタと、切り口から血を流しながら、巨体はゆっくり傾き、地に伏す。

突然割り込んできたレイドに『彼女』は困惑の色を表したが、敵ではないと悟ると、こちらもゆっくりと体を傾けた。

「あ、おい！」

レイドは咄嗟に『彼女』を抱きとめた。

よくみると、所々にアザや切り傷が目立ち、出血も酷かった。安心できるところといえば、骨折や内出血が見受けられない程度だろうか。

それに、『彼女』は今まで極限状態だったのだろう。

死んだように、深い眠りについていた。

「レイド！！」

少し離れたところから、聞きなれた声が聞こえた。

ユーリだ。

後ろからはエステルも付いてきている。

レイドはエステルに『彼女』を引き渡した。

エステルは『彼女』を受け取るなり、地面に寝かせ、治療を始めた。

「こいつが？」

「ああ、多分間違いない」

ユーリの確認に、レイドがどこか確信なさそうに答えた時だ。

再び離れたところから、なにやら騒がしい一行が近づいてきた。

ユーリはその一行を見て、驚きをあらわにし、叫ぶ。

「おっさん！パティ！カロールまで……！！」

「まだ戻ってなかったのか……！？」

驚愕を浮かべた二人の横を、小さい何かが通り過ぎる。

さっきの子供だった。

子供は『彼女』を見た途端、飛びつき、その胸で泣きじゃくり始め

た。

「悪いわね、二人とも……この子つれて街に戻ろうとしたら、いきなり走り出すもんだから……」

「お母さん助かったんだ……よかった」

情けなくヒィヒィと呼吸をしながら、レイヴンが経緯を話し、カオルは素直に喜びを表現する。

ユーリはにっと笑って、レイドの肩を叩き。

「良かったな」

レイドも困ったように笑って、「ああ」と返した。

「んじゃ、その子のママがめでたく助かったことだし、そろそろ戻らない？」

レイヴンの提案に、皆素直にうなづいた。

一番星（後書き）

はい、というわけで、ヴェスペリアのみなさんの出演でした。
実は初めナンを出そうかなっと思っていましたが、色々考えてパティにしました。

だからパティの口調は若干おかしいんです；

今回出演したオリキャラと、救出された親子にかんしては又次回と
いうことで。

それでは^^ノシ

まあ、親子に関しては皆さんもうお気づきでしょうが^^；

二番星（前書き）

ちよつとグダグダな上に会話が多いかも・・・
それに親子とオリキャラにあまりふれてない気が・・・
とにかく・・・どうぞ！

二番星

まどろみの中で、痛みと覚醒を感じながら、『彼女』は瞼を開ける。真つ先に飛び込んだきたのは、桜色の髪を揺らした女性の顔。

自分を庇ってくれたあの男性の関係者なのだろうか、と考えながら、身を起こそうとする。

瞬間、全身に激痛が走った。

「まだ動かないほうがいいですよ！今娘さんと呼んでくるので、じつとしていてください！」

女性は慌てた様子で『彼女』の上体を寝かせると、バタバタと部屋を出て行った。

それをぼんやり見送っていると、

「どうやら元気そうじゃな、でもしばらく動かんほうがいいと思うぞ？」

わきを見ると、海賊のような風貌の少女がイスの上で足をブラブラさせていた。

「えつと……ここは？」

「花の街ハルルにあるギルド、ブレイブ・ヴェスベリア凛々の明星じゃ」

少女はにかつと笑う。

「そうじゃ！自己紹介しとらんかったのう？パティ・フルールじゃ」
「あ、どうも……わたしは……」

そうやって自己紹介を返そうとした時だ。

「ママ!」

そういつて、自分に飛びついてくる者がいた。

「ヴィヴィオ……!」

娘が無事だったのが嬉しかったのか、一瞬驚いた顔をした後、しっかりと抱きしめる。
ふと気が付くと、見覚えのある男が桜色の女性と一緒に部屋に入ってきていた。

「起きたか……」

「あ……はい、えっと……ありがとうございました」

『彼女』は一礼した。

「あ、自己紹介いいですか？私はエステリーゼ・シデス・ヒュラツ
セインと申します、みんなからはエステルと呼ばれているのであな
たも気軽に呼んでくださいね」

「レイド・アルタイル、ギルド凛々の明星のメンバーだ」
ブレイブ・ヴェスペリア

「この度はお助けをいただき、ありがとうございます……
わたしはナノハ・アンダースカイ、この子は娘のヴィヴィオ・アン
ダースカイです」

「よろしく」と三人は握手を交わした。

「それにしても、何でクオイの森にいたんです？この時期、エッグ
ベアの気性が荒くなるのに……」

エステルの素朴な疑問に、ナノハは乾いた笑いを見せ、

「あはは・・・あまり大きな声で言えないんですが、実は故郷を追われたんです」

「・・・！?ご、ごめんなさい!」

驚きあせるエステルに、ナノハは乾いた笑いをしてから、

「エステルさんの所為じゃないですよ、追われた理由も自業自得ってやつです・・・」

「・・・自業自得?」

今度はレイドが疑問を口にする。

すると、ナノハは急に黙り込んだ。

レイドはしばらく黙ってナノハを見る。

やがて、

「・・・言いたくないならいい、話したくなったら話せ」

「・・・ありがとうございます」

「何、言いたくないことがあるのは誰にでもあるもんじゃ、気にせんでもええ」

申し訳なさそうに、俯くナノハを元気付けるように、パティはにこにこ笑った。

「にしても、故郷を追われたということは、行くところがないんですよね?」

「ええ、まあ・・・」

「だったらここで働かんか?」

「・・・・・・・・え？」

耳を疑うナノハを他所に、パーティとエステルはどんどん話を進めていく。

しまいには「そうとなればボスに報告だ！！」と二人して部屋を出て行ってしまった。

ポカンとするナノハに、レイドは苦笑いしながら、

「勘弁してやってくれ、あいつらに悪気はないんだ」

その日の夕方。

「帰ったわよ！」

「ただいま」

玄関がほぼ乱暴に開けられ、長い触角と体格が目を引きグラマラスな女性と茶色の短髪で勝気な少女が入ってきた。

「おかえり、リタ、ジュデイス」

夕飯の配膳をしながら、カロルは二人を迎える。

「今日の夕飯は？」

「野菜炒めと肉じゃが！」

テーブルにつきながら献立を聞くリタ。

ふと、ジュデイスは見慣れない子どもが手伝っているのに気が付いた。

「あら……この子は？」

「この子……ああ、ヴィヴィオのこと？」

「今日から凛々ブレイフ・ウェスベリアの明星のメンバーになった……もんの娘じゃ」「ふうん？」

リタはまじまじとその子どもを見る。

子どもは睨まれていると思ったのか、持っていた皿をテーブルに置くと、ラピードの側に逃げ込んだ。

「あらあら、隠れちゃったわね」

「なんで……」

「睨まれていると思ったんじゃないの？今のリタっちの視線きつかったから」

「なっ、おっさんは黙ってなさい!!」

リタは容赦無しにレイヴンの腹へストレートを入れた。

「ぐふっ」とにぶい声を上げて、レイヴンは倒れる。

「ケーブモックのエアルクレーネはどうでしたか？」

レイヴンのリタのやり取りは日常茶飯事なので、軽くスルーして。
エステルはジュデイスにたずねた。

「ええ、いつも通り異常なしよ」

「ふう……ただ、いつもより数値が高かったわ、だからまたレイドに頼むことになるわね」

「まあ、高いつていつてもちよつとだけど」とリタは続けた。

リタは周りを見渡して。

「で？その新人はどこ？」

「それが……」

とエステルは新人についての経緯を話す。

リタとジュデイスは納得したようで、ちょうどエステルが持っていたお粥とりんごを取り上げると。

「これ、私たちが運んでくるわ」

「え、でも……」

「これからここで暮らすんでしょ？ だったらこれ届けるがてら挨拶してくるわよ」

エステルはしばらく迷った後、

「じゃあ……お願いします」

と、二人にお粥とりんごを渡した。

コンコン、とノックの音がしたので、ナノハは返事をする。

「しつれいするわ！」

「夕飯よ」

「………？ あ………」

ナノハが言わんとしていることが分かったのか、ジユデイスはおぼんを机においてから、手で制す。

「初めましてね、わたしはジユデイス、このギルドのメンバーよ」

「あたしはリタ・モルディオ、このメンバーじゃないけど・・・まあ居候ってやつね」

「あ、はい、ナノハ・アンダースカイです、よろしくお願いします」

三人は握手を交わす。

「にしても災難だったわね？エッグベアに襲われたんでしょ？」

「ええ、情けないことに・・・」

苦笑いをして、リタに返すナノハ。

「情けないことないと思うわ、あのエッグベアを怒らせるくらい追い詰めたんでしょ？」

「食べられる？」とジユデイスは器をナノハに渡す。

ナノハはそれらを受け取りながら、

「そんな！追い詰められていたのはこっちですし、そのあと結局倒れちゃったし・・・」

と謙遜した。

「よく言っわ、あんたを助けたやつ・・・レイドって言っただけど、そいつの話じゃあんた、一瞬でエッグベアに一撃かましたらしいじゃない？」

イスに腰掛け、リタが呆れた様子でナノハに語りかけた。

「一瞬・・・？ああ、『神速』のことですね、あれ、うちに伝わる剣術の奥義なんです」

「奥義？すごいじゃない！他に何が・・・？」

するとナノハはまた苦笑いして、

「いえ、わたしそんなに才能なかったので、あれ一つしか覚えられなかったんですよ」

「情けない話でしょ？」と続ける。

「あんたねえ・・・謙遜しすぎなのよ！人が誉めてやってんだから、素直によろこびなさい！」

「え・・・ええー・・・」

リタの剣幕に押され、ナノハはまたまた苦笑いをした。

（・・・なんだか、今日は苦笑いばかりだなあ）

そんなことを考えたナノハであった。

「ママ・・・・・・・・」

夜。

ナノハがうつらうつらしていると、ヴィヴィオがナノハに寄り添ってきた。

「どうしたの？ヴィヴィオ」

娘の頭を撫でながら、ナノハは問う。

「えつとね・・・・・・・・一緒に寝ちゃだめ？」

「・・・・・・・・もう、だめなわけ無いじゃない、おいで」
「うん！」

一瞬驚いた顔をするナノハ、が、すぐに笑顔になり、ヴィヴィオを抱きしめた。

おまけスキット『まさかの・・・』

カロール：そう言えば、ナノハっていくつ？

エステル：えっ！？ちよつとカロール！

ユーリ：その質問は直球すぎるだろ！！

レイド：女性に年齢のことは禁句らしいからな

レイヴン：そーよお！せめて、ヴィヴィオちゃんのこととか、なるべく遠まわしにしてさあ！

ナノハ：二十歳だよ？

リタ：へえ、二十歳・・・って若あ！？

パティ：ちなみに聞くが、ヴィヴィオは今いくつかのう？

ヴィヴィオ：七歳！

ジュデイス：あら？じゃあナノハは・・・

レイド：・・・苦労したんだな

ナノハ：えつと・・・何を勘違いしているかは知らないけど、ヴィヴィオはわたしの養女だよ？

リタ：え・・・養女？

ナノハ：うん、野草を取りに森にいったら、倒れてるのを見つけたんだ、身寄りも無いって言うから、じゃあうちにこないかってカロール：なるほど

ユーリ：それならありえない年齢の差にも納得できるな

レイヴン：ナノハちゃんは遅いシングルマザーなのねえ

ナノハは『シングルマザー』の称号を得ました。

二番星（後書き）

はい、終わりです。

親子に関しては説明不要として（え

オリキャラに関しては近いうちに設定をだそうかなと・・・

気長に待ってもらえると幸いです。

それでは^^ノシ

三番星（前書き）

更新遅れてすみません；

今回はエステルにとあることをやらせます。

あと『穴子』・・・。

それではどうぞ！

三番星

それから数ヶ月。

ナノハ、ヴィヴィオの親子もここの生活になれたようで、だいたいの性格も分かってきた。

ヴィヴィオはお転婆・・・というわけでもないが明るく活発で、よくラピードやカロール、パティと一緒に遊んでいる。

また、七歳にしては飲み込みがかなり早いという事実が分かった故か、最近はたまにリタが彼女の勉強を見ている。

リタも、飲み込みがいいヴィヴィオに、教え甲斐を感じているようだ。

ナノハは、一児の親らしく、母性を感じさせる部分が多い。

料理が上手・・・と言うのもあるだろうが、ほつれを発見しては繕うなど細かい部分での気遣いが上手なのだ。

それと、彼女の戦いに迷いは見えない、が、よくよく見るとどこか戦いなれていない部分がある、おそらく小太刀二本と言うエモノを扱いは慣れていないのだろう。

そして彼女もエステルと同じく「ほつとけない病」だった。

泣きじゃくる子どもあればたとえ他人の子であろうと、親身になって話を聞いたりする。

そのお陰か、わりと早く街の住民達に溶け込めていた。

ただ、娘であるヴィヴィオ含む凛々の明星の面々が、声を掛けたり、軽いスキンシップで触れようとすると、一瞬拒むように体を硬直させるのが気になるが・・・。

「ナノハ！お帰り！」

「お帰り〜！」

ナノハは今日も依頼を終え、ギルドに戻ってきた。

早速ヴィヴィオがナノハに飛びつき、帰宅を喜ぶ。

ナノハは柔らかに微笑み、黙ってヴィヴィオの頭をなでた。

「おかえりなさいナノハ」

「うん、ただいまエステル」

「ナノハは今日も大活躍だったのじゃ！」

「そうね、いつもより冴えてたんじゃない？」

「あははっありがと、パティ、ジュデイス」

ここだけの話だが、ナノハはエステルやジュデイス等の女性陣とよく行動を共にする。

同性・・・ということもあるが、エステルたちが『どこか人と一線引きがちなナノハを少しでも人に慣れさせるために』と『かなり』積極的に接しているからである。

最初の頃は、主にジュデイスが中心となって、「同い年と仲間に敬語は不要、名前も呼び捨てで」と言い聞かせ、今ではすっかり私語と呼び捨てで呼び合う中だ。

努力虚しくといえる点は、やはりスキシップの際に体を硬直させるところだろうか。

だが会ったばかりのころとくらべれば、かなり心を開いている方だった。

「おかえり」

「レイド・・・うん、ただいま」

それと、レイドともわりと話している。

恩人と言うことで、自然と接する機会が多いのだろう。

ギルドの面々によれば、レイド自身もナノハと同じように、人と一線を引いていた時期があったそうだから、おそらく昔の自分と重ね、放っておけなくなったのだろう。

「ナノハちゃん、お仕事板についてきたんじゃない？」

イスに持たれかかったレイヴンが、ナノハに声を掛ける。

「うん、みんなが色々教えてくれたからかな？」

ナノハは笑い、レイヴンに答えた。

だがそれはどこか飾ったものだった。

「飲み込み早いすもんね、ナノハは」

そうと知りつつ、エステルは相槌を打つ。

その時だった。

「失礼、ブレイブ・ヴェスペリアの明星はここですか？」

玄関の方から声がした。

どうも今日の依頼人らしい。

カロルが出迎え、依頼人と一対一で話すために客間へ通す。

2〜3年前までユーリやジュデイスが依頼人との交渉をしていた。

が、ギルドを治める立場のカロルは二人に負担をかけるわけにはいかない。と話術を猛勉強、今では交渉はお手の物となった。

「……ただ、いくら改善されたとはいえ、強い相手を見ると逃げ腰になってしまう情けなさはまだなくなっていないようだが。」

「ちょっとちょっと、今の人、ノードポリカ在住の大物よ？」

「……ええっ!？」

「それ、本当？」

『闘技場都市ノードポリカ』、その名の通り、世界中から様々な猛者が集まり、己を腕を試す場所だ。

故に、試合を観戦する貴族や、試合に参加する格闘家たちで自然と賑わう。

もちろんそれだけの金銭も回るため、経済的にも豊かなところだ。

「そうそう、今ナッツと協力して闘技場をまとめているらしいよ?」

「ナッツさんと!?!」

「どうしてじゃ?」

「聞いた話だと、ナッツとは旧知の仲らしくて、ボスであるベリウスが亡くなってすぐ後から、主に経済的な面で支援してるってさ」

レイヴンの説明に納得する面々、すると、客間からその話題になっていた人物が出てきた。

ギルドのメンバーと視線が合うと、一例して建物から出て行く。

遅れて出てきたカロルは玄関まで依頼人を見送ると、真剣な顔で仲間達を見つめた。

「さっきの人の話を聞いたんだけど・・・ちょっとやっかいな依頼だよ」

「ということは受けたのね?」

カロルはリタの指摘に肯定しつつ、話を進める。

「ノードポリカの闘技場、覚えてる?」

「ああ、覚えとるぞ?」

「確かユーリとフレンが戦いましたよね?」

「そうだな、あん時は別の意味でビビった」

「一隊長が闘技場のチャンピオンだったからねえ・・・」

しみじみと昔を思い出すレイヴン、ユーリ、エステル、パーティの四人。

ジユデイスとリタとレイドは口にくそ出さなかったものの、懐かしそうに顔を綻ばせていた。

「その闘技場に何かあったの？」

「何でも、今のチャンピオンが、バレストラーレ戦士の殿堂を滅茶苦茶にしているらしいんだ」

「例えば？」

「戦えるなら、老若男女、試合中でもそうじゃなくても、関係なく襲ってるんだってさ、拳句の果てにはギルドの人にも手を出す始末・・・」

「チャンピオンだから、追い出そうにも追い出せないって・・・」

カロルの説明に、皆がそれぞれの表情を見せる。
そのどれもが、いいものではなかった。

「だから、闘技場での優勝経験があるボクたちにそいつを倒して欲しいんだってさ」

「なるほど・・・な、そいつの特徴は？」

ユーリは手をあごにあてて、カロルに問うた。

「えっと・・・男なんだけどウェーブのかかった長くて水色の髪をしてて・・・それで濃い青色の全身タイツに、巨大な斧、あと、マツチヨ」

「・・・ぐふ」

「想像したら気持ち悪くなってきたわ・・・」

カロルの情報に全員が顔を真っ青にして、口を抑えていた。

「変な人だね！マッチョなのにタイツ着るなんて！」

ただ一人、ヴィヴィオだけは無邪気に笑っている。

しかもさり気にといつのことを貶していた。

嗚呼、無垢無邪気は怖ろしや。

「か、カロル、その依頼は受けたのか？」

口を押さえ、受諾を確認するユーリに、カロルは「うん」とうなづいて答えた。

「そうとなると、誰が出るかってことになるわね？」

ジュデイスの発言に、カロルは頭に手をあてる。

「……………なあ、ナノハに出てもらうってのはどうだ？」

「……………え？……………ええっ！？」

突然の使命にあせるナノハ。

ユーリはそんなナノハを見て、意地の悪い笑みを浮かべながら、

「大丈夫だって、お前十分強いんだし、その暴れまわってるってチヤンピオンも倒せるさ、それに新しい仲間お前を紹介するいい機会だ、出てみなよ」

「で、でもわたしユーリやレイドより弱いよ！？」

「それは俺やレイドが生活した環境が特殊だったから」

ユーリに言い負け、しばむナノハ。

ジユデイスやエステルといった女性陣もユーリに賛成だったようだ。口にこそ出さなかったが、賛成だったようだ。

「まあ、危なくなったらボク達も加勢するよ、依頼人も認めてくれた」

「え、でも……」

「あーっもう！！自信を持ちなさいよ！みんなあんに期待してんの！素直に喜びなさい！！」

「はい！！」

リタが、もう我慢できないと言わんばかりに怒鳴った。

「あたしらは強いあんたを認めてる！危なくなってもあたしらが乱入するし、依頼人もそれ承諾済み！」

一呼吸おいてリタは続ける。

「治療術にはエステルがいるし、後方支援ならあたしに任せて！大丈夫、あんたなら出来るわ」

にっこり笑って鼓舞するリタに、ナノハは笑って、

「……ん、やってみる」

数日後、闘技場。

大歓声が、円形の闘技場で反響して、さらにボリウムを上げている。

実況の男が、リングの上空に突き出した台座に立ち、マイクのスイッチを入れた。

「レディースエーンジェントルメン！」

実況が大声を上げると、歓声は更に大きくなる。

「今回のチャンピオンシップ！！挑戦者が一味違っぜえ！！」

一方、二つある選手が入場する為のゲートの片方が上がっていく。

ブレイブ・ヴェスベリア

「かの凛々の明星期待のニューフェイス！ウサギの面して強さは魔物！！甘く見てると怪我するぞ！！」

ゲートの奥から、ゆっくりと歩いてきたのは、短い亜麻色の髪を揺らした女性。

「ナノハアアアアンダースカアアアアイツ！！！」

ポリウムがあがる声援。

だが、そのほとんどは罵声だった。

中にはもう席を立ち、出て行く者もいる。

「なんか、すごい言われようだね」

「チャンピオンの所為で、思考回路が狂った奴しか集まってないらしいからねえ・・・」

「みんな舐めてるんだよ、あいつをな」

「ああ、新顔とはいえナノハの実力は本物だ」

「ワン！ワン！」

ユーリたちはその野次に呆れながら、コロシアムの中心に立つナノハを見守る。

と、その時、一時席を外していた女性陣が帰ってきた。

「・・・・・・・・エステルの手には、何かの紙切れが握られている。」

「おかえり、何しにいったんだ？」

ユーリたちは席をつめ、女性陣が座れる場所を確保している。

するとエステルは目を輝かせ、

「賭け事です！」

男性陣は目を点にする。

それを尻目に女性陣は続けた。

「帝位はいとこにゆずったとはいえ、人の上に立つ身ですものね」

「賭け事の面白さと危険さを知ってもらういい機会だわ」

「そうじゃ！いいことも悪いことも全部知るのが上のもんじゃ！」

そう熱弁する女性陣に、ユーリは苦笑いして、

「ちなみに、いくら賭けたんだ？」

「2万ガルドです！」

「損失は出しようないが、ナノハが負けるところも想像できないからう」

「このぐらいが丁度いいでしょ」

屈託の無い笑顔でニコニコと笑う女性陣。

男性陣は何故かそれが頼もしく見えた。

「ママ、勝てるかなあ？」

レイドの膝の上に座っているヴィヴィオが、レイヴンに問う。

「勝てるんじゃない？ナノハちゃん強いし」

「ほんと！？」

「ほんとほんと」

無邪気にきゃっきやと笑うヴィヴィオのお陰で、ブレイウ・ヴェスベリア凜々の明星が座っている一帯は和んでいた。

「さあ！試合開始だあ！！」

テンションを上げた実況が手を振り上げる。

すると、ナノハの向かい側のゲートから身の丈ほどの剣を持った男が入場してきた。

「レディー……」

実況は、振り上げた手を、振り下ろした。

「ファイツ！」

合図と共に、両者は駆け出す。

「うらあっ！！」

男は剣を振り下ろした。

が、ナノハはなれた足取りでそれを避けると、背後に回り込み一閃を繰り出す。

しかし男も負けていないようで、咄嗟に身を翻すと、お返しにとこちらも一閃を繰り出した。

ナノハは身をかがめて避け、右手の小太刀を逆手から順手に変えると、がら空きになった首筋に刃を振り払う。

「ちい！」

男は籠手で防ぎ、続けてナノハに拳を叩き込んだ。

ナノハはそれをもう片方の小太刀で受け止め、距離を取る。

「魔神剣！」

小太刀を振る、桜色の衝撃波が男に向け飛ばされた。

男は刀身で難なく衝撃波を受け止める。

（確かに強いが・・・他愛ねえなあ・・・）

完全に油断して、男は刀身をどかす。

だが、直後に体が大きく衝撃を受け傾いた。

「双牙っ！」

（ちいつ、それがああ！？）

大きく体制を崩した男に、ナノハは急接近。

アッパーのように腕を振り上げ、一閃を繰り出した。

体の回転とひねりを生かし、男に連続して斬撃を食らわせていく。

「虎牙蓮華こがれんげ！！」

切り上げと切り下ろし、続けてまわし蹴りを食らわせる。

男はよろよると後ずさり、ゆっくり倒れた。

男が再び立ち上がらないことを確認した実況は、腕を振り上げ叫ぶ。

「ウイナー！ナノハアアンドアースカアアアイツ！！」

どつと沸き上がる観客席。

気付けば、先ほどのような罵声は少なくなっていた。

「やった！」

「勝ちました！」

「やるわね」

「初戦突破じゃ！」

「ママ勝ったー！すごい！」

ふと、エステルは隣の席を見る。

隣の席の男は、ナノハの勝利が以外だったらしい。

相手側に賭けていた紙切れを握りつぶし、去っていった。

「賭けに負けた奴はあなるのよ」

「下手をしたら全財産をなくしてしまう、それが賭け事だからのう・

・・・」

「覚えときなさい」

「・・・・はい」

エステルはどこかやりきれない様子で、男を見送っていた。

「さあ！次の戦いいくぜえ！野郎共！用意はいいかあ！？」

実況の呼びかけに雄叫びに近い声を上げる群衆。

次に入場してきたのは、頭にバンダナをまいた盗賊だった。
両手には鋭利な短剣が握られている。

「レディー！ファイツ！！」

試合開始。

「せいやあっ！」

盗賊がナノハに突っ込み、両手を交差させて一閃。

ナノハはそれを防ぐと小太刀を振り下ろし、更に回し蹴りを入れる。一瞬怯みを見せる盗賊、だが即座に持ち直すと、短剣を投げつけてきた。

ナノハは怯むことなく短剣をはじき飛ばし、盗賊に接近。

「魔神剣！」

鳩尾に峰撃ちを見舞い、衝撃波を打ち出す。

受身を取れず、もろにそれを食らう盗賊。

ナノハはさらに追い討ちをかける。

「破魔椿！」

「奇想柘榴！」

「烈駆魔神桜！」

要所要所にピンポイントで小さな切り傷を刻んでいき、宙に飛び蹴りの連撃を見舞い、剣圧で敵を浮かせ落ちてきたところに衝撃波を放つ。

盗賊はそれで吹き飛ばされたが、まだ倒れない。だが満身創痍なのは確かだ。

（流石にそう簡単に勝たせてくれないかあ・・・）

ナノハは内心で苦笑いをした。

気を引き締め、盗賊にとどめを指すために走る。

「桜乱剣舞！！！」

衝撃波を飛ばすのではなく、あえて刀身に纏わせ、連続で斬る。

斬る！斬る！斬る！斬る！斬る！斬る！斬る！斬る！斬る！斬る！斬る！斬る！

「あの女……なかなかやるなあ？」

薄暗い場所。

そこで『チャンピオン』はナノハの戦いを見物していた。

「『うさぎの面して強さは魔物』……よくゆったものだあ」

『彼』はにやりと、やがてくつくつと笑い出す。

「久々に楽しめそうだ……血沸き肉踊る戦いがなあ!!」

すると、

「さあ！決勝の前にフェアな戦いをするため、ここで休憩時間だ！
ついでに紹介するぜえ!!」

外で自分を呼ぶ声がある。

『彼』は再びにやりと笑って、ゲートをくぐり、日の下に出る。

「本闘技場の現チャンピオン!!バルバトオオオオース!ゲ
エエエエエエエエエーティアアアアアアアアアアツ!!」

ぶるああああああああああああああああああああ

ッ!!!

闘技場に闘争本能の叫びがこだまする。

闘神、降臨。

三番星（後書き）

はい、という訳でエステルに賭け事をやらせてみました。

本人そんなことを進んでやる人じゃない（と思っています）が、一応上流階級の人間ですし、ちょっとぐらい経験させといた方がいいかなーっと思ったので^^；

さて、今回は『ナノハVSバルバトス』！

お楽しみに^^ノシ

星図（前書き）

今更ですが、この小説におけるテルカ・リュミレースと、オリキヤラ、パーティーキャラの設定をば。

いくつかネタばれがございます、閲覧の際は十分ご注意ください。

星図

テルカ・リュミレース

時間軸は原作から三年後。

プラスチック魔導器を失ったのは同じだが、この小説では何故か武醒魔導器ホーディプラスチックだけ残っている。

なお、それについての原因は不明（という設定）。

流通や人々の生活については幸福の市場やその他流通専門のギルドギルド・ド・マルシェと、帝国が協力し、人々は以前ほどではないが、安定した暮らしを送っている。

魔物への防衛は、シルトプラスチック結界魔導器に代わり、ギルドや騎士団が一つ一つの市町村につくことにより、ブレイヴ・ヴェスベリア護られている。

なお、ユーリたちが経営する凜々の明星はハルルの街に置かれている。

設定

レイド・アルタイル

年齢：20

武器：大剣

目の色：紅

髪の色：白銀

ブレイヴ・ヴェスベリア詳細：2年前から凜々の明星に所属している青年。

基本物静かで、表情の変化も控えめ、たまに冷たい発言をしてしまうが、本当はとても優しく子供に懐かれることも少なくない。

戦闘では大剣ならではの豪快な動きも見せるが、そうとは思わせない振りぬきの速さや細かい突き等もお手の物である。

13年前に起こった人魔戦争に巻き込まれたらしく、顔の右半分を覆う眼帯をつけている。

また、背中側の腰には布にまかれた謎の剣を持っている。

どうやら恩人より受け継いだ大切なものらしく、ギルドのメンバー（特にエステル）もそれが何なのかを知っている模様。

面影が誰かに似ている………？

ナノハ・アンダースカイ

年齢：20

武器：小太刀二本

目の色：透き通った青

髪の色：亜麻色

詳細：クオイの森でエッグベアに襲われていたところをレイドに助けられた女性。

優しく、母親らしい笑顔を見せる母性あふれる人。

実際、一児の母である。

故郷を追われたらしく、どこか人と一線をひいており、スキンシップを図ろうとすると、一瞬体を硬直させる癖がある。

戦いでは、二振りの小太刀とスピードを生かして戦う。

だがよく見るとなれていない部分も見受けられるため、小太刀二本というエモノには完全に慣れていない様子。

左腕に、バングル型の武醒魔導器ボーディフラスティアを装備している。

ちなみに、小太刀にはそれぞれ蒼花ソウカ、紅花ベニバナと名前がついている。

そしてエステルと同じく「ほっとけない病」である。

ヴィヴィオ・アンダースカイ

年齢：7

武器：なし

目の色：右緑左紅

髪の色：ハニーブロンド

詳細：ギルドの面々と初対面の時にSOSを出した少女、ナノハの一人娘である。

お転婆というわけではないが、とても活発、よくラピードと遊んでいる。

年相応の反応も見せるが、危機の時にみせる勇氣は人一倍。時にそれが仲間の救済につながったりする。

実はナノハとは血はつながっておらず、森で倒れていたのをナノハが見つけた、それを切欠に親子になったらしい。

だが、二人はそんな事実を忘れさせるくらい固い絆で結ばれており、やり取りは本当の親子のようである。

パーティキャラの現在

ここに出てくるキャラはPSS3版のものです。

ユーリ・ローウェル（24）

現在はカロールと立ち上げたギルド、ブレイヴ・ヴェスペリアの明星で働く。

ハルルの街の防衛に励みつつ、依頼をこなす毎日である。

実はエステルと交際中。

エステリーゼ・シデス・ヒュラツセイン（通称：エステル）（21）
帝位はいとこであるヨードルにゆずり、自らは世界を旅し、民の声を聞くこと決意。

その際、評議会からハルルの街を拠点にすることを条件に出されたため、自然と凛々ブレイヴ・ヴェスペリアの明星の面々と行動をとるようになる。

「ほっとけない病」は相変わらずで、現在も困っている人を見つければ真っ先に飛んでいく。

現在ユーリと交際中だが、本人たちあまりイチャイチャしないので、本当に付き合っているのかと疑う声も……。

どうも一線引きがちなナノハと仲良くするための『ナノハと仲良くなるうつの会』の会員一号兼会長である。

カロール・カペル（16）

フレイヴ・ウェスベリア

ボス

ギルド凛々の明星の首領。

あれからかなり成長し、大人っぽさが出てきている。

ギルドの長らしく、体格的にも精神的にもしっかりしてきたが、強そうな相手を見てしまうと逃げ腰になる情けなさは相変わらず（いくらか改善されたが）。

依頼人との交渉は彼の仕事であり、話術はおてのものである。

リタ・モルディオ（18）

アスピオが3年前に壊滅状態になってしまったため、ギルドに居候している天才魔導士。

災厄『星喰み』の再発を防ぐために、原因のエアルの源泉であるエアルクレーネの調査のためあちこち飛び回っている。

そのためか、気づけばよくジュデイスと行動をとみにしていた。

飲み込みが早いヴィヴィオを気に入り、暇なときは勉学や魔術を教えている。

胸は相変わらず残念だが、大人っぽさが目立ってきた。

『ナノハと仲良くなるうの会』の会員二号。

ジュデイス（22）

フレイヴ・ウェスベリア

ギルド凛々の明星のメンバー、クリティア族という一族の一人でもある。

勘が鋭く、細かい部分の気配りも上手、さらに容姿がかなり良いので、よくナンパを受けることがある（だがすぐにスルーするが）。

ギルドの親友兼移動手段の一つであるバウルとは旧知の仲だ。

前述のとおり、バウルが移動手段にもなっているため、エアルクレーネの調査であちこち飛び回るリタとは、自然と行動をとみにしている。

『ナノハと仲良くなるうの会』の会員三号。

ラピード(??)

ユーリの飼い犬兼ギルドのマスコットの存在。

年老いてもなおその強さは健在で、退役はまだまだ先と思われる。
最近をよくヴィヴィオと行動をとにする。

レイヴン(本名『シユヴァーン・オルトレイン』フレイヴ・ヴェスベリア)(38)

アルトスグ一応天を射る矢の一員だが、ここ最近では凛々の明星に入りびたりである。

胡散臭さも相変わらずだが、前騎士団長もとい大罪人であるアレクセイがなくなつてからの騎士団をフレンとともにまとめていた。

現在ギルドと騎士団の仕事を行ったり来たりの状態である。

パティ・フルール(15)

失つてしまつた記憶を取り戻したパティは、ギルド経営の感覚をも
フレイヴ・ヴェスベリアう一度養つために、凛々の明星のメンバーとなっている。

年寄りのような変わった口調と、例えを海鮮物にするしゃべり方は
健在。

『ナノハと仲良くなろうの会』の会員四号である。

フレン・シーフォ(24)

現在の騎士団長。

本編にはまだ登場していないが、前任のアレクセイ(謀反を起こす
前)同様、どの騎士からも信用され、尊敬をうけている。

下町出身ということもあり、敵もいくつか作ってしまったているが、
彼の副官や部下が、全力で上司をフォローするため、幸いこれとい
つたダメージは受けていない。

星図（後書き）

はい、というわけで今回はキャラクターや世界観の設定でした。

・・・・すみません、そちらの方『今更かよ』という突っ込みは控えてくださいorz

次回は本編を更新しようかなっと思っています。
それでは。

四番星（前書き）

今回は『ナノハvsバルバトス』！
はたして闘争本能そのものの穴子相手にナノハは対抗できるか？
それではどうぞ。

四番星

チャンピオンを目の当たりにした^{プレイウ・ヴェスベリア}凜々の明星は、しばらく黙っていた。

やがて、

「さっきのやつ……」

「ああ、やばかったな」

「ホホジロザメより恐ろしいやつじゃった」

「お、おっさん、震えてるじゃない？」

「そういうリタっちだって！」

「怖い……です」

個々が感想を述べる中、突然ヴィヴィオはレイドから飛び降りた。

「どこにいくんです？」

「ママのところ、がんばれっていうの」

数瞬の沈黙、直後には「ええっ!？」という声がエステルから出ていた。

「何だってこのタイミングで？」

「あんた震えてるじゃない!そんなで応援しても逆に心配されるわよ!」

「海底の岩のように、どっしりとここで待っておったほうが……」

リタの言うとおり、ヴィヴィオの体は小刻みに震えている。
確かにこの状態で応援されても気を使わせてしまうだろう。

それでもヴィヴィオは譲らず、ふるふると首を横に振るだけ。
何を思ったのか、レイドはヴィヴィオに視線をあわせて、

「……………何で、ナノハのところに行こうと思った？」

沈黙を保つヴィヴィオ、やがて、

「……………今からあのひととたたかうママの方が、もっと怖い」

その時、何故か瞳だけは恐れを感じさせないものになっていた。
仲間とともに経過を見守っていたユーリも、意思を読み取ったのだ
ろう。

小さく、それでいて感心したようなため息をついて、

「わかった、いつてこい」

「あ……………うん！」

元気よく頷いて、ぱたぱたと走っていった。
だが、すぐに戻ってくる。

「ママ、どこにいるんだっけ？」

その一言で、一同ずっこけた。

挑戦者の待合室。

ナノハは一人、椅子に座っていた。

もう何度目かわからない、自分の手を見つめて震えを確かめる、という行動をとり、大きく息を吸い込んで、ため息をついた。と、誰かがドアをノックする音が聞こえた。

震えを隠すよう勤めながら、ナノハは返事をした。

「ママ！」

「ヴィヴィオ!？」

部屋に駆け込み、自分に飛びつくヴィヴィオに驚きつつ、やわらかく笑って頭をなでる。

遅れて、レイドが入ってきた。

「レイドまで……二人ともどうして？」

「ヴィヴィオがお前を元気付けてやりたいと譲らなかった」

「えへへー、ママ大丈夫？」

再び顔に驚きを浮かべ、ヴィヴィオを見るナノハ。

ヴィヴィオは顔こそ無邪気に笑っていたものの、どこか暗い部分があった。

彼女なりに心配してくれているのだと知り、なんとなく、緊張が解けた気がした。

「そっか………ありがとう」

そして、今まで閉じ込めていた甘えが、少しだけ表に出てくる。
困ったように笑いながら、ナノハは二人に自分の手を見せた。

「……震えてる」

「うん………間近で見たから、わかるよ………すごい
プレッシャーだった」

すると何を思っただのか、ヴィヴィオはナノハの手を包むように握った。

戸惑うナノハに、ヴィヴィオはまた笑って。

「あったかいでしょ？」

「………うん、そうだね」

ふとおもむろに、レイドも、ヴィヴィオの手に重なるようにしてナノハの手を握った。

意外そうに見てくるナノハに、

「………すまん、人を鼓舞するという経験はあまりなかった
から………」

つまりはヴィヴィオの真似をした、ということになる。
ぽかんとするナノハ、次の瞬間。

「………ふっ」

「え？」

「くっ………くくくっ………ごめん、ちょっと………」

「」

「ママ？」

ナノハは、明らかに笑いをこらえている。

レイドとヴィヴィオはただ戸惑うだけだった。

「くつくく……ごめん、さっきのレイド、普段とのギャップが半端なかったから……つい」

「む？そうか……？」

「うん……ふふふ」

うつすらと浮かんだ涙を拭きながら、笑うナノハ。

レイドはどこか納得しない顔でナノハを見ていたが、表情がいくらか明るくなったことに気が付いた。

少なくとも、いくらか緊張を解くことは出来たようだ。

今ナノハは、ヴィヴィオと他愛ない話をしている。

すると、ドアがノックされた。

入ってきたのは、ギルド『パレス・トラレ戦士の殿堂』の者だった。

「失礼しますナノハさん、そろそろ時間です」

「あ……はい」

ナノハは一瞬不安そうな表情を見せたが、直後には引き締めていた。不安げに自分を見上げるヴィヴィオの頭を撫でて、レイドと視線を合わせる。

「……いつてくるね」

レイドは何も言わなかったが、代わりに黙ってうなづいた。ヴィヴィオの手を引き、部屋を出る。

「がんばってね、ママ！」
「うん」

ふとヴィヴィオは振り向きざまに手を振った。
ナノハも笑って振り替えた。

「お！二人ともお帰り！」
「えへへー、ただいまー！」
「どうだった？ナノハの様子」
「ああ、少しだけ緊張を解くことが出来たみたいだ」

席に戻ると、ユーリたちが迎えてくれた。
レイドは座りながら、ナノハの様子を仲間に報告する。

「そつか……」

「最悪の事態にならないことを祈りましょう」

「……そうだな」

厳しい表情で、レイドとエステル、ユーリが言葉を交わしている間に、試合時間になった。

実況は、舌があたるくらいにマイクを口に近づける。

「レディースエーソントルメンツ！！チャンピオンシップもいよいよ大詰めだ！最終戦の対戦カードはあ！！赤コーナー！闘技場現チャンピオン、バルバトス・ゲーティア！」

「ぶるああああああああああつ！！」

一方のゲートが開き、斧を携えた巨漢が入ってくる。その雄叫びに、観客席は一気に沸きあがり、闘技場は歓声につつまれる。

「青コーナー！ギルド凜々の明星所属！チャレンジャー、ナノハ・アンダースカイ！！」

もう一方のゲートから、小太刀を構えたナノハが入場してきた。こちらにも、バルバトスに負けない歓声が浴びせられる。

「文字通り雌雄を決する戦い！勝つのはどっちだ！？歴史的瞬間をその目で確かめろ！！レディー……」

実況が腕を振り上げる。

客席のボルテージはさらに上がる。

「ファイツ!!」

「うおらあぁっ!」

先に打って出たのはバルバトスだった。

巨体に似合わぬ速度でナノハに接近、斧を振り下ろす。

ナノハは防ぎきれないと判断し、横っ飛びで回避してから、歩法を使っ
てバルバトスの背後に回り、一閃。

……したつもりだったが、気づけば斧の柄で殴り飛ばされて
いた。

「……………っ!」

何とか受身の態勢を取り、着地する。

「魔神剣!」

いくらかの距離が開いていたので、ナノハは小太刀から桜色の衝撃
波を撃った。

バルバトスは難なく防いでいたが、予想の範囲だったので、ナノハ
は次の行動に出る。

今度は先ほどより距離をつめ、小太刀を振る。

「義翔閃っ!」

鋭い光がバルバトスを襲ったが、それも難なく防がれた。

再び距離を取り、魔神剣で牽制しながら思考する。

（さすがチャンピオンでところかな? さっきの斧の一撃もすごかつ
たけど、防御力もやっかいだね、魔神剣程度じゃ防がれちゃうし・
……………ちょっと戦にくい相手かも?）

その時、

「・・・・・・・・・・もう、攻めてよいかあ？」

「?・・・・・・・・・・っ？」

理解が遅れた。

いつのまにか巨体は自分の目の前におり、その戦斧を振り上げていた。

防御は不可、回避も到底間に合わない。

無常に、刃は振り下ろされた。

「ぶるあああああっ！ジェノサイドブレイバーッ！！」

バウンドしながら地面を転がっていくナノハに、容赦ない一撃が襲う。

再び、体が宙を舞う。

「イビルチャージ！」

「今死ね！すぐ死ね！骨まで砕けろおっ！」

「うるらあああああああっ！」

ナノハは飛びかけた意識を無理やり繋ぎ止め、バルバトスから離れた。

彼のいるところは土煙がもうもうと立っている。

（あの人・・・・・・・・・・無茶苦茶だ！今ので肋骨が持っていかれたうえに毒を盛られた・・・・・・・・・・！このままじゃ勝てない！）

『回復するなら彼の視界がいくらか遮られている今が好期だ』

そう判断したナノハは腰のアイテムポーチから、レモングミ、パイ

ングミ、キュアボトルを取り出し口にする。
同時に脳裏で策を練りながら、フィールドを駆け出した。
直後、

「きさまああああ

っ！！！」

バルバトスが鬼の形相で、土煙を一振りで振り払い、突進してきた。
身に覚えがないものの、どうやら彼を怒らせてしまったらしい。
一体何に？と考えながら、バルバトスの突進を避け、距離を保つ。
剣士であるナノハは、攻撃の際にはおのずと接近する必要がある、
だが今回の場合、懷に飛び込めば重い一撃を見舞われる。
かといって離れすぎれば、攻撃の手段がなくなってしまう。
数少ない遠距離技である『魔神剣』にも射程距離があるがゆえに、
ナノハはギリギリのところで距離を保っていた。

「生かして帰さんんんっ！！」

「・・・・・・・・！！？」

気がつくと、バルバトスが目の前にいた。
ナノハは一瞬慌てたものの、すぐに感覚を研ぎ澄ませて、『神速』
を発動する。

瞬きの合間に、ナノハの姿は消えていた。

「『神速』、ね」

「ああ、どこにいるのか・・・・・・・・まったくわかんねえ」

「ほんとに早いよね、ナノハのあれ」

「いくらチャンピオンでも、さすがに見失うんじゃない？」

「これが反撃の切欠になるといいですけど・・・・・・・・」

関心したような、心配しているような、そんな声色で闘技場を見つ

めるユーリたち。

ちなみに台詞は、上からジュディス、ユーリ、カロール、リタ、エステルである。

観客たちはナノハの姿を探すために、闘技場のすみずみを見渡す。そう、『観客たち』は、

「ゆうたであろう？生かして・・・・・・・・帰さんとなああああっ！？」

バルバトスが後ろに向け斧を振るうと、手ごたえが。

そこには今まで見えなかったナノハが、腹に一撃を食らっていた。バルバトスはナノハの首を引つつかむ。

「アイテムなぞ！」

そのまま力任せに地面に叩きつける。

地面にはひびが入り、再び土煙が巻き起こる。

「使ってんじゃああ・・・・・・・・！！！」

さらに、砂や石ではなく岩石が飛び散るレベルの踏み付けを二回。

「ねえええええええっ！！！」

止めに斧で高々と斬り上げた。

壁に打ちつけられ、ゆっくり倒れるナノハ。

「10！9！8！7・・・・・・・・！！！」

実況はカウントダウンを開始し、バルバトスはナノハにゆっくり近

づく。

客席 特にバルバトスに賭けていた野次馬たちは実況に合わせ
て、カウントダウンを刻む。

一方、ブレイヴ・ヴェスベリアの明星一行は、介入の準備をしていた。

「ヴィヴィオ、これからちよつとあいつを倒しに行く、お前のママ
も助けるけど．．．．．多分血を見ることになるから、ここで隠
れている」

個々がさり気無く武器を構える中、ユーリはヴィヴィオに声をかけ
る。

だがヴィヴィオはナノハを見据えたまま、ぼつりと、

「．．．．．まだ、終わってない」

「？何だつて？」

「ママ、まだ終わってない．．．．．！」

「3！2！．．．．．おつとお！？」

その時、どよめきが起こった。

何が起こったのかと、視線を闘技場に戻すと。

ナノハが、立っていた。

満身創痍のはずなのに、地に足をつけ、しっかり立っている。

表情はうつむいている為、読み取ることは難しかった。

それでもバルバトスはかまうことなく、ナノハに接近、首をつかみ
上げ、斧の切っ先をのどに向ける。

ふと、ナノハとバルバトスの視線が重なる。

バルバトスは、目を疑った。

ナノハの体はぼろぼろ、これ以上動けば何かの後遺症が残るような、

そんな状態の『はず』だ。
しかし、瞳だけは違った。

まだ諦めていないのだ、まるで瞳だけ何のダメージを受けていないように。

それくらい真っ直ぐで、きれいなものだった。

「・・・・・・・・っ」

「っ!？」

見とれていたからだろうか、ナノハが何かを呟いたということに気づくのが遅れた。

途端に、ナノハから『何か』が湧き出し、バルバトスを吹き飛ばす。体制を立て直したバルバトスは、苦虫をつぶしたような表情でナノハを睨み付ける。

ナノハの体から湧き出ていたのは、闘気。

「オーバリーミッツか・・・・・・・・!？」

ナノハはバルバトスをじっと見てから、剣を構え、走りだした。
突然睨みを止め、にやりと笑うバルバトス。

何を考えているのか、と普通なら疑問に思うが、ナノハはそんなことを考えなかった。

ただ、

『倒して、またギルドのみんなと笑っ』

それしか頭に浮かんでいなかった。

ナノハの武醒魔導器ボーディ・プラスティアが光る。

その瞬間、ナノハの姿が消えた。
ブレイヴ・ウエスベリア

それを見ていた凜々の明星は、驚愕の表情を浮かべた。

誰かが、ポツリと呟く。

「ユーリの秘奥義に、似てる」

ナノハは現れては消え、現れては消えを繰り返す。
そして現れるたびにバルバトスに小太刀を振るが、すべて軽く傷つけるか、わざと狙いはずしていた。

「星の煌き・・・・・・・・天の裁き・・・・・・・・」

出現の感覚が短くなっていく。
まさに神出鬼没、どうやってそこに行っているのかと問いただしなくなるような移動もしている。

「その身に受けよ！」

いきなり現れ、高々と斬り上げてから大きくバックステップするナノハ。

何事かと考える暇はなかった。
なぜなら、

「何？あれ・・・・・・・・」

「星・・・・・・・・空？」

「きれい・・・・・・・・」

そう、目の前に星空が現れたのだ。

桜色のそれは浮遊しながら、バルバトスを包囲している。

予兆も無く突然現れたそれに、声援を送っていたナノハに賭けた者も、野次を飛ばしていたバルバトスに賭けた者も、言葉を失う。
そんなギャラリーを他所に、

「星光！流星群！」

ナノハは小太刀を振り下ろし、号令をかけた。

「シュートッ！！」

結果はナノハの勝利。

戦士の殿堂の面々も大喜びである。

あのチャンピオンが行方知れずになったのは気がかりだが……
・何はともあれ、一件落着だ。

「そういえば……」

バウルに乗り、ハルルへ帰還中の凛々の明星一行。
フレイヴ・ウエスベリア

何かを思い出したように、リタが口を開いた。

「ナノハはあのチャンピオンに勝ったから、普通は次のチャンピオンはナノハってことになるでしょ？」

「あー、うん、そうだね」

ちなみにナノハが負った傷はエステルによりほぼ完治。しかし、しばらくギルドの仕事を休むようにと診断された。

「そしたら、ギルドとチャンピオンの両方をやることになるじゃない？その辺どうなの？」

「ああ、それなら断っちゃった」

「・・・ごめん、今なんて？」

「だから、断っちゃった」

沈黙が、一瞬。

「ええええええええええ つ!？」

「え、えええ!？」

仲間たちの絶叫に、ナノハも思わず声を上げてしまう。

「そんな!もったいないよナノハちゃん!」

「そうですよ!なんで断ってしまったんですか!？」

「ちょ、ちよつと!ちゃんと話すからみんな落ち着いてええ〜!」

目がかつと見開き迫ってくる皆を何とか抑えてから、

「ふう．．．．みんな考えてみて、今回のわたしの仕事は『あのチャンピオンを倒すこと』、別に次のチャンピオンになるために戦いに行っただんじゃないから．．．．だから断ったの」
「うぐっ．．．．」

「あら、これじゃあもつともすぎて反論できないわね」

「反論する気だったの？ ジュデイス．．．．」

「もちろん」

「あ、あはは．．．．」

もう乾いた笑いしか出てこない。

それでも、ナノハはまた戻ってこれたことが嬉しかった。
故に願う。

どうか、『みんな』が来るのが、遅くありますように。

「ごめんな！お待たせ」

「八神部隊長！」

とある一室。

茶色い髪をゆらした女性が、メガネをかけた男性のもとに駆け寄る。

「あの子の反応が出たって、本当？」

「ええ、といってもほんの微弱なものでしたが……ほぼ間違いないでしょう」

「………そっか」

男性から手渡された書類を、女性はまじまじと見つめる。
ふと、無意識にその文面を読み上げた。

「第56管理外世界、現地名称『テルカ・リュミレース』………」

四番星（後書き）

今回出したかったのは、ナノハの秘奥義とフラグ的なものですww
次回は・・・どうしょ、ストックなくなっちゃったよorz
ま、まあ！次回もお楽しみに！
それでは^^；ノシ

五番星（前書き）

お待たせしました、今回はいろいろ進展が？
それではどうぞ。

五番星

何も見えない真っ暗な空間。

今ここにいるのは自分一人だけのはずだ。

一人のはず……なのだが。

どうして殺した？

どうして殺したんだ！？

俺達だって人なのに……！

今は亡き者達が、血まみれで血の涙を流しながら、足に纏わりついてくる。

それをなんとか振り払い、逃げ出した。

待ああ……てええええ

逃げるなああああ

後ろの方で怒りが響くが、かまっていられない。

走って、走って、走って、走って、走って、走って。

どれくらい来たか分からなくなった途端、誰かに肩をたたかれた。振り返ると、忘れもしない友人がいた。

彼女は笑いもしない、かといって怒りもしない、無表情で

「さいてい」

さて、花の街ハルルは今日ものどかである。

子供達は無邪気に駆け回り、大人たちは家事や業務に専念している。遠めに見れば華やかなこの街も、中にはいれば活気に溢れ、人々の息吹を感じる。

他の街や村とはほとんど変わらない。

そんな中、街へ入ってくる二組の女性。

それに気付いた肝玉良妻の女性が、明るい声で話しかけた。

「お帰り！ジユデイス、ナノハ！」

「あ、こんにちは！」

「ええ、ただいま」

ジユデイスとナノハの体には、所々泥汚れや切り傷、打撲の跡がある。

おそらく、魔物の退治にいつていたのだろう。

シルトプラスチック結界魔導器が無くなってから、よく見られる光景だ。

「今日もお疲れ様、そうだ！あとで何か差し入れ持っていくよ！いつもお世話になっているからね」

「本当ですか！？」

「お気遣いありがとうございます」

「あいよ！腕によりをかけて作るから、楽しみにしてなよ？」

「はい！」

良妻と笑いあってから、ギルドへ戻る。

「あ！おかえり！ママ、ジユデイスお姉ちゃん！」

扉を開けてから、真っ先に飛び出してきたのはヴィヴィオだった。ヴィヴィオはまずナノハに飛びつき、続いてジユデイスに飛びつく。すこし送れて、エステル、リタ、パティ、カロール、ユーリの順番で二人を出迎えた。

ちなみに、ラピードとレイドは仕事で離れた所にいるので、不在である。

「おかえりなさい！ナノハ、ジユデイス！」

「今日も二人して派手にやったなあ？」

「そのうち全治2ヶ月とかなるんじゃないの？」

「もう！リタ！」

「いじわるは言わんほづがええぞ」

「し、心配してるからこそきついこと言ってるんじゃないの！」

リタは顔を真っ赤にして、そっぽを向いた。

「……………一部の人は、それを『ツンデレ』と呼ぶ。

「うるさいー！」

「どっ、どうしたリタ!？」

「そうですよ、いきなり上に怒鳴って……………」

「何かあったの？リタ」

「なんか……………かなり腹立つこと言われた気がしたわ」

「誰かが、リタ姉の噂話でもしたんかのう？」

「それならくしゃみをするはずだよ？」

どこか納得いかない様子で首筋をかくリタ。

だがすぐに手を叩き、

「あーもう、非科学に付き合う暇はないわ、とつとと昼ごはん食べて、午後も頑張りましょう」

みんな素直に賛成した。

さて、騒がしかった昼食も終わり、個々が仕事や休憩をしている仲、エステルとナノハは後片付けをしている。

「よし、これでおしまいかな？」

「はい！それにしても、ナノハ手際いいですね」

「えーそうかなあ？」

食器を洗いながら苦笑いをするナノハ。

洗い終えた食器を拭いて棚に戻すのは、エステルの役目だった。

「そうですよ、ユーリやナノハが当番の日って、すぐにお皿がなくなりますもん」

「へえ、そんなに早かったんだ」

「自覚なかったんです？」

「うん、今気付いた、多分毎日やってたからだと思うなあ」

そうやって最後の一枚を洗い終え、エステルに渡す。

エステルは受け取ってから綺麗に水滴をふき取り、棚に入れた。

「はい、おしまい！」

「終わりましたね」

二人はそうやって、笑いあった。

その時、

「すみませーん！誰かいませんか？」

「何でしょう？」

「お客さんかな？はい！」

タオルで濡れた手を拭き、ナノハが玄関へ出迎えた。
見ると、街に住む道具屋の、子供達だった。

ナノハは子供達に視線を合わせる為にしゃがんだ。

「こんにちは、今日はどうしたの？」

「うん！あのね、ごえいのおしごとをたのみたいんだ！」

「護衛・・・？どこに行くの？」

「うちのおみせのおくすりがきれそうになってるの」

「だからざいりようをとりにいきたいけど、そのためにまちのそとにでなきゃいけない・・・」

ナノハは、笑顔で頷き、

「うん、わかった、だけどギルドに仕事を頼むなら、報酬をもらわないと・・・」

「それならあるよ！」

子供の内一人がポケットを探り、ちいさな袋をナノハに渡す。
その中から、かすかにチャリンという音が聞こえた。

「ちよつとすくないけど・・・」

「ふふっ大丈夫だよ、依頼を承りました」

ナノハは笑って子供の頭をなでた。

その時奥からエステルがやってくる。

「何だっただんです？」

「依頼だよ、アイテムの材料集めにいくから護衛を頼みたいって」

「そうなんですか、気をつけてくださいね」

「うん」

その後、ナノハと子供たちは準備のために、街のはずれで会うこと約束して、一旦別れた。

街はずれ、ナノハは子供たちを待っていた。
と、同時に手持ちのアイテムを確認する。

「グミも……ボトルも……ん、大丈夫」

その時、子供達が走ってきた。
それぞれがかごや鎌を持っている。

「ごめんね、おまたせ！」

「大丈夫、そんなに待ってないから」

「よし、じゃあいこう！」

「うん」

子供達と合流したナノハは、目的地へむかった。

途中魔物にも遭遇したが、特に問題なく撃退した。

その度に「さすがギルドの人だ」と子供達が目を輝かせ、ナノハはどこか照れくさい思いをしていたことをここに記しておく。

なんだかんだで、目的地に到着したナノハ一行。

周りを警戒しつつ、鎌や素手で、薬草や木の実を採取していく。

もちろんナノハも手伝っていた。

「ナノハさん！それとって！」

「・・・・・・っ」

なのはさん！

「？どうしたの？ナノハさん」

「え？あ、ううん、なんでもない！これでいいんだね？えーっと・・・はいっ」

「わぁー！ありがとう！」

「どういたしまして」

にこつと笑って、木の実を子供に渡す。

そのまま向こうのほうへ走っていくのを見送りながら、ナノハは目を閉じ、記憶の中へ潜った。

どれくらい時間がたったのだろうか。

気がつけば、子供達が目の前にいて、不思議そうにこちらを見上げていた。

「ナノハさん？」

「ふえ？あ、ごめんね、ちょっとぼーっとしてたみたい・・・終わったの？」

「うん！たくさんとれたよ！」

「ほら！」と無邪気に笑いながら、かこの中身をナノハに見せる。

「すごい！よくこんなに採れたね！」

「がんばったでしょ」

「うん、えらいえらい」

ナノハは子供達の頭をやさしく撫でた。

「じゃあ、帰ろつか？そろそろ夕方になるしね」

「わかった！」

「えへへ、かえったらおかーさんにほめてもらうんだー！」

そうやって、一行は歩き始めた。

直後、背後に殺意が現れた。

ところ変わって、花の街ハルル。

仕事から帰ってきていたレイドは、見張り台の方が何やら騒がしいことに気付いた。

街を護っている者として見逃すわけにもいかず、見張り台へ足を運ぶ。

「レイド！帰ってたのか！？」
「ああ、何があった」

少しでも帰還を喜んでくれた見張りに感謝しつつ、現状を把握する
為に質問をする。
すると彼は真つ青な顔で、

「出たんだよ！平原の主が！」
「……………何だって！？」

「しかも奴の目の前に子供たちとナノハが……………」

レイドはほぼ反射的に見張りから望遠鏡を奪い取り、覗き込む。
平原の主自体巨大なのだ、見つけるのはとても容易かった。
次にその周辺を探す。

「いた！……………だが確かに位置が悪すぎる！！」

平原の主が向いている方角、その直線上にナノハたちがいた。
ナノハは既に主を向いて臨戦態勢に入っており、一方の手に小太刀
を、もう一方の手で子供たちを急かしながら自分の後ろにやっ
ていた。

それを見たレイドは小さく舌打する。

「すまない、いつてくる！！」
「あ、おい！！」

望遠鏡を見張りに投げつける様に返してから、十メートルはある見
張り台から飛び降りた。

レイドは風にコートをためかせながら、着地。
続けて土埃を巻き上げながら、現場へ向かっていった。

「はぁ．．．．．はぁ．．．．．」
「もう．．．．．だめ．．．．．はしれない．．．．．」
「おかーさん！」
「．．．．．っ」

走り疲れ、泣き出す子供達。

ナノハはなんとか鼓舞しようと口を開いたが、本当に走れないのだと悟り、苦い表情で平原の主を見る。

幸い、向こうがこちらに接触するまでまだ時間がある。

だが子供達が完全に復帰するのにも、援軍がくるのにも、足りない過ぎた。

．．．．．しかし、

「……………気がひけるけど、この際仕方ない……………
か……………この距離なら『チャージ』する分には十
分だよね？『レイジングハート』」
《yes, my master》

突然、彼女の左腕の武醒魔導器ボーディプラスティアが喋った。
呆気にとられる子供達を尻目に、ナノハは小太刀を鞘に納め、左腕
を斜めに振る。

《stund by redy, set up》

すると、武醒魔導器ボーディプラスティアが桜色に発光した。
光が収まった時、子供達が目にしたのは、ナノハの左手に納まった
杖。

だが、普通ではないことは一目で分かった。
白い柄に、所々桜色や金色のの部品がついており、その先端部分は
音叉のようになっていた。

「こういうの、久しぶりだね……………さてと、いくよ」
《All right》

杖を構え、先端を平原の主に向ける。
すると杖のカバーがスライドし、銃などによく使われる空薬莖をい
くつか吐き出した。

「デイバイイイイイン……」

続けて、杖に光のリングが現れ、先端で何かのエネルギーを充填し始める。

リングも、そのエネルギーも、目を見張るような桜色だった。

ふと気付けば、平原の主はもう目の前。

だが、子供達は不思議と恐怖を感じなかった。

主とナノハ達との距離が縮まる。

ナノハは特に慌てる素振りを見せず、杖をしっかりと握って叫ぶ。

「バスターツ!!」

桜色の閃光が、平原の主へ一直線に向かった。

平原を限界の速さで駆け抜けるレイド。

と、そこへ、

「レイド!」

「っ!?!.....ジユデイス、ユーリ.....!」

「話は見張り台の奴から聞いた!」

「とにかく急ぎましょう!」

「ああ!」

すると遠くの方に幾らかの人影が見えた。

その少し先には、巨大な影。

「見つけた!」

「もうあんなに.....間に合うか!?」

「間に合わせるんだ!でないと、ナノハだけじゃなくて子供まで.....!」

直後、目の前で桜色の閃光が走った。

巨大なそれは平原の主を貫き、飲み込む。

轟音が辺りに響き、同時に土煙が視界を遮った。

幸いかるうじてナノハたちの姿は確認できたので、煙をかき分けながら前へ進む。

「ナノハ!みんな!無事.....っ!?」

ドシュウツ、と音を立てて、ナノハの手に握られている杖が、蒸気を噴出した。

レイドも、ユーリも、ジユデイスも、その杖の異様な姿に思わず立ち止まる。

「え?.....あ.....ジユデイス、ユーリ、レイド.....」

・・・」

三人の存在に気づいたナノハが振り返ると同時に笑う。

・・・これまで以上の、寂しさを纏って。

皆が言葉を失っている時だ。

土煙の向こうで、巨体が蠢いた。

それが何なのかに気づいたレイドは、大剣を背中から解放し、大きく振る。

煙が晴れた先、平原の主が立っていた。

多少ふらついているものの、まだ戦えそうだった。

三人は思わず臨戦態勢に入るが、ナノハは黙って見つめるだけ。

緊張が、その場を支配する。

するとどうだろう？ 平原の主は、くるりと反対方向を向いて、よたよたと歩いていった。

狐につままれたような顔になるレイド達を他所に、ナノハは子供達に歩み寄る。

「大丈夫だった？」

「・・・あ」

再びじわっと、泣き出しそうになる。

ナノハはそんな子供達を抱きしめ、

「もう大丈夫だよ」

一瞬で、弾けた様に泣き始めた。

「部隊長！反応、出ました！！」

「・・・・・・ほんまか？」

「間違いありません！」

「そっか・・・・・・」

女性は、ため息をつきながら腕を組む。
が、すぐにそれを解くと、

「・・・・・・フォードメンバーおよび隊長陣にこのことを連絡、
あと、航行艦の使用を本局に要請して」
「了解！」

指示を出し終わると、女性は再び腕を組んだ。

「
．．．．．だいたい四ヶ月ぶり、かあ．．．．．
こんなことがなかったら気楽に会えたのに．．．．．な」

五番星（後書き）

進展が早いですね；すみません；
近い内に、六課と遭遇しますよ。
それでは^^ノシ

六番星（前書き）

前回UPした翌日に気付きました。

レイヴンのこと忘れてた・・・！！

レイヴンファンの皆様はごめんなさい；

とりあえず、どうぞ！

六番星

何も見えない真っ暗な空間。

今ここにいるのは自分一人だけのはずだ。

一人のはず……なのだが。

どうして殺した？

どうして殺したんだ！？

俺達だつて人なのに……！

今は亡き者達が、血まみれで血の涙を流しながら、足に纏わりついてくる。

それをなんとか振り払い、逃げ出した。

待ああ……てええええ

逃げるなああああ

後ろの方で怒りが響くが、かまっていられない。

走って、走って、走って、走って、走って、走って。

どれくらい来たか分からなくなった途端、誰かに肩をたたかれた。振り返ると、忘れもしない友人がいた。

彼女は笑いもしない、かといって怒りもしない、無表情で

「さいてい」

「っ………！」

その手を振り払い、再び走り出す。

いくらか進むと、向こうに一人娘の姿が見えた。

何故ここに？、と疑問を感じつつも、娘のそばに駆け寄ろうとして、

気がついた。

どこか、様子がおかしい。

直後、娘の背後から真っ黒な闇の手が伸びてきて、娘を掴んだのだ。そしてそのまま闇へ引きずり込もうとぐいぐい引っ張り出す。

「助けてえ！！ママア！！」

背後の空間の切れ目から、ギラギラ光る目と刃が見えた。

「っ
！！」

それが何を意味するのかを瞬時に悟り、娘の名前を叫んで駆け出す。が、脚に何かがつつかえ邪魔をした。

振り払うために下を見ると、

「なのはさん」

「この、うらぎりもの」

「
っ！！？」

言葉ではない悲鳴を上げ、跳ね起きる。

あたりを見渡し、深く深くため息をついた。そしてすぐに隣を見る。

何事もなかったように、寝息を立てて寝る娘がいた。

自分の服の裾を弱々しく握り、寝言で「ママ……」と呟いていた。

それだけで、緊張が一気に解ける。

娘の頭を優しく撫で、抱き寄せるようにして、再び眠った。

ナノハがあの杖を出した数日後。

結局、『杖』に関しては何も聞き出すことは出来なかった。

ユーリやジュデイス、レイドも、最初は不安だったものの、ナノハ

の人間性を信じ、なるべく詮索しないように心がけている。

ヴィヴィオはナノハの『杖』について、何か知っているようだったが、やはりこちらも語るのを渋った。

現時点では、『何やら重大なことである』ということしか分かっていない。

「ナノハの顔色が悪い？」

朝食後の凛々の明星、ブレイウ・ヴェスベリア人がまばらになった食卓で、リタが声を上げる。

「ええ、はじめは気のせいかと思っていたけど、間違いないわ」

確信を持ってそう言ったのはジュディスだった。

「確かに、最近食欲があまりありません」

「何か悩み事でもあるんかのう」

心配そうな顔をしているのは、エステルとパティである。

ちなみに、現在ギルドに残っているのはこのメンバーだけで、残りは皆受諾した依頼を片付けるために出て行っている。

ヴィヴィオも、近所の子供に誘われ、出掛けていた。

「しばらくギルドの仕事を休ませたほうがいいんじゃないかしら？」

「ですが、素直に聞いてくれるか……」

「そうそう、仕事好きだし、それに以外と頑固だからねえ、多分いろいろ理由つけて断るんじゃない？」

「けど、このままじゃいかんしのう……」

四人は同時に、「困ったなあ」とため息をついた。

「飛べるか？」

「うん、ありがとう」

丸太の上から、レイドが手を伸ばす。

ナノハはそれを取り、丸太にのぼった。

ちなみに、ここはクオイの森。

そう、ナノハとレイド達が初めて会った場所でもある。

「っ双牙斬！！」

「魔神剣！」

道中出现する魔物に応戦しつつ、目標を探す二人。

「……杖」のこともあるので、終始ほとんどしゃべらずというのは少し辛かったが、それでも移動中、二人が警戒を怠ることはなかった。

「・・・・・・なあ、ナノハ」
「なあに？」

突然立ち止まったレイドに疑問を抱きつつ、ナノハは答える。
レイドはナノハに向き合い、真剣な表情で、

「無理・・・・・・していないか？」
「・・・・・・何のこと？」
「とぼけるな、最近顔色が良くないぞ」

いきなり核心をつかれたナノハは内心焦っていた。
レイドの言うとおり、少し前から体のだるさを感じている。

はじめはそれほど気にすることはなかったが、だんだん体が重くな
っていくのが分かった。

もちろん、ギルドの面々を信用していないから口にしないというわ
けではない。

ただ、彼女の性格上、『仕事を休む』という選択をせず、今日まで
皆に黙っていただけなのだが・・・・・・。
さすがに隠しきれているわけでもなさそうだ。
しかし、ナノハは笑顔を作ってから、

「大丈夫、平気だよ」

しばらくジト目で見ていたレイドだが、やがてこれ以上の追求は無
意味と判断したらしい。
小さくため息をついて、また歩き出した。

（そうだよ、わたしは大丈夫・・・・・・）

自分に言い聞かせながら、ナノハも歩みだす。

（あの子が一人立ち出来るまで、弱音なんか言ってられない）

そして表情を引き締めた。

しばらく歩いていたその時、目の前に無数の魔物たちが飛び出してきた。

思わず身構えるナノハとレイドだが、すぐに、魔物たちの様子が妙だと気付く。

その魔物たちはまるで、何かに怯えるように目を血走らせ、『逃げて』いった。

あれだけ大量の魔物が、こちらを見向きもしなかったことに拍子抜けする二人。

だが直後の、ズシンという音で、現実に取り戻される。

その方向を向くと、先ほどの群れとは比べ物にならない巨大な魔物がいた。

「……………いた!!」

「エッグベア!」

そう、二人の目標はエッグベアだった。

エッグベアがその腕を振り下ろす。

轟音が響き、今まで立っていた地面が罅割れ、小石が飛び散る。

二人はほぼ同時に飛んで避けると、

「魔神剣っ!」

「魔神拳っ!」

ナノハは小太刀から、レイドは拳から、それぞれ衝撃波を打ち出した。

エッグベアはそれを腕を振るって弾き飛ばすが、予想の範疇だ。本命は、別にある。

振るった腕で、一瞬視界を遮られてしまったエッグベア。

獲物二匹が居た場所を見ると、そいつらが消えていた。

しかし焦ることなく、周囲の気配を探る。

後ろから、反応あり。

「はあああああぁあっ!」

「ぐがあああああっ」

体と腕を回転させながら振り向くと、レイドが大剣で斬りかかってきていた。

なんなく斬撃を受け止めるエッグベア、しかし。

「やあっ!」

「ぎゃがあ!」

足に激痛が走った。

見ると、ナノハが小太刀で右足を斬り伏せていた。斬り離されていないのが、唯一の幸いだろうか。

「ぐあぁっ!」

「ぐっ」

「わっ」

エッグベアは怒りに任せて、レイドとナノハを弾き飛ばす。
二人はとっさに受身を取り、着地した。
そして、三者のにらみ合いが始まる。
そのときだった。

(・・・あれ?)

ナノハは、違和感に気づいた。

気のせいかな、何となく視界がぼやけているのだ。

どうも、体が限界を迎えているらしい。

ギルドにいる時ならば、適当に理由をつけて仲間から離れられたのだが、現在は戦闘中。

そんなことができるはずが無い。

足がふらついてきたのが、分かる。

しかし、ここで弱味を見せれば、一気にあの腕力の餌食だ。

故にナノハは、無理矢理視線を鋭くして、我武者羅に敵意を相手にぶつけて。

なんとか悟られまいとした。

だが、

「こるる・・・」

どうやら逆効果だったらしい。

エッグベアはナノハに狙いを絞り、突進してきた。

ナノハも、慌てて防御の体制を取るが、エッグベアの方がいくらか早かった。

体に鈍い衝撃。

次の瞬間には、ナノハは宙に浮いていた。

「っあああああ

!!」

悲鳴を上げ、木々をなぎ倒し、地面を何回かバウンドしてから、背中全体を岩にぶつける。

レイドはナノハに駆け寄ろうとしたが、エッグベアに文字通り吹き飛ばされた。

すぐに体制を立て直したが、ナノハとの距離が開いてしまった。

さらに、エッグベアがナノハに接近している。

一方のナノハは全身を打撲し、体がうまく動かせない。

それに付け加えるようにして、初めてここに『来た』時の光景と、眩暈が襲い始めた。

エッグベアはもう目の前だ。

(ここで・・・・・・・・終わるの?)

脳裏にそんなことがよぎったが、すぐにかき消した。

(違う、終わらない・・・・・・・・そうだよ、わたしは仮にも『不屈のエースオブエース』だったんだから・・・・・・・・!!諦めちゃいけないんだ!!諦めたら・・・・・・・・嫌われる!!!)

必死にそう思い込み何とか動こうとするが、そのたびに激痛が走り、それを躊躇させる。

もちろん、エッグベアには悠長に待っていてくれない。

無慈悲にも、腕が振り下ろされた。

ナノハは無意味とわかっていても、来るべき衝撃に備えて、目を強く瞑った。

ガキンッ

聞こえたのは自分が斬られる音ではなく、金属がぶつかった音。何事かと思いながら、ナノハは恐る恐る目を開ける。

広い背中が、そこにあつた。

それが何なのかを理解したナノハは痛みを忘れ、立ち上がる。

「レイド！」

ナノハが駆け寄るが、レイドはそれを手で制した。

「オーババリミッツ！！！」

腕を振り、闘気を解放する。

エッグベアは、そんなレイドを見ながら、本能的に困惑していた。ナノハも、ふと違和感に気付く。

（なんで、『血を流していない』の………！？）

そんな二者を他所に、レイドは大剣を振る。

「散沙雨！」

大剣とは思えない鋭く、細かい突きを繰り返す。

「虎牙連斬！！」

連続で斬り上げと斬り下ろしを喰らわせ、

「魔皇刃！」

衝撃波を叩きつける。

そして、

「王覇っ！業衝撃いつ！！」

バーストアーツを発動させ、体を回転。

斬撃を見舞ったあと、連続して蹴りを入れ、再び斬った。

「後戻り出来んぞ！！」

一瞬で研ぎ澄まされるレイドの闘気。

ナノハはその感覚に覚えがあった。

あ、秘奥義だ。

「・・・・・・・・・煉獄よ」

刀身に炎をまとわせ、縦一閃。

「我との契約に従い、その力を我が剣に宿せ・・・・・・・・」

間髪入れず、横に往復しながらの一閃を叩き込む。

「仇を斬り、焼き焦がすっ……！！！」

再び大きく一閃した後、逆手に持つてから、飛び上がる。

「煉夜っ……地獄斬っ！！」

すれ違いざまに三度一閃。

エッグベアはしばらく呆然とした後、上半身と下半身を斜めにずらしながら倒れた。

斬り口は、ひどく焼け爛れていた。

だが、ナノハはそんなことを気にしない。

否、気に留める余裕がなかった。

彼女はちょうど、レイドと向かい合わせになっている。

故に、レイドの『右目』が見えていた。

黒曜石を思わせる光をみせる、

「ブラスティア
魔導器……！！？」

「……見られたんじゃ、話さなきゃな……
とりあえず、休憩しようか？俺達がこのエッグベアを倒したんだ、
魔物たちも警戒して近寄ってこないだろう」

「……そう、だね」

どっちみち、ナノハは動けないのだ。

レイドの提案を受け入れた。

ところどころ、骨折が見受けられたが別段命に別状はなかった。
切り傷や打撲といった軽傷は、グミやボトルで治療し、今はほとん

ど癒えている。

レイドはナノハと向かい合って座り、さきほどから何やら考えていた。

おそらく、話すことをまとめているのだろう。

ナノハはただ黙ってレイドの言葉を待っていた。

やがて、レイドの口が動き出す。

「・・・・・・・・・・十数年前の、人魔戦争は知っているか？」

「・・・・・・・・・・うん、文字通り人と魔物が争ったって聞いている・・・・・・・・・・ひどい戦いだっただってことも」

「かなり激しい戦いでな、俺が住んでいた所にも、戦火がきた、俺の本当の右目は、そのときに無くしたんだよ」

言葉を一つ一つ噛み締めるようにレイドは語り、ナノハはただ静かに耳を傾ける。

「普通なら、俺はあの時に死んでるはずだった・・・・・・・・・・だが・・・・・・・・・・」

レイドの表情に、幾分かの憎しみが籠った。

「・・・・・・・・・・父が、ずっと俺と母さんを放置していたあいつが、突然俺の前に現れて、勝手に目に武醒魔導器ボーディプラスティアを入れた、ずっと離れた地で他人のように振舞っていたあいつが、いきなり父親面して、俺に断りも無く・・・・・・・・・・だ」

「・・・・・・・・・・でも、お父さんは本当に助かってほしかったんじゃないの？だから、あなたが嫌がるって分かってもあえて・・・・・・・・」

「はじめは俺もそう思っていたさ・・・・・・・・・・けどな、もしこの世に悪が具現化した姿があるなら、まさにあいつがそうだよ」

ナノハはまた反論しようとしたが、黙り込んでしまった。

今の彼に対して、何も言っではいけない気がしたのだ。

だから、発言を躊躇した。

そうと知りつつも、レイドは続ける。

「俺の手術が成功してすぐ後、あいつは自分の部下にも魔導器を埋め込んだ、そして俺に言ったんだ『息子よ、感謝する、お前がサンブルになってくれたお陰で、人体に魔導器を入れても害が無いことが証明された』ってな」

「そんな……！あなたはただの実験台だったっていうの！？」

「ああそうだ、あいつにとって俺はその程度だったんだよ……」

いつのまにかレイドの目は、酷く冷たくなっていた。

午後、ナノハはテラスで、ヴィヴィオと涼んでいた。といっても、ヴィヴィオは遊び疲れ、今はナノハの膝を枕にして寝ている。

帰宅後すぐにエステルが治療をしてくれた。その時、女性陣にかなり心配されてしまったのはここだけの話である。

頭の中は、さきほどのレイドの話でいっぱいだった。

「ここにいたか」

振り返ると、レイドがこちらに歩いてきていた。ナノハは小さく笑って、視線を前に戻す。そのすぐ横に、レイドが座った。

「・・・・・・・・あのね」

そんな中、ナノハが口を開いた。レイドは黙って耳を傾ける。

「わたしとヴィヴィオの素性とか、この間の『杖』とかで、みんな疑っていると思うけど・・・・・・・・でも、わたしはみんなと一緒に笑うのが、楽しいから・・・・・・・・」

「だから」とナノハは続ける。

「だから……もうちょっとみんなの傍に居させて……」

レイドは何気なく、ナノハを見た。

ナノハはうつむいた状態になっていたので、表情は読み取れなかったが、何となく、目の前の仲間が不安で押しつぶされそうになっているのは分かった。

故に、レイドはナノハの傍らに歩み寄り、そつと頭を撫でる。

「……もうちょっと、じゃなくて、いつまでも居てくれてかまわない、だから、自分を追い詰めるのはやめてくれ……それに、俺が話したのは仲間であるお前に知って欲しかったからだ……お前のことを話すタイミングは、お前が決めてくれ」

一方のナノハは、レイドの優しい態度に罪悪感と疑問を抱いていた。

（どうして？……もつと疑っていいのに……わたしが言ってるのは我が侘なのに……それに……）
「……みんなを『騙している』のに……！」

体を震えさせ、身を縮める。

レイドはそれを泣いていると判断し、そつとその場を去って行った。

「……わたしも……話したほうがいいのかな……？」

「あいつが見つかったって本当か！！？」

勤務中だということにかなり乱暴にドアを開けて、赤毛を三つ編みで止めている少女が入ってきた。

部屋の奥のデスクで座っている女性は、その少女を幾分かなだめてから、

「せや、第56管理外世界『テルカ・リュミレース』……………」
「そこであの子の魔力が確認された」

「だったら早く……………！」

すると女性は再び少女を落ち着かせ、

「……………今、フィニーノ一等陸士が本局に航行艦の使用を申請している……………近いうちに、あの子を迎えにいくで」

「迎えじゃねえっ！！！」

少女が、怒号をあげた。

女性は驚きで一瞬肩をはねる。

「迎えじゃなくて……………『復讐』だ……………」

キラキラと光る少女の瞳を見て、女性は悲しそうに目を細めた。
少女は静かに女性の部屋を出て行き、

「そっだ……………あいつは裏切り者……………だから……………
……………覚悟しろ、なのは」

自分に言い聞かせるように、呟いた。

六番星（後書き）

今回レイドの秘奥義を出して見ました。

ちよいと無理矢理感ありますが、前々から暖めてたネタなので、出すことが出来て満足です（苦笑

次回は、不安が許容限界に・・・・・・？

それでは^^ノシ

七番星（前書き）

お待たせしました。

今回、ちよつと急展開です。

七番星

彼女に出会って最初の頃、よく思っていたのが、『笑顔を見たことが無いな』ということだった。

いや、『笑う』という行為自体は何度も見ている。

だがそれは一般で言う『愛想笑い』、『作り笑い』と呼ばれるもので、なんというか、『心からの笑顔』というのを見たことが無かったのだ。

俺の娘の前では、ごく稀にその笑顔を見せているようだが、やはりほとんどが作り笑いだった。

なんとなくだが、彼女がよくみせる笑顔に心当たりがある。

あれは精神に傷を抱えているときに見られるものだ。

かつての俺がそうだったから、言い切れないが、『そうだ』と言える。

故に、彼女には『笑って』ほしいと思っていた

それは仲間達も同じだったようで、これまでに、何気ないやりとりや、さり気無い笑える失敗で、幾度か挑戦してみた。

しかし彼女の反応は相変わらず、寂しそうに愛想笑いをするだけ。

まあ、それでもあきらめないのが俺含めた仲間たちなので、今日までずっと続けているわけだが。

それともう一つ、出会った頃からずっと思っていたのが、『優しい』ということである。

………つい先日、『右目』について告白した。

これまでに会ったものは皆、俺を『右目』を見たたん、『欲まみれの好奇の目』で見てきたものだ。

今のギルドの仲間達はそんなことをしなかったのだが、やはり気になってしまう。

彼女もまた、『好奇の目で見て』くるのか、それとも『下手な同情の目で見て』くるのか、いずれかだろうと思っていた。

だが、彼女は違った。

確かに目は同情していたが、下手なものではなかった。涙を見せず、かといって感情無いがわけでも無し。

ただ静かに奥のほうで優しさと哀れみを持っていた。

出会った頃から、『ただ者ではない』と感じていたが、それはこのことなのかも知れないと、最近よく思う。

ちなみに、そのころから彼女に妙な感情を抱くようになった。

なぜか、前よりいっそう彼女の『笑顔』が見たくなったのだ。

日に日に大きくなっていくその感情に耐えかね、思い切って仲間内で年長者である三人に相談してみた。

すると三人はポカンとした顔でそれぞれの顔を見合わせながら、俺にとっでは思いがけない結論を教えてくれた。

・・・正直、その結果に一番驚いたのは俺自身であることをここで言っておこう。

なぜ彼女が故郷を追われたのか、あの『杖』は何なのか、疑問が多く残るが、そんなものは後回しでかまわない。

純粹に、仲間であるが故に願う。

どうか彼女とその娘に、永遠の安寧がありますように。

とある青年の日記より。

「ふう・・・・・・・・・・よし」

捲り上げた袖を戻しながら、ナノハは満足そうに頷いた。

「あれ？なんかいいにおい！」

「たしかに、何かお菓子かな？」

そこへ入ってきたのは、カロールとレイヴンだった。

ナノハは台所からひよっこり顔を出して、二人を見つけると、

「レイヴン！カロール！ちょうどよかった、これ、飲んでみてくれる？」

「これって・・・・・・・・・・それ？」

「カフェオレか何か？」

レイヴンはおぼんの上ののっているそれを指差し、カロールは実際に手を取ってまじまじと見る。

「ううん、『キャラメルミルク』っていうの・・・・・・・・・・お母さんからならったんだ」

ナノハは少しだけ曇った笑顔で笑って、テーブルに二つ置いた。

「そっか、じゃあナノハちゃんにとってはお袋さんの味ってやつなのね」

「うん、でも久々に作ったから、出来栄が気になっちゃって」

「でも見た目は問題ないよ？」

そういいながら、レイヴンとカロルはコップに口をつける。
そして一口飲んでから。

「……………どう？」

「おいしいよ！」

「そうだね、これならおっさんとかでも飲めそうだし、それにユーリ辺りが何杯もおかわりしそうだね」

「あははっ、ユーリ甘いもの好きだもんね」

そう言っで、ナノハは笑顔を見せた。

レイヴンとカロルは笑い返ししながら、もう一口。
するとそこへ、

「なんだかいいにおいがします！」

「これは……………キャラメル？」

「何か作っているのかしら？」

「ま、うまけりや何でもいいけどな」

「でも、なんだか期待できそうなのじゃ！」

「……………甘い、のか？」

「ワフウ？」

「これって……………もしかして！」

複数の覚えのある声のあと、一番に入ってきたのはヴィヴィオだった。

ヴィヴィオはナノハが手に持っているものと、おいで何なのか分かったようだ。

嬉しそうに、それでいて懐かしそうに笑って。

「キャラメルミルクだぁ！」

するとヴィヴィオは驚くべき速さで洗面台へ行き、手を洗い始めた。ポカンとする一同を他所に、ユーリはテーブルへ近寄り、おいてあったコップを一つ取ると、一口飲む。

「お、うまい！」

「ほんと？……あ、ほんとだ」

「しつこすぎない甘さね」

「海の漢もほれぼれする味なのじゃ！」

「そうですね！これ、ナノハが？」

「そうだよ、キャラメルミルクって言うの」

ユーリに続いて、リタ、ジュディス、パティ、エステル順番で、ミルクを口にしたらあと、感想を述べた。

「ママ！手え洗ってきた！」

「ワン！ワン！」

「うん、二人の分もちゃんとあるよ、ちょっと待っててね？」

「ワウツ！」

ヴィヴィオには手のひらを見せて、ラピードには前足で催促された。ナノハは、頭を撫でて彼らをなだめてから、ラピードのために犬用の器を取りに行く。

が、そこでレイドが食堂の入り口で、難しい顔で突っ立っているのに気づいた。

ナノハは一旦立ち止まってから、

「どうしたの？レイドの分もあるけど……」

「いや……その……」

するとリタがこちらを向いて、

「レイド、甘いものだねなのよ」

「ほんとにもつたいないわ」

「水平線の夕日を見ないくらいなのじゃ」

続けてジュディスとパティが、便乗した。
それを聞いたナノハは申し訳なさそうに、

「そうだったんだ．．．．．ごめん、知らなかった．．．．．
．．．」

「．．．．．出された分は飲むさ、とりあえず、くれないか
？」

「．．．．．うん」

ナノハは乾いた笑顔で答えてから、さっそく台所へ向かった。

レイドは出されたキャラメルミルクをつかのま見つめてから、一口。

「．．．．．うまい」

「．．．．．ええ、ほんとう!？」

「無理してないでしょうね!？」

「あ、ああ、思ったより甘さ控えめで、飲みやすい」

「一応いろんな人が飲めるような味付けにしてるからね、でも、よかった!」

レイドの感想に、驚いて食いつくレイヴンとリタ。

ナノハは嬉しそうに笑っている。

「ママはお料理上手だもんね!」
「ワンツ!」

その隣で、ヴィヴィオはラピードと笑い（？）あっていた。

「ふう……………」

結論からして、キャラメルミルクはギルドの皆に気に入ってもらえた。

ナノハは今、一人で部屋でくつろいでいる。

……………実を言うと、先日の任務での一件を聞いたエステルが、「いい加減休みなさい！」と、半ば強引に部屋に押し込んだの

だが。

それでも、体のだるさは相変わらずだが、最近いくらかましになってきた。

だが、いつもなら働いている時間。

やはり何かしていないと落ち着かないものだ。

さて、どうしたものかと、思考に浸りだした時だ。

窓の外からけたたましい鐘の音が響いた。

ナノハはすぐに立ち上がり、外を見る。

視線の先には、見張り台があつた。

「やつぱり………！」

見張り台に備えられている鐘………警鐘が鳴っているのを確認し、小太刀を携えて部屋を飛び出した。

「こつちだよ！」

「慌てないでください！」

街の外に出ると、カロールとエステルが外に出ていた人民の誘導を行っていた。

そのいくらか離れたところには、土煙が立っている。

信じられない話ではあるが、あの土煙全てが魔物なのだ。

テルカ・リュミレースでは、十や二十で表しきれない数の魔物が、時たまこのように発生して、集落や街を飲み込むことがたびたび起きる。

その度に街や村を守るため、ギルドや騎士団が奮闘するのだ。

「エステル！カロール！」

「ナノハ！」

「街のみんなの避難は！？」

「今の人たちで最後のはず！」

「あそこでユーリたちが戦ってます！わたし達も……………」

「うん！急ごう！！」

エステルは片手剣を、カロールは斧を、そしてナノハは小太刀を構えてから、土煙へ向かって走り出した。

一方、ハルルの街では、

「今のやつらで最後か！？」

「そのはずだ！」

エステルやカロールと同じく、人民を誘導している男達が避難者の確認をしていた。

ヴィヴィオもギルドメンバーの娘として一緒に誘導を行っていたが、人民の避難がひと段落したことにほっと安堵のため息をつく。

今回のような魔物の襲撃が起こるたび、街の外で母が戦っているのだ。

自分も何かしなければ、と心に決めていた。

「だいじょうぶ？」

「な、なんとか・・・・・・・・・・」

街の入り口近くで、辛そうに息をしている同い年くらいの子供に、声をかける。

不安でいっぱいな時に、誰かに声をかけてもらうのは大事なことだとヴィヴィオは考えている。

『かつての自分がそうだった故に』だ。
と、その時、

「うちの子はいませんか!？」

「まさか・・・・・・・・・・あんたんとこの息子さん、まだ帰って来てないのかい!？」

「外に野草を採りにいったきり・・・・・・・・・・!!」

ヴィヴィオは不安げな顔で外を見た。

むこうの方では土煙がもうもうと立っており、母達がそこで戦っている様子が用意に想像できる。

女性は泣き喚きながら外を見つめ、男達はおろおろとしていた。

子供を助けに行きたいものの、あの土煙に入っていく勇気が出なか

った。

ヴィヴィオの心の中で、良心と躊躇いが渦巻いている。
もう一度、女性を見る。

我が子を思い泣きじゃくる彼女をみて、ヴィヴィオは手を握り締め
た。

立ち上がって、土煙を睨みつける。

・・・正直、恐怖は拭えていない、怖い。

だが、

「・・・だいじょうぶ」

暗示をかけるように小さく呟くと、思いっきり走り出した。
大人たちの制止を聞き入れず、ただ走っていった。

「閃空裂波っ！」

「臥竜アッパー！」

「蒼破刃！」

「魔神拳！」

「崩襲月！」

「ワンっ！」

ナノハ、カロール、ユーリ、レイド、ジューデイス、ラピードの前衛メンバーは、怒涛の連撃を繰り出し。

「聖なる槍よ、敵を貫け、『ホーリーランス』！」

「ゆらめく焔、猛槌！『ファイヤーボール』！」

「ポン、チー、カン、ロン、ツモ、『ジャンパイ』！」

「カチカチツルツルピキピキドカーン？『インヴェルノ』！」

エステル、リタ、パティ、レイヴンの後衛・中衛メンバーは術で前衛をアシストする。

先ほどから奮闘していたお陰か、魔物の勢いもいくらか落ちてきた。あともう一押しといったところである。

「・・・・・・・・つ」

ナノハの体が傾きかけ、防御が取れなくなる。

が、ラピードがすぐに飛んできて、魔物を打ち倒した。

「ワン！ワンワウっ！」

そして、ナノハに向け一声吠えた。

まるで『無理をするな』と喋っているようだ。

ナノハは苦笑いをしてから、

「ありがとう、ラピード」

手短かに感謝を述べ、再び小太刀を降り始めた。

ラピードもまた、戦いに専念し始める。

剣が肉を斬り裂き、炎が生き物を焼き、銃弾が体を貫く。

相手こそ、人に害をなす存在とはいえ、そこでは生きるための『殺し合い』が行われていた。

そんな中、エステルは背後に気配を感じる。ばつと振り向くと、10歳にも満たない男の子が、尻餅をついていた。

腰が抜けているのか、立ち上がろうにも立ち上がれないようだ。さらに膝には、擦り傷が見受けられる。

（最初に見つけたのが自分でよかった）

そう思いながら、エステルはすばやく男の子に駆け寄り、治療術で傷を塞ぐ。

安心させるように頭を撫でてから、自分の傍にいるように言い聞かせ、守るようにして立った。

と、その時だ。

四方八方から、魔物が一気に飛びかかってきた。

エステルを猛者であると本能的に判断した結果なのだろう。

実際、エステルは突然の事態に、思わず動きを止めてしまった。

やがてそれが命取りになってしまうことに気づいたが、もう遅い。

防御も詠唱も間に合わないと判断し、男の子を守るために、覆いかぶさるように抱きしめた。

魔物があと少しで自分に到達するかと思われた時。

「やあああああああつ！！！」

掛け声と共に、魔物が全て吹き飛ばされた。

誰か助けてくれたのかと、エステルが顔を見上げると、

ハニーブロンドの長い髪を、サイドで結い上げている17〜18少女の姿が、目に入った。

その少女はゆつくりと、エステルの方を振り向く。
エステルは少女の両目を見て、己の視覚を疑った。

だが、少女の目は間違いなく『右翠左紅のオッドアイ』だったのだ。
彼女の知っている範囲で、そんな目を持つのは後にも先にも一人しか居ない。

しかしそれ故に、視覚を疑った。

他のメンバーもそれが同じだったようで、特に親であるナノハが大きく目を見開いていた。

エステルが、驚愕で硬直してしまった顔の筋を無理矢理動かして問いかける。

「・・・・・・・・・・ヴィヴィ・・・・・・・・・・オ・・・・・・・・・・？」

時間を少し遡る。

ヴィヴィオは草原を走っていた。

もちろん、あの女性の子を探すため、である。

戦闘的な面で無力な自分でも、それぐらいならできるだろうと踏んでの決断だった。

あの母のことだ、自分を心配して、怒るかもしれない。

そのことを考えると少しだけ気持ちが沈んでしまったが、それ以上に、救えるはずの誰かを見殺すのは嫌だ。

「……なんのことはなく、ヴィヴィオもやはりナノハの娘だった。」

血はつながっていないくとも、その『魂』というか、心意気をしっかりと受け継いでいた。

「……あ！」

遠くの方に、それらしき男の子を見つけた。

すぐ傍にエステルが居たため、『なら大丈夫だ』と走る速度を落とした直後。

二人が、魔物に囲まれた。

ヴィヴィオは慌てて、再び走り出す。

だが一瞬速度を落としたのが仇になったか、到底間に合いそうに無い。

「……その時、彼女は自身の『切り札』を頭に思い浮かべた。

しかし『あれ』は自分の出生にかかわると共に、母の『トラウマ』を決り出す切欠になりかねないものだった。

一瞬迷い、目の前で危機に陥っているエステルを改めて見てからもいくらか迷う。

エステルと男の子に、あと少しで魔物の爪や牙が、届きかけた。

次の瞬間、ヴィヴィオの脳裏に、ハルルに来てからの記憶が蘇る。

素性が分からない自分と母を助けてくれたギルドのメンバー。

流れ者だというのに、分け隔てなく接してくれた近所の奥様方や子供達。

それらを数秒の間に思い浮かべたヴィヴィオは、表情を引き締める。

ママを困らせるのは嫌………だけど。

もう我武者羅に、己の中に眠る『力』を解放した。

みんなが泣く顔を見るのは、もつと嫌！！！！

「やあああああああつ！！！！」

勝つと思っていたのに、それを一瞬で覆され、戸惑う魔物達。いくらかヴィヴィオに向けて吠えたりうなったりしてみても、今の彼女には無意味だった。

やがて、内の一匹が突っ込んでくる。

ヴィヴィオはすぐに反応し、

「ごめん、エステルおねえちゃん・・・・・・・・借りるね」

そういつてエステルの手から片手剣を取ると、魔物の顎から先を両断した。

初めて斬った魔物の感触に少し戸惑いを見せたが、無理矢理それを押し込めると、剣を構え、魔物をにらみつけた。

魔物達は、本能的に恐怖を感じていた。

目の前の人間のメスは、戦いは素人のはずである。

しかし、そうとは思わせない気配が、彼女の周りにあった。

いくらかたじろぐものの、実力はさほど無いと判断。

再び一斉に飛び掛った。

ヴィヴィオはなるべく慌てないように勤めながら剣を逆手に持ち替え、普段見ているナノハたちの動きを見よう見まねで再現しながら、

一匹一匹、確実に捌いていった。

その動きは、所々隙や危なげなところが見受けられたものの、初めてには十分だった。

再びヴィヴィオと距離を取る魔物達。

一方の彼女は剣を逆手に持ったまま、目を閉じて、集中し始めた。すると、刀身に虹色の光が集束していく。

それを危険と判断した一匹の魔物は、ヴィヴィオに飛び掛ってきた。しかし魔物が到達する前に、光の集束が終わる。

かつと目を開いたヴィヴィオは、飛び掛ってきている魔物に向け、

「蒼破刃っ！！」

光を撃った。

それは魔物に直撃し、同時に絶命させる。

と、残りの魔物が一斉に突進してきた。

もう魔物達はやけになっているようだった。

ヴィヴィオは慌てることなく、次は拳に光を集束させて、再び、

「魔神拳っ！！」

撃った。

次に相手の攻撃を、拳、脚、剣で全ていなして反撃する。

直後、ヴィヴィオの足がすくわれた。

大きく体制を崩しつつも、ヴィヴィオは足元に目をやった。

ねずみのような魔物が、足に体当たりをしてきていた。

苦虫をつぶしたような顔で、倒れる寸前に手をつき、転倒をまぬがれるヴィヴィオ。

しかし、防御の体制までは取れなかった。

魔物の爪が、刺さりかけたその時。

「煌いて、混沌の力！『フォトン』！！」

ヴィヴィオの前で光が集束、次の瞬間はじけて魔物を吹き飛ばした。はっとして視線をずらすと、エステルが手のひらをこちらに向けていた。

先ほどの光は、彼女の術だったようだ。

エステルは男の子の手を引き、ヴィヴィオのそばに駆け寄ると、再び詠唱を始めた。

「聖なる活力、ここへ、『ファーストエイド』！」

光がヴィヴィオを包み、体の所々についた擦り傷や切り傷を治癒していく。

「とりあえず、話はあとで聞かせてもらいます、今は一緒に……」

「………はいっ！」

エステルは盾を、ヴィヴィオは剣を構えて、魔物たちを睨んだ。がしかし、

「みんな離れて！でかいのぶっ放すわよ！！」

離れたところに居たりタガ、闘気を解放した状態………オーバリーミッツを発動させた状態で帯を構えていた。

エステルとヴィヴィオは顔を見合わせてから、エステルが男の子を抱えて、バックステップでその場を離脱する。

「天候みつる所に我は有り！黄泉の門開くところに汝有り！」

リタの目の前に魔方陣が現れ、魔物達を取り囲む。
と、同時に魔方陣が雷を帯び始めた。

「出でよ、神の雷^{いかづち}！！これで終わりよ！『インディグネーション』
！！」

突如、上空に展開されたもう一つの魔方陣から巨大な稲妻が放たれ、
魔物達が一気に『蒸発』した。

今日もまた、騒動を治めることができた。

しかし、残った問題がある。

エステルはヴィヴィオを見た。

ちようど、あの虹色の光が舞い、元の7歳くらいの姿に戻っていた。
そこへナノハが駆け寄ってくる。

「・・・・・・・・・・ヴィヴィオ」
「・・・・・・・・・・」

怒られると思ったのか、若干うつむいてしまうヴィヴィオ。
しかし、目は堂々としていた。

しゃがんでから、ヴィヴィオに視線をあわせるナノハ。

ギルドの面々が見守る中、沈黙を保つが、

「・・・・・・・・・・無事でよかった」

そう言つて、優しく抱きしめた。

それが切欠で緊張が解けたのか、喜びと罪悪感でいっぱい顔をしながら、ヴィヴィオは目を閉じる。

そして声を立てずに泣き出した。

時々、「ごめんなさい」といつているのが聞こえるが、それでもナノハは優しく微笑みながら、ヴィヴィオの頭を撫でていた。

「・・・・・・・・ナノハ、水を差すようで悪いが」

ユーリが一步前に進み出て、真剣な表情でナノハを見る。
ナノハが顔を上げてから、仲間達を見渡した。
皆が皆、疑いの眼差しをしていた。

（さすがにもう・・・・・・・・隠し切れないか）

あきらめたような、困ったような笑顔を見せてから、

「分かつてる・・・・・・・・でも今はその子を街に返さないと、それに、ヴィヴィオも休ませなきゃ」

「・・・・・・・・ああ」

「それじゃあ」とナノハは立ち上がり、歩き出す。
仲間達も複雑な顔でその背中を見ながら歩き出した。

次の瞬間には、ナノハの体が傾いていた。

どさつと重い音を立てて、地面に倒れるナノハ。

一瞬面食らったギルドメンバー。

一番先に状況を理解し再起動したのはレイドだった。

「ナノハ！？おい！ナノハ！！」

「ちよつ、ナノハ！？どうしたの！？」

「ママ！？ママ！！」

「しっかりして！」

「倒れるには早すぎるのじゃ!!」

「あ、あまり揺らさないでください! 重い病だったら症状が悪化してしまいます!!」

次に復帰したのは、女性陣。

レイドを交えた6人は一気にナノハへ駆け寄った。

「お、おい! どうしたんだ!？」

「いきなり倒れるなんて何事よ!？」

「た、大変だ!!」

「ワン!ワン!」

最後に男性陣が復活して、うろたえ始める。

「とにかく! まずは街に戻ろう! ここにいたんじゃまた魔物に・・・」

「そうだな! 急ぐぞ!!」

カロルの提案に全員が賛成し、一同は慌しく帰還した。

スキット『どうして?』

リタ：ナノハが倒れるなんて………！

ジュデイス：やっぱり、無茶が祟ったのかしらね？

ユーリ：馬鹿野郎が………何でこんななるまで！

レイヴン：出会ったときからそうだったけど、ナノハちゃん、どこか思いつめてる感じがしたからねえ………

カロール：詮索はとりあえず後にしよう！とにかく街に戻ることで考えなきゃ！

エステル：そうですね、とにかく戻らないと！

ラピード：ワン！ワン！

パティ：そうなのじゃ！何かやばい病気とかだったら、それこそ一刻を争うのじゃ！

レイド：とりあえず、話はここまでだ！いくぞ！

全員：応っ！

ヴィヴィオ：………ごめんなさい、なのはママ

七番星（後書き）

次回、ついにナノハの秘密が・・・・・・・・？
それでは^^ノシ

八番星（前書き）

手の不調やネタの難産で大分遅くなりました；
さらにいつもより長いです；

八番星

あの後、一行は急いでハルルに戻り、男の子を母親の元に送り届け
た後、ギルドへと帰ってきた。

現在、エステルがナノハをベッドに寝かせ、治療術を施している最
中だ。

ジュディス、パティ、リタの三人はその補助、ヴィヴィオは食堂の
隅で、うずくまっている。

その傍にはラピードがついているので、おそらく大丈夫だろうとユ
ーリは考えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふう・・・・・・・・」

思わず、ため息がこぼれる。

それは他の男性陣も同じだったようで、ほぼ同時にため息をついて
しまったことに苦笑いしてから、再びほぼ同時にため息をついた。
ちょうどその時、エステルが出てきた。

ユーリは立ち上がり、

「どうだった？」

「外傷とか、症状は見られませんでした・・・・・・・・おそらく、
過労か睡眠不足と思われます」

エステルは安堵のため息をつきながら、そう告げた。
カロルはほっとした表情で、

「よかったあ・・・・・・・・それにしても、なんでナノハは無理し
たんだろ？悩みがあるなら、話してくれてもいいのに」

「不安だったんじゃないの？言ったらみんなに嫌われるって感じで」

「で、でも！」

レイヴンに何かを言い返そうとするエステルを、ユーリは突然手で制する。

「それだけ重大な問題ってことだろう……三年前、俺やおっさんやジュディが言わなかったみたいに、な」

また何かを言い返そうとするカロールとエステル。

だが言葉が見つからなかったのか、二人して押し黙った。

ユーリはそんな二人を見て、申し訳なさそうな笑顔を見せると、ヴィヴィオに歩み寄っていった。

そして視線をあわせる様にしゃがむ。

「……ヴィヴィオ、お前が話せる範囲でいい、ナノハとお前のこと、教えてくんねえか？」

ユーリの言葉に反応したのか、一瞬肩を動かすヴィヴィオ。

ゆっくりと顔を上げて、ユーリと視線を合わせた。

しかし、話していいのかどうか、悩んでいるのだろう。

少し、不安そうな顔だった。

すると今度はレイドがヴィヴィオに視線を合わせ、

「大丈夫、俺達は裏切らない」

真っ直ぐに目を見て、そう言い切った。

隣に居たラピードは「くうん」と鳴いて、安心させるようによりそう。

その時、上の階からリタ、ジュディス、パティが降りてきた。

状況を察したのだろう、ヴィヴィオと目が会うと、三人そろって安

心させるような笑みを浮かべた。

ヴィヴィオはもう一度、ユーリとレイドを交互に見る。
そして覚悟を決めたように口元を引き締めてから、

「・・・・・・・・みんなは、『異世界』って信じる？」

何も見えない真っ暗な空間。

今ここにいるのは自分一人だけのはずだ。
一人のはず・・・・・・・・なのだが。

どうして殺した？

どうして殺したんだ！？

俺達だって人なのに・・・・・・・・！

今は亡き者達が、血まみれで血の涙を流しながら、足に纏わりついてくる。

それをなんとか振り払い、逃げ出した。

待ああ・・・・・・・・てええええ

逃げるなああああ

後ろの方で怒りが響くが、かまっていられない。

走って、走って、走って、走って、走って、走って。

どれくらい来たか分からなくなった途端、誰かに肩をたたかれた。振り返ると、忘れもしない友人がいた。

彼女は笑いもしない、かといって怒りもしない、無表情で

「さいてい」

「っ………！」

その手を振り払い、再び走り出す。

いくらか進むと、向こうに一人娘の姿が見えた。

何故ここに？、と疑問を感じつつも、娘のそばに駆け寄ろうとして、気がついた。

どこか、様子がおかしい。

直後、娘の背後から真っ黒な闇の手が伸びてきて、娘を掴んだのだ。そしてそのまま闇へ引きずり込もうとぐいぐい引っ張り出す。

「助けてえ！！ママァー！！」

背後の空間の切れ目から、キラキラ光る目と刃が見えた。

「っヴィヴィオー！！」

それが何を意味するのかを瞬時に悟り、娘の名前を叫んで駆け出す。が、脚に何かがつかえ邪魔をした。振り払うために下を見ると、

「なのはさん」

「この、うらぎりもの」

見知った顔が、虚ろな目でこちらを見ながら足にまわりついていった。

短く悲鳴をあげ、滅茶苦茶に体を動かしながらも、娘を助ける為になんとか前へ進もうとする。

しかし、体は解放されるどころか、どんどん重くなっていく一方だ。同時に聞き覚えのある声が増えていった。

「なのは」

「なのはちゃん」

「なのはさん」

「いかせないよ」

「うらぎりもの」

「ひとごろし」

知っている声の一つ一つが、彼女を責め立て、追い詰める。

そうこうしているうちに、娘はかなり闇に引き込まれていた。

もう顔と片腕しか見えない。

ふと、視線が横にずれた。

すぐ隣に、親の顔があった。

ぼそぼそと聞き取りにくい声で、呪詛を唱えるように彼女を責めていた。

目を強く閉じて、前を見る。

もともと、目の前で危機に陥っている者を見捨てるほど酷ではないつもりだ。

それが家族なら、なおさらである。

「ママ!!」

娘が必死に手を伸ばしてきた。

こちらにも、必死に伸ばす。

友人、知人、部下、同僚がまとわりついている所為で、娘との距離をつめることが出来ない。

それでも、必死に伸ばした。

あと、もう少し、もう少しで娘に届きそうだった。

・・・・・・届きそう、だったのに。

「ヴィヴィオオオ

ッ!!!!」

「いやだあああああッ!!!!」

無情にも娘は完全に引き込まれた。

直後に、生き物が切り裂かれる音がどこからともなく聞こえてきた。全身の力が抜け、がっくりと膝をつく。

いつのまにか、まとわりついていた人たちはいなくなっていた。

気付けば、目から涙がこぼれていた。

本当にいつのまに來たのだろうか？俯いた彼女の視界に、娘の足が写る。

娘が無事だったことに驚きつつも、よろこびながら顔を上げる。

「ヴィヴィオ!?よかった」

「た」と言いかけて、固まった。

頭から、限界量の血液を流している娘が、そこにいた。

「うわあああああッ!!!!」

深夜。

フレイウ・ヴェスベリア

凛々の明星の食堂で茶をすすっているのは、ユーリとエステルである。

エステルは、ナノハの容態を見る合間の休憩のために、ユーリはエステルの補助のために起きていた。

「……異世界に、魔法、本当にあるんですね」

ポツリと、エステルが口を開ける。

ユーリはティーカップから顔を上げて、

「そうだな、ヴィヴィオにはちょっと悪いが、一瞬疑っちゃったよ」

そう、苦笑いする。

「そうですね……けど、あの子は嘘をつかない子ですから」
「だな、あとはあいつらがどうしてここに来たか……か」

するとエステルは笑って、

「けど、二人に何があっても……わたし達は『仲間』です」
「あたりまえだろ？」

そういつて、二人笑いあった時だ。

「うわあああああつ！！！」
「っ！？」

絶叫が響いた。

音源はナノハの部屋のようだ。

二人は同時に立ち上がると、ナノハの部屋へと急ぐ。

「なに！？いったいなにが起こったの！？」

「どうしたのよぉ？こんな夜遅くに！？」

「叫び声しなかった！？」

「なにがあつたの！？」

「何事じゃ！？」

「どうしたんだ！？」

叫び声を聞きつけ、ユーリとエステル以外の仲間達もナノハの部屋の前に集まっていた。

「ふがあつ！？」

その時扉が勢いよく開かれ、それがレイヴンの顔面に直撃する。
続けて、ユーリとエステルに何かがぶつかった。

ユーリはとっさに倒れかけたエステルを支えて、ぶつかった相手を
確認するために振り返る。

すると、階段を駆け下りる見慣れた亜麻色が見えた。

「まさか……………」

周りは真っ暗。

たよりになるのは月明かりだけ。

息を切らしながら、ただ一人走り行く。

何度も躓き、何箇所も肌をすりむいて、それでもひたすらに走る。

目的地など無い、ただただ逃げ出したかった。

何から？と聞かれても、答えることが出来ない。

それでも走る、脚を動かし、体を前方に傾け、風を切るのみ。

ふと気がつけば、膝を折って座り込んでいた。

「そっちいたか！？」

「いや、ダメだ！レイヴンの方は！？」

「残念！いないわぁ！リタツちは？」

「こっちもだめだわ！いない！」

「こっちにもいません！」

「こうなったら・・・最悪の場合も考えなければいけないかもね」
「ワンッワンッ！」

夜のハルルに、ユーリたちの声が行き交う。

ユーリ、エステル、リタ、レイヴン、ジュデイス、ラピード、レイドは月明かりを頼りに走り回っていた。

カロルとパティはヴィヴィオの側にいる。

仮に魔物が襲撃してきても遅れを取らないだろう。

そしてユーリは、ジュデイスが口にした『最悪の場合』を思い浮かべ、苦い表情をした。

「これだけ探していないとなると・・・ジュデイスの言うとおりかも知れないな」

「そうねえ、探し始めたばかりなら単に俺等が見落としてるってこともあったかもだけど・・・」

「やっぱり・・・」

六人と一匹の視線が、一点に集中する。

そこでは広大な草原が夜風に煽られ、たださわさわと音を立てているだけだった。

「じゃあ・・・いくか？」

「それしかないだろう」

「となると・・・頼りはラピードだな、頼めるか？」

ユーリはラピードを撫でながら、不適に笑う。

それに答えるように、ラピードは一声「ワンッ」と吠えた。

昔から一緒にいるパートナーならではの光景だった。

閑話休題。

夜も大分更けてきた。

途中魔物と戦いながらも、ラピードの鼻を頼りに進んでいく。

ナノハは無事だろうか？

仲間として人として、それだけを考えながら再び魔物との戦闘を始めた。

気がつけば雨の臭いが当たりに立ち込めている。

一行が走っていると、離れたところに人影が見えた。

するとラピードはワンッと吠えて、走る速度を上げた。

それに合わせて、ユーリ達も足を動かす。

近づくにつれて人影の輪郭がはつきりし始め、やがてぼんやりとだが色も分かってきた。

月明かりに、亜麻色のショートヘアが揺れている。

ナノハだった。

小太刀を帯刀せず、周囲を警戒する様子も見せず、膝について顔を俯かせているだけ。

辺りが暗いということもあってか、表情は読み取れなかった。

「……………ナノハ？ナノハ！！」

仲間内の緊迫した雰囲気は少しだけ和らぎ、総員速度を落としながら、エステルがいち早くナノハに駆け寄ろうと前へ出る。しかし、

「こないで!!!」

ナノハは何の前触れも無く、きつぱりとそれを拒絶した。
突然のことに思わず足を止める一同。

「お願いだから……みんなこないで……!!!」

それに構わず、ナノハはなお拒絶の言葉を紡ぐ。

エステルは困惑しながらも、一步一步前に進み、ナノハに近寄っていく。

「ど、どうしてですか？あなたを探してたんですよ？」

「……分かってる……みんな探してくれたのは分かってる……」

「けど」とナノハは続けた。

ふと、意識を周囲へ向けると、雨が少しずつ降り出している。

「……甘えたくない……ちがう……甘えちゃいけない……っ」

段々と、ナノハの声がかすれてくる。

泣いているのだろうか？

そんな感じのかすれ方だった。

「だから……だから……」

……出会った時から、心に何かしらの闇を抱えていたのは目に見えていた。

ただ、それは予想以上に深く根を下ろしていたようである。そして目の前にいる仲間は、助けを拒絶した。

場合によっては、一人にした方がいいのかもしれない。それでも、

「……………ナノハ……………」

「お願いエステル……………みんなも……………近づかないで……………!!」

また一步踏み出したエステルを、弱々しく拒絶するナノハ。よく見ると、体が小刻みに震えている。

周囲に目をやると、雨粒がぼつぼつと落ちていた。しばらくナノハを見つめるエステルとユーリ達。

一方のナノハは、罪悪感で押しつぶされそうになっていた。

そもそも、脳裏で渦巻いている感情が何なのかすら分からない。

単純に、恐ろしく、どこまでも暗く、孤独で、不安だった。

すると少し離れたことから、がさがさつと、草むらを踏む音が聞こえてきた。

おそらく自分を探し見つけ出した仲間の一人が近づいてきているのだろう。

来て欲しくなかった、甘えてはいけないから、独りにして欲しかった。

だが、拒絶の言葉が出てこない。

必死に何か単語を紡ぐと、口をもごもご動かしている時だ。

何か暖かいものが、自分を包み込んだ。

「甘えてもいいんですよ？」

聞こえてきたのは、柔らかく、どこかほつとさせるソプラノ。エステルだと気づくのに、そう時間はかからなかった。

「………ヴィヴィオから聞きました、あなたは異世界から来た人で、優秀な魔導師として有名だったことも」

自然と、ナノハを抱く力が強くなるのが分かる。

「けど、それだけじゃないですか、結局は私たちと同じ、人間じゃないですか」

先ほどから降り始めていた雨粒が、だんだんと大きくなってきた。

「だから、泣いてもいいんです、甘えてもいいんです………
・怖いなら怖いっていいんですよ？」

本格的に雨が降ってきた。

顔に当たる雨粒に、自然と目を細めてしまうユーリ一行。

うあああああ！うわああああん！わあああああん！！

それでも、狭まった視界の中ではつきり移ったのは、エステルに抱きつき、子供のように泣きじゃくるナノハの姿だった。

「みんなごめん・・・・・・・・その、ありがとう」

無事ナノハを発見し、ギルドに戻ってきた一行。

塗れた髪をタオルで拭きながら、ナノハが申し訳なさそうに謝罪と感謝を述べた。

「いいわよ、ただ、あんまり抱え込まないでね？」

「ああ、でないと見てるこっちも辛くなってくる」

「ワン！」

同じく頭を拭きながら、リタ、レイドと、ラピードが答える。

「ママ！」

騒ぎでおきてしまったのか、ヴィヴィオが降りてきた。

ナノハは寂しそうに笑って答え、ヴィヴィオの頭を撫でた。

ヴィヴィオは、どこか罪悪感のある顔でナノハを見る。

それがなにを意味するのかを、理解したのか、ナノハはしゃがんでから、

「大丈夫、どうせ話さなきゃいけないことだから・・・・・・・・・・むしろ辛い思いさせて、ごめんね」

そう言って抱きしめた。

大方拭き終わったところで、食堂に入っていた。

そして、椅子に座り真剣な表情になる。

「さて……………それじゃ、話してもらおうか？」

ユーリは、視線をいくらか鋭くさせて、ナノハを見た。

向かい側に座っていたナノハも、どこか決意した表情で、口を開こうとした。

しかし、半開きになったところで、動きが止まった。

「仕切りなおし」と、一旦口を閉じ、再び開こうとした、開かなかった。

言葉を発しようとした、発せられなかった。

なんでもいいから声を出そうとした、出なかった。
気がつくとも体が震えている。

「なんで……………なんで……………!?」

震える喉からやつのことで搾り出されるのは、同じように震える情けない声だけ。

その様子を見かねたのか、ユーリはナノハとヴィヴィオ以外のメンバーに目配せした。

ユーリの意図を掴んだのか、全員が幾らか迷った後、首を縦に振った。

「……………なんでか教えてやろうか？」

戸惑うナノハに、ユーリはどこか安心させるような顔で語りかける。

「お前が言おうとしていることが、普通他人に漏らせば嫌われることだからだ」

それを聞いたナノハは、どこか驚いた顔をして、うつむいた。

束の間、その様子を見ていたユーリは、何の前触れもなく語りだす。

「最初に言っておくけど、俺達はお前達が異世界から来ているのが、ヴィヴィオが昔実在した王様のコピーだろうが、お前の本名が『高町なのは』で『不屈のエースオブエース』と呼ばれているのが、知ったこっちゃねえ」

ナノハの肩の震えが少しだけ収まったのが分かる。
だから、ユーリは続ける。

「この際だ、俺達のこと、暴露するよ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・へ？」

突然の宣告で呆けるナノハを他所に、エステルが口を開く。

「もう知っていると思いますが、私は皇族です、けど、魔導器《ブラスティア》無しで術技を使用できるのは私が古の一族『満月の子』の末裔だからなんですよ」

次に口を開いたのはレイヴン。

「おっさんの本名は『シュヴァーン・オルトレイン』、先の大罪人『アレクセイ・ディノイア』直属の部下で、ギルドに入っていたのもスパイ活動のためなのよね」

続けて口を動かしたのはパティだった。

「うち、実は『アイフリード』なんじゃ、わけあってこの幼い姿になっただけ・・・・・・・・・・ついでじゃが『ブラックホープ号事件』に

ついては、うちのギルドは無実じゃ、さっきレイヴンがいったアレクセイにはめられたにすぎん」

継いで話し出すのはジュデイス。

「わたしは昔、ヘルメス式という魔導器プラスティアを壊して回ってたの、大っぴらに動けない始祖エンテレケイアの隸長という種族に代わってやっていたんだけど………ナノハみたいに独りで抱え込んでいたわね」

リタが、ジュデイスの話が終わったところでしゃべりだした。

「あたしは三年前まで魔導器プラスティアしか信じてなかったわね、そのために無茶もいっぱいやったわ」

次に語るはカロルだ。

「三年前のボクは、ユーリ達に出会うまでは『情けない』ってしか言いようの無い奴だったよ、自慢できるのは手先の器用さと、所属したギルドの数だけだったよ」

そして、ユーリが語りだす。

「俺は昔、正義を語って人を二三人殺したことがある、そうでもしなきゃ救えなかったことは事実だけど、その後『なんで相談しなかったんだ』って、みんなに怒られたな」

最後に、レイドが口を開いた。

「この布に巻かれている剣は宙の戒典デインノモス、俺が三年前にとある人物から受け継いだものだ、以来、星喰みの原因である『エアルクレーネ』

を沈めて回る役目を担っている」

「それと」と、レイドは続ける。

「もう一つ……俺の本名は『アレクト・ディノイア』……ファミリーネームからお察しの通り、先の大罪人『アレクセイ・ディノイア』の実子なんだよ」

間髪居れずに、それぞれの過去や秘密を打ち明けられたナノハは、ただ呆然とするだけだった。

ぽかんとしたまま、再びうつむくナノハに、ユーリは困ったように笑いながら、

「ようするに、ここに居る連中は皆ワケ有りなんだよ、だからお前一人増えたところで何の問題もねえわけだ」

しん、と静まり返る食堂。

すると、ナノハが短く、乾いた声で自嘲的に笑った。

「あははっ……わたしも……わたしもユーリと同じだよ……救うために殺した、二丁三人とかじゃなくて、もっとたくさん」

聞いている全員が息を呑むのを感じながら、ナノハは続ける。

「とある街を私物化している官僚がいたの……初めてその街に行ったときは気づかなくて……本当にうまく隠されてたよ」

ユーリは黙って聞き入るだけ。

「街の人を実験動物にして、違法研究を何度も何度も繰り返してた・
・・・・・始めは殺意なんて無かったよ、けど、なんとかしな
きゃって思っで、裁判を起こしたの」

レイヴンはいくらか驚いたような顔で、ナノハを見ている。

「けどね、いざ裁判って友達や仲間で必死にかき集めた証拠が、
全部相手の手で消されてた・・・・・裁判が進むにつれ追い
詰められていって・・・・・拳銃の果てにはヴィヴィオを人
質に、告訴を取り下げろって言われてたよ」

パティは顔をしかめていた。

「ある日にね・・・・・思ったんだ、『もう一度あの街にい
って、告訴を取り下げるか、そうしないか、決めよう』って、そこ
で、あと何日か後で研究所に送られるっていう子に会ったの」

カロルはほんの少しだけ寂しそうだった。

「その子が言ったんだ、『研究所に連れて行かれるのは、私で最後
にさせてください』って『わたしより年下の子が連れて行かれない
ためにも頑張ってください』って、それで・・・・・殺人を
決意した」

リタは愕然としている。

「夜中、その官僚を待ち伏せしてたの・・・・・もともと剣
が武器じゃないんだけど、接近戦を少しでも有利に出来るようにっ
て、お父さんから習ってたの、『神速』はそのときにたまたま覚え

「ただ」

エステルは、困ったように笑うナノハを、やりきれなさそうな顔で見つめていた。

「そして………殺した」

ジユデイスの眉間にしわがよった。

「本当は後先考えてなかったの………ただ、ヴィヴィオとあの子が助かればよかった」

「けど」と続けるナノハを、レイドは黙って見つめる。

「殺したすぐ後に………友達が来たんだ、それで………『最低』って言われちゃった、それで思ったんだ、『わたしはわたしの居場所を壊したんだ』って」

もはや、全員が黙り込んでいた。

誰も物を言わず、それでいて静かに拳を握り、震わせていた。

「実はこの世界………第56管理外世界『テルカ・リュミリス』には、一度任務で来たことがあるの、ミッドとの接点もないから、隠れるには最適だった」

最後にナノハは、困ったように笑った。

「な………何が………」

しばらく続いた沈黙を、リタが破る。

「何が最低よ！！友達ならナノハがどれだけ悩んでるのか分かってたはずでしょ！？？例えば人殺しやったって、何があったか聞くのが道理じゃない！！！」

「そうね・・・・・・開口一番で『最低』は無いわ」

「そうじゃ、友達といいながら一番わかつとらんのう」

リタは心底怒っている様子だった。

ジュデイスやパティも、眉間にしわを寄せていた。

「・・・・・・ナノハ」

エステルが、ナノハの頭に手を置いて、動かす。
俗に言う『撫でる』という行動を取っていた。

「よくがんばりましたね、えらいですよ」

ナノハの肩が、再び震えだす。

ユーリ達はその様子を暖かい目で見つめていた。

その後。

ナノハとヴィヴィオが就寝しようとしていると、女性陣が入ってきた。

何用かと聞くと、

「一緒に寝ましょう！」

ということらしい。

ナノハは、困ったように笑いながらも、快く了承。
部屋にはいつもより多くの寝息が聞こえることとなった。

この夜、ナノハはうなされることなく、久々に熟睡出来た。

スキット『うれしい?』

エステル：お邪魔します！

リタ：来たわよ！

ナノハ：え？

ヴィヴィオ：みんな!?

パティ：一緒に寝るのじゃ！

ジュデイス：みんながいれば怖くないでしょう？

ナノハ：ちよ、そんな、いいの？

リタ：悪い夢にうなされて、睡眠不足になったのはどのどなただ
っけ？

ナノハ：うぐっ………で、でも

エステル：いったじやないですか、甘えていいんですよ

ジュデイス：というか、甘えなさい

パティ：そうじゃ！イソギンチャクとクマノミのように、助け合い
も大切じゃぞ？

ナノハ：え、あ、でも………うん、ありがとう
エステル：ふふっ、じゃあ今日はみんなで寝ましよう！
ナノハ：あはは、うん

ヴィヴィオ：ゝ
パティ：ヴィヴィオ、うれしそうじゃな
ヴィヴィオ：だってあんなに笑ってるママ、久しぶりだもん！
パティ：そうか、それはよかったのう！
ヴィヴィオ：うん！

八番星（後書き）

いつもメモ帳で書いているわけですが、投稿を始めて以来最大の19KBを記録しました；

『とある姉』をふくめ、いつも長ったらしくてすみません；

九番星（前書き）

いつもより短めですが、フラグをいくつか立てておきました。
それではどうぞ

九番星

わたしが知らないうちに、ママは凄く傷ついていた。

悪い人と裁判で戦っている時にわたしが人質にされた所為で、フェイトママたちとはなればなれになってしまった。

．．．．．どうして悪い人たちが、わたしを人質にしたのか、良く分かる。

わたしが弱いから、いざって言うときに力を出せないから。

だから、ママを追い詰めるために使った。

こっちに來てからのママは、心の底から笑ったことが、ほとんどない。

きつとわたしが思っている以上に、辛かったんだ。

友達のフェイトママに嫌われて、苦しくて苦しくて．．．．．。

けど、ずっと我慢をしていた。

『不屈』だからって、『エースオブエース』だからって。

それで辛い気持ちを押し込んで、悪い夢ばかり見るようになって．．．．．。

エステルお姉ちゃんに抱きついて、たくさん泣いてたって、リタお姉ちゃんから聞いた。

．．．．．わたしが、わたしが強かったら、こんなことにならなかったのかな？

ママは悪い人を殺さずにすんだのかな？フェイトママに嫌われないですんだのかな？

．．．．．わたし、強くなりたい。

せめてママの背中を守るくらいに、人質になんてされないくらいに。

強く．．．．．！

「えつと・・・・・・・・うん、よし」

ナノハは、ポーチの中身を確認している。

あれから数日、ナノハの表情がほんの少しだけ明るくなった。

精神の傷は癒えていないものの、溜めていたものを吐き出したことで、いくらか決着がついたようである。

ポーチの次に小太刀を抜刀、その刀身を見た。

手入れを欠かしてはいないとはいえ、やはり不備があっては困るのだ。

刃こぼれや錆がないのを確認し、満足そうに頷いた。

「準備出来たか？」

レイドが歩み寄ってきて、確認してくる。

その後ろからリタが続いている。

ナノハはそれに対し、ただ笑って答えた。

ほんの少しだけ、明るい顔で。

「それじゃ、行きましょうか？」

「うん」

「分かった」

三人で笑いあってから、バウルが引くフィエルティア号に乗り込んだ。

「ヴィヴィオどうしたんだ？何か俺に用事でもあるのか？」
「・・・・・・・・うん」

一方そのころ。

ユーリはハルルの樹の下で、ヴィヴィオと向き合っていた。
ヴィヴィオの表情はかなり真剣で、おそらく彼女にとってとても重要な用事。

やがて、彼女はユーリを見据えながら口を開いた。

「わたしに・・・・・・・・戦い方を教えてください」

ユーリは目を見開いた。

だがすぐに落ち着きを取り戻し、ヴィヴィオに問いかける。

「何で教わりたいんだ？　こう言うのもなんだが、分かってるのか？
戦うってことは、場合によっちゃ人を斬らなきゃいけないんだぞ？
ガキのお前にはまだ早い」

ユーリは真剣な表情でヴィヴィオに問いかける。
するとヴィヴィオは、

「それでもいいの………弱いのはもう嫌だから、せめて、ママ………うん、『お母さん』の背中を守るくらいに、強くなりたい」

まっすぐにユーリを見て、はっきりとそう告げた。
しばらく、黙ってヴィヴィオを見るユーリ。

やがて、小さくため息をつくど、

「分かった、負けたよ」

「あ………それじゃあ！」

「ああ、だけど戦い方を教わるんなら、ナノハにも知らせておけよ？」

「うん！」

そして、ヴィヴィオは背筋を伸ばし、

「よろしく願います！師匠せんせい！！」

元気良く、お辞儀をした。

「リタ、大丈夫？」

「問題ないわ、ありがと」

「二人とも、足元に気をつけろよ？」

「そういうレイドもね」

「分かっている」

ここは『ケープ・モック大森林』。

ナノハ、レイド、リタの三人は、途中魔物と戦いながら進んでいく。三人の目的は、ここにある活性化したエアルクレーネを鎮めるためだ。

『エアルクレーネ』とは、大気中に溶け込んでいるエネルギー『エアル』の源泉である。

『エアル』は、三年前までは魔導器の燃料だった物質だ。
プラスチック

全ての魔導器がこれを糧としているため、大昔に封印された災厄『星喰み』を再臨させる原因にもなってしまった。

『星喰み』は世界に充満しすぎたエアルが原因である（詳しくは『エアルを処理しすぎ、自我と姿を失ってしまった始祖の隸長の成れ

の果て』だが）。

それを未然に防ぐために、今までは始祖エンテレケイアの隸長が調整を行っていたが、三年前、レイドの実父である『アレクセイ』がほとんどの固体を虐殺。

現在確認されているのはジュデイスの親友であるバウルのみとなっている（なお、『フェロー』、『ベリウス』、『クローム』、『グシオス』の四体に関しては姿形こそ変わっているものの、生存はしている）。

故に、レイドは償いの面も含めて、本来皇帝の持ち物である宙デインノの戒典モスを使用し、エアルクレーネを沈めて回る役目を全うしているのだ。

「っと、ついたな」

「ここが？」

「ええ、そしてこれがエアルクレーネよ」

どうやら説明をしている間に、目的地に着いたようである。

ナノハは、目の前に現れた暖色系の光に見とれる。

その横で術式を展開し、エアルクレーネの状態を見るリタは、小さく頷いてから。

「やっぱり、活性化してるわ」

「そうか、それじゃ二人は……」

「分かってる、ほら、下がるわよ」

「あ、うん」

リタにつれられ、ナノハは後方へと下がった。

レイドは二人が下がったことを確認し、腰から宙デインノの戒典を抜くと、その包帯を解く。

そして剣を振り、足元に陣を展開する。

空気が膨れ上がり、ごうつ、と音を立てて周囲を駆け巡る。

レイドの周りから金色のオーラが噴出し、やがて剣を思わせる紋様
が出現、回転を始めた。

すべてが収まった頃には、輝きも空気のうちねりも消えており、ある
のはただ穏やかな輝きを放つエアルクレーネだけ。
ことの終了を確認したリタは、再び術式を展開。
数値を計測していく。

「不思議だね、こんなものが世界を終わらせてしまうかもしれない
なんて」

「ああ、だからこそ、これ続けていかなきゃならない」

ナノハはリタの作業が終わるまで、じっと、先ほどより輝きが穏や
かになったエアルクレーネを見つめる。

「・・・・・・・・・・こんなに綺麗なのにな」

無意識のうちに、そう、ぼつりとこぼしていた。

「騎士団からの依頼、ですか？」

一方の凛々フレイヴエスベリアの明星。

レイヴンの話を聞いていたエステルが、不思議そうに首を傾けた。

「そそ、フレン騎士団長からのお願いでね、アスピオ崩壊跡の調査と発掘をお願いしたいんだと」

レイヴンは茶をすすりながら、エステルに説明する。

「なるほど、あそこは古くからの研究所じゃから、貴重な資料とかを回収しようというわけじゃな」

「そうということ」

パーティは納得した表情で、いたずらっぽく笑う。

元々海賊なのだ、発掘や調査という単語を聞くと楽しくなってしまうのだらう。

「それで、作業はいつなの？」

ジユデイスが、軽く身を乗り出して聞く。

レイヴンは少しだけ強調された『谷間』に鼻下を伸ばしながら、

「三カ月後、道具とか揃えるためだっさ」

「ところで」、とレイヴンは続ける。

「ユーリとヴィヴィオちゃんは？さっきから見かけないけど……」

「

「さあ？お昼前に二人とも出て行っただけ、見ていませんね」

「どこにいったのかしらね？」

うーん、と考え込む四人。

するとパーティは冗談交じりに笑いながら、

「もしかしたら、師匠と弟子の関係になっただけするかもものう！」

「ヴィヴィオちゃんとはかく青年が？ないない！」

「ユーリには悪いですけど、その、想像出来ません……」

「でもあながち間違っただけだったりして」

「まあ、師匠なんてユーリのキャラじゃないからの、あくまで『もしかしたら』じゃ！」

「それもそうね！」

「あつはつはつはつはつ！」と、四人は笑いあっていた。

後に、『師匠と弟子』が冗談ではないことを知る、数時間前の出来事である。

「刀しっかり持て！弾き飛ばされちゃおしまいだぞ！」

「っはい！」

「その意気だ！行くぜ！？」

「お願いします！」

ハルルの樹の下。

早速ヴィヴィオの鍛錬が始まっていた。

ユーリが鞘に収めたままの二本ボシを振り、木刀を構えるヴィヴィオはそれをただひたすら受け続けていた。

『まずは受け方を覚えようぜ？攻撃だけじゃなにも出来ない』ということで、防御の基礎を練習中である。

「ふっ………！」

「あ、うわっ」

とうとう、ユーリの刀がヴィヴィオの木刀を弾いた。

衝撃でバランスが取れず、尻餅をついてしまう。

「大丈夫か？」

「は、はい」

ユーリは手を伸ばし、ヴィヴィオはそれを取って、立ち上がる。

「防げたのは二十発、か、一日目にしちゃ結構いい結果じゃねえか」

「あり、が、とう、ございます」

ヴィヴィオはそう言って肩で息をしながら、お辞儀をした。

それを見たユーリはにやつと笑って、頭を撫でる。

「さ、次いくぞ？」

「はい！」

真っ暗な空間。

『彼女』はそこに浮かび上がるようにして立っていた。

笑いもしない、恨みもしない、泣きもせず、怒りもしない顔で、わたしをじつと見ている。

すると突然、『彼女』の顔が目の前に来た。

息がかかるくらいの距離にあるその目は、深い寂しさが渦巻いていた。

「……………どうして？」

ただそう言ったただけなのに、背筋が凍った。

「どうして？」

それ以外何も言っていないはずなのに、責められている気がした。

「どうして？」

その四文字だけなのに、手が汗ばんできた。

「どうして？」

全身が固まった。

「どうして？」

急に『彼女』の口元が釣り上がる。

「ドウシテ？ フェイトちゃん？」

「フェイトさん！？」

「フェイトさん！！」

その声で、解放された。

勢い良く体を起こして辺りを見渡すと、自分の部下であり、『家族』である二人が心配そうに覗き込んでいた。

「あ、れ？」

「大丈夫ですか！？ フェイトさん！」

「だいぶうなされていましたよ？」

はっとして、二人の顔を見る。

「どうやら、相当心配させてしまったらしい。」

「．．．．．大丈夫、ちょっと船に酔っただけだから」

「そ、そうです．．．．．か」

「あ、あのっ！八神部隊長から連絡です、もうじき目的地に着くので、最終ミーティングをするために集まってほしい、だそうです！」

「そっかもうそんなに．．．．．うん、分かった、二人ともありがとう」

頭を撫でると二人とも照れくさそうに目を閉じた。

部屋から出て行く二人を見送って、彼女は呟く。

「．．．．．出来れば、友達として会いたかったな．．．．．
・わたしが、あんなこと言ったから、こんなことに．．．．．」

頭を抱え、独り、自責の念に駆られる。

「ただいま！」

「おかえりなさい、ナノハ、リタ、レイド」

無事ケーブ・モツクのエアルクレーネを鎮め、帰還したナノハたち。それを笑顔で迎えたのはジュデイスだった。

「ただい………ヴィヴィオ!？」

帰宅の挨拶を言いかけて、ナノハは思わず中断してしまった。

リビングの隅の方で、擦り傷だらけのヴィヴィオがエステルに治療を受けていたのだ。

擦り傷自体は珍しくない、いつも遊びに行ったときなど、たまに付けて帰ってくるのだが、今日はその量が尋常ではなかった。

「ふえ？あ、『お母さん』おかえり」

「………っ！」

焦っているナノハを他所に、ヴィヴィオは人懐っこい笑みを向ける。普通ならほっとする場面だが、あいにくナノハにその余裕はなかった。

擦り傷だけではなく、ヴィヴィオの呼び方も『ママ』から『お母さん』に変わっていたのだ。

ナノハは娘に起きた突然の事態と変化に、少し戸惑っている。すると、大方治療を終えたヴィヴィオがナノハに向き合った。

「お母さん、わたしユーリさんに弟子入りしたの」

「え、ど、どうして？」

「強くなつて、お母さんみたいに皆を守りたいし、お母さんの背中も守りたい」

まっすぐナノハを見たまま、そう宣言するヴィヴィオ。

一方のナノハは、激しい展開に頭がついて来ていないようである。

同時に、子供の成長の早さを実感していた。

自身の親がたまに呟いていた『時間って早いのねえ』の意味がようやく分かったという感じである。

「弱いのはもう嫌だから、お母さんの邪魔になりたくないから、だから……」

ヴィヴィオに迷いは見えなかった。

（……わたしが管理局入りを決めたときも、お母さんはこんな気持ちだったのかな？）

ナノハはそんなことを考えながら、ヴィヴィオを見て。

「怪我だけには気をつけること」

「あ……うん！」

スキット『便乗』

レイヴン：にしても、本当に青年が師匠になっちゃうなんてねえ．．．

ユーリ：ん？何か悪かったか？

パティ：いや、昼頃『ヴィヴィオはともかく、ユーリはそんなキラじゃない』って話してたからな

リタ：まあ、正論っちゃ正論よね？

ジユデイス：そうね、想像することが難しいわ

エステル：ナノハの手助けが出来るように、って修行を始めたんですよね？

ヴィヴィオ：うん！もう弱いままは嫌だから．．．．．

リタ：ふーん．．．．．じゃあ、あたしも術を教えちゃおうかな？

ヴィヴィオ：ふえ？

エステル：あ、ならわたしは治癒術を教えますよ！

ヴィヴィオ：え、ちょっと

リタ：手助けってことはサポートも出来るようにってことでしょ？
だったら後衛の技もいくつか覚えておいた方がいいと思うわよ？

ヴィヴィオ：そ、そうかもしれないけど、いいの？エステルさんは世界を回って国民の皆さんの声を聞かなきゃいけないし、リタさんだって論文仕上げなきゃ．．．．

リタ：大丈夫、一つはもう書きあがってるし

エステル：わたしも、問題はありません

ヴィヴィオ：で、でも！

レイヴン：ヴィヴィオちゃん子供なんだから、遠慮は無しよ？それに術も治癒術も覚えておいて損はないしね

レイド：そうだな、何、お前なら心配ないさ

ヴィヴィオ：あう、えと．．．．．よろしくお願いします

リタ：ええ！

エステル：任せてください！

ナノハ：なんだか、十八番をとられた気がするなあ
レイド：そっぴやナノハの職業、教導官だったな

ヴィヴィオは『決意の弟子』の称号を手に入れました。
ナノハは『元教導官』の称号を手に入れました。

九番星（後書き）

今更ですが、現在のナノハの髪型に関しては、『なのはポータブル』の『星光の殲滅者』を思い浮かべてください。

今回はスキットをちよつと長めにしてみたり^^；

そして次回、ついに・・・・・・！！？

それではこの辺で^^ノシ

十番星（前書き）

今回ついに・・・・・・。
それではどうぞ。

1 2 / 5 : 刀 剣に修正

十番星

『始まり』があれば『終わり』があるのは当たり前。

遂に始まる、終焉の時。

それはゆっくりながらも激しい流れで進んでいく。

果てしなく、岸も見えないその向こうに。

人は何を見るのだろうか？

瞳に写ったそれを、何とするのか？

いずれにせよ、完全なる終局が訪れるまで、誰にも分からない。

二人の人物が、草原で向き合っている。

一方は木刀を構えた、16〜17歳程の少女。
もう一方は、その少女より幾ばくか年上らしき青年、手には鞘を固定した刀が握られている。

両者は今、打ち合いの真つ最中だった。

一閃と一閃、突きと突きがぶつかり合い、しばらく乾いた音が辺りに響く。

やがて、ガツンつと一際高い音が聞こえた。

青年の刀が少女の木刀をかわして、首筋にあたっていた。

「……………っし、今日はこの辺で終わりだな」

青年の言葉に頷きながら、少女の体に虹色の光が舞う。

すると少女の姿は、年頃の娘から10歳前後の少女のものになった。

「ありがとうございました！」

その身に余る木刀を逆手に持ってから、幼女は頭を下げる。

「ああ、それじゃあ帰るか！飯食ったら、お前の初仕事だ！」

「はい！」

青年 ユーリは、幼女 ヴィヴィオを鼓舞するように、にやっと笑った。

ヴィヴィオがユーリに師事するようになってから三ヶ月。

彼女はすでに、ハルル周辺の魔物と互角以上に戦えるレベルにまで成長していた。

エステルやリタにも、術を習っているので、多少の攻撃術と治癒術も覚えている。

職業にするなら『魔法剣士』だろうか。

現在は騎士団の秘伝技の一つ、『バーストアーツ』の習得に精を出していた。

そして今日は、本格的にギルドの仕事を始めることになる。

依頼内容は三年前に壊滅状態になった学術都市『アスピオ』の発掘調査。

古来よりの研究所だった故、貴重な資料を出来るだけ回収してほしいというものだった。

依頼人は帝国騎士団団長『フレン・シーフォ』、ユーリの幼馴染だそうだ。

パーティはアスピオ出身のリタ、クリティア族関係の資料があるらしいということで、ジユデイス、ヴィヴィオとその母であるナノハ、そしてラピードは二人の護衛兼助手である。

昼食後。

ヴィヴィオは、虹色の光を舞わせて、再び少女の姿を取ると、簡単につくりの剣（バトルソードという）を腰にさした。

ユーリが昔練習用として用いていたものを、ヴィヴィオが使っているのである。

アイテムの確認をしてから、待ち合わせ場所である街の入り口まで走っていった。

待ち合わせ場所に到着したが、幾らか早かったようで、まだ誰も来ていない様だった。

（けど、遅れるよりはまし、かな？）

そう思考したヴィヴィオは、柱にもたれかかり、残りのメンバーを待つことにした。

やがて、向こうから走ってくる人影が見えてくる。

ナノハと、リタだった。

「ごめん！待たせちゃったね」

「悪いわね、発掘用の道具が以外と多くて……」

二人は手を合わせたり、頭を下げたりして、謝罪の言葉を述べている。

ヴィヴィオは慌てながら、

「だ、大丈夫だよ！まだ来てない人いるし、わたしが早く来ちゃったってだけの話だから！」

あたふたとした様子で、二人を慰めていた。

「にしても、ヴィヴィオが一番最初だなんてね？」

「そうだね、すごく気合入っているみたいだけど……」

「あはは、さすがに初仕事で遅刻はしたくないから」

若干照れた仕草を見せて、ヴィヴィオは答えた。
すると、

「あら、わたしで最後？」

「ワン！」

いつのまにか、ジュディスとラピードが来ていた。

「大丈夫、そんなに待ってないから」

「そそ、むしろヴィヴィオの方が待ったって感じだけど」

「ね？」とリタからの視線を受け、ヴィヴィオは照れ笑いを見せた。

「部隊長！第56管理外世界に到着です！」

「うん、それじゃあ、フォアード陣と副隊長陣にこのことを連絡、
出動準備に入るよう指示してや」

「了解！」

航行艦の中、船橋ではオペレーターたちの声が飛び交っている。

「転送ポート、起動開始！」

「システムチェック、はじめます！」

「容疑者『高町なのは』、及び保護対象者『高町ヴィヴィオ』の魔力、補足！」

「映像出ます！」

ヴンつと音を立てて、正面モニターにナノハ一行の映像が流れ出す。
ちようど、ヴィヴィオの一閃で、なんらかの危険生物と思しきものを撃退した瞬間だった。

笑顔でそれを褒める、グラマラスな体系の槍使いと、赤を基調とした服装の少女。

犬も近くにおり、短剣を鞘に収めているところらしかった。
そして、

「・・・・・・・・・・なのは？」

そう呟いたのは、艦長席の脇に立っていた金髪の女性。
かなり驚いた様子で、画面の向こうでヴィヴィオに話しかけている
ナノハを見つめる。

脳裏に渦巻くのは、罪悪感のみだった。

「落ち着きいや、フエイトちゃん」

それを悟ったのか、艦長席に座っている女性が口を開く。

「色々思うところあるやろうけど・・・・・・・・・・今は仕事に集中
中や」

口ではそういつているものの、どこか辛そうな表情だった。

長年の親友であるが故に、あえてそれを指摘せずに、金髪の女性は
頷く。

（髪、切ったんだ・・・・・・・・）

遭遇は、もうすぐ。

「リタ、これ違う?」

「ちよつと待つて……ええ、そうね、保存状態もいいみたいだし、解読しやすそう」

「リタさん、これはどうでしょうか?」

「それは……って、それあたしが書いてた論文!? ちよつと見せて!」

所変わって、アスピオ崩壊跡。

資料回収や瓦礫の撤去作業など、順調に発掘は進んでいた。

「やっぱり、エアルに関する論文だわ、ありがとヴィヴィオ」

「そんな! どういたしまして」

書類についている埃をはらいながら、リタは手短にヴィヴィオに例をのべる。

一方のヴィヴィオは謙遜しながら、再び瓦礫をどかし始めた。

「にしても、二人が来てちよつど半年くらい? 大分馴染んできたわよね」

「でもまだまだだよ、色々なれない部分とかあるし……」

「けど前に比べたらかなりマシよ?」

他愛ない話に花を咲かせつつ、ナノハとジュディスは協力して、大きな瓦礫をどかす。

「つと、通路?」

「地下に通じている……ってことは、アスピオでまだ生き残っている部分があるのかな? リタ!」

「何?」と反応し、リタは瓦礫をかき分けながら近寄ってきた。

そして二人に促されて、通路を覗き込む。

「ああ、ほんとだ!」

「やっぱり、洞窟にしちゃみように整備されているしね」

故郷の痕跡が見つかったことにより、優しい表情になるリタ。

ナノハとジュディスもつられて柔らかい表情になる。

が、しかし、

「お母さん!リタさん!日が暮れてきたけど、どうする!？」

遠くの方で、発掘物をまとめながら、ヴィヴィオが手を振っていた。確かに空がだいぶ赤くなっており、これ以上作業すれば、夜になってしまう。

夜は足元が見えない上、視界も悪いため、魔物の接近に気づけないこともあるので、危険だ。

リタは幾ばくか悩んだ後、

「じゃあ、この入り口を一旦閉めて明日出直しましょ、見失うといけないから、目印が何かをつければ問題ないと思うわ」

「わかった、えっと……」

駆け寄ってきたヴィヴィオはリタの提案に頷き、ちょうど近くに落ちていた尖った石で大きめにバツを書いた。

「こんなもん？」

「ええ、じょーでき!」

「えへへ」

「さてと!」と、リタは道具を片付けて、ハルルの方角を向く。

「それじゃあ、帰るわよ！見つけた資りよ……っ!？」

言い切る前に、『それ』は現れた。

キンッと澄んだ音を立てて、空に何らかの陣が現れる。

「何……あれ!？」

呆然と見る一同を他所に、陣はその中央から光の粒子を噴き出した。粒子は数箇所に集まって固まり、人の形を取る。

そして完全に固まった後、次々と爆ぜて、人間を出現させた。内の一人が、閉じていた目をゆっくり開く。

桃色の長い髪を、ポニーテールでまとめている女性だった。

女性はナノハたちを見下ろし、そしてナノハを見る。

「目標を確認、これより確保に入る」

「了解!」

「……………」

女性が言うと、金髪の女性以外が返事をした。

一方のリタ達は、個々の武器を構えて、臨戦態勢に入る。

陣から降りてきた人々に向けて、叫んだ。

「あんた達、何者!？あの陣は何!？」

すると金髪の女性が、

「私達は時空管理局、ここに逃げ込んだ容疑者を捕らえに来た」

淡々と告げられた情報に、リタとジュデイスは胸騒ぎを覚える。

「ラピード、ユーリたちを呼んできて」

応援が必要と判断したジューデイスは、小さな声でラピードに指示。ラピードは一声鳴くと、その場の風のごとく去っていった。

それを、ハチマキを巻き、なんだかごついナックルを装備した少女が追おうとしたが、隣にいたオレンジ色の髪のカンナーに止められた。

「で、その容疑者って何？何の疑いがあるワケ？」

リタは帯を構え、警戒を怠らないまま疑問をぶつける。すると、赤毛を二つの三つ編みにして、ハンマーを構えた少女が、

「………そこにいるだろうがぁ！人殺ししやがって、逃亡した裏切り者……高町なのはがなぁ！！」

殺意をむき出しにして、叫んだ。

瞬間、後ろにいたナノハが、震えたのが分かる。

「………シグナムさん………ヴィータちゃん………
・フェイトちゃん………スバル………ティアナ………
エリオ………キャロ………！」

消えかかっていた負の感情が再びわいてきたのだろう。
発せられた声は震えていた。

隣にいるヴィヴィオも、かなり動揺しているのが見える。

リタはそれを感じながら、何とか最善の結果にもって行こうとする。

「我々に大人しく彼女を引き渡してくれるというのなら」知らない

わね？」……何？」

ポニーテールの女性を遮り、ジューディスが不適な笑みを浮かべながら、

「確かにわたし達の後ろにいるこの子の名前は『ナノハ』よ、けど人違いじゃないのかしら？そもそも、この世に『タカマチ・ナノハ』なんて、変な名前の人、いればすぐに有名人だと思うけど？」

ポニーテールの女性の後ろにいる少女たちは戸惑っている。

おそらく、今のジューディスの言葉を、正論と感じているのだろう。

だが、感じ取ったのは後ろの少女達だけ、
前の方に立っている女性二人と少女は違った。

「……容疑者を譲渡する意思はなし、本人も投降する
気配は見受けられない……止むを得んな」

鞘から刀身を放ちながら、敵意をぶつけてきた。
それを受けたりたは、口頭弁論は無駄と判断。
後ろに下がり、

「ナノハ、ヴィヴィオ、下がってなさい！」

「え、でも……！」

「どうせこいつら顔見知りでしょ！？だったらなおさら戦わせるわけにはいかないわ！」

リタはナノハ達を後方に追いやりながら、きっぱり言い放つ。

ナノハは納得いかない顔をしていたが、小さく頷いた。

しかし、小太刀を抜くとリタの前に立つ。

ヴィヴィオも中衛のポジションに入った。

「けど、詠唱のカバーは出来るよ？」

「うん、それにちょっとだけ、支援も出来るし」

また何かを言おうとするリタに対し、親子そろって笑う。

リタはやりきれない表情をしたが、すぐに引き締めて、

「わかった、無茶だけはやらないようにね？来るわよー!!」

戦闘が、始まった。

一方、ハルルの街。

レイドが街の入り口で、ナノ八達の帰宅を待っていると、向こうの方から何かがかけてくるのが見えた。

だんだんと近づいてくるそれをラピードだと理解してから、レイドは駆け寄る。

「ラピードお帰り、他の皆は？」

「ワン！ワンワンワウワンワン!!」

レイドの出迎えと問いかけに、待ってましたと言わんばかりに吠え立てるラピード。

すると見る見る内にレイドの表情が険しいものへと変わっていく。別に彼の言葉が分かるわけではない。

ただ、ラピードがしっかり者であると熟知した故の反応だった。

レイドはラピードの一連の行動から、何かよくない出来事が起こったと推測する。

「そうか、ありがとうラピード、俺はもう行くから、他の皆にも知らせてくれ」

「ワン！」

ラピードに手短にそう伝えたと、暗くなり始めた草原を、アスピオに向けて駆け出した。

「紫電一閃！」

「瞬迅槍っ！」

女性の一閃と、ジュディスの突きがぶつかり、衝撃波を生み出す。

「はあああつー!!」

そこへ、ハチマキを撒いた少女がナツクルのリボルバーを回転させて、ジュデイスに殴りかかる。

「正義の意思！雷撃の剣となり咎あるものに振り落ちる！『サンダーブレード』!!」

もう終わりかと思われたそこに、すかさずリタが術を打ち込む。

少女には当たらなかったが、幾らか痺れさせることが出来たようだ。

「刃にさらなる力を！『レジスト』!!」

その合間を縫って、ヴィヴィオはジュデイスの支援を行っていた。

しかし、一応均衡を保ってはいるものの、四対八はさすがに無理があるようである。

遂にあのハチマキの少女が、ジュデイスを突破してきた。

すぐさまヴィヴィオが反応し、剣を抜刀すると少女に立ちはだかる。

少女はどこか戸惑うような表情をすると、

「ヴィヴィオお願い、そこをどいて!!」

「嫌だ！そしたらお母さん連れて行くでしょう!？」

少女の言葉にヴィヴィオは猛反発。

そして拳に衝撃波をためると、少女の腹に叩き込んだ。

「裂波拳っ!!」

「づっ、ぐうう……!!」

クリーンヒットかと思われたが、少女は咄嗟に手のひらで拳を受け

止めており、大事には至らなかった。

ヴィヴィオは苦い顔をするも、剣を構えなおし、少女を睨んだ。

（今のわたしじゃ、この人に勝てないのは分かってる………
・・けど、だからって先に進ませるわけにもいかない！）

手に自然と力が入るのが分かる。

対する少女はいくらか辛そうに顔をしかめて、頭を振った。

「……………ごめんっ」

小さくそう言うと、かなり慣れた足取りで接近する。

あまりの速さに、ヴィヴィオは反応が数瞬遅れた。

叩きつけられた左ナツクルを必死に刀身で受け止める。

すると、ギリギリと火花を散らしながら、右ナツクルのリボルバーが回転し始めた。

そして、大きく振り上げると同時に、腕に空色のリングが現れる。

ヴィヴィオは一瞬でそれを危険と察知。

何とか離れようとした。

だが、体が動かない。

「……………まさか！？」

ヴィヴィオは視線を自分の体にやる。

思ったとおり、空色のリングに固定され身動きが取れなくなっていた。

（やばい！）

なす術が無いと悟り、固く目を閉じる。

その時、自分のわきを何かが通った気配を感じた。
咄嗟に振り返ると、

ハンマーを持った少女が、母達の元に向かっていた。

「しまった!!」

思わず声を張り上げる。

一方のナノハは、リタの防衛のためにハンマーの少女の前に立ちはだかる。

小太刀を抜刀して、少女の一撃を受け止めた。

こちらでも、火花が散る。

「どうして殺した!? 何で逃げた!? 何で裏切った!? 答えろお!

!」

「.....っ」

気迫に比例しているのか、だんだんナノハが押されていくのが分かった。

「っだあ!!」

「っちい!!」

それを見かねたのか、リタはナノハと少女の中に割って入り、帯で少女を叩き飛ばす。

少女は姿勢を崩すものの、宙で一回転して立て直した。
リタはナノハの隣に仁王立ちし、少女をに睨んでいる。

「なのは.....何でだ.....なんで.....
.....お前はそんな人間じゃ無かつたろ!？」

悲痛な叫び声をあげて、少女はナノハに問う。

「いつだ！？いつからお前は平気で人を殺すようになったんだ！！？」

恨みと悲しさを持った目で、さらに問いただした。

ナノハは思わず構えを解いてしまい、罪悪感に満ちた目で、少女を見つめた。

と、そこへ、

「うつさい、『ファイアーボール』」

「な、ぐわあっ！」

「っヴィータ副隊長！！」

リタは容赦なく火球を放ち、少女を吹き飛ばした。

ヴィヴィオに止めの一撃を撃とうとしていた少女は、思わず手を止めて、ハンマーの少女に駆け寄る。

「り、リタ！？」

「ごめん、けど、こいつの言い分にはほんと幻滅したわ」

リタは少女 ヴィータと言うらしい を冷めた目で見ながら、

服についた埃を払った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・んだと？」

そんなリタをヴィータは鋭い目つきで睨む。

「だってそうじゃない、さっきから聞いてりや何？』どうして？」

『何で？』そればっか、ナノハが今までどんな思いしてたかまるで分かってない」

帯を構えなおし、ヴィータとその傍に居る少女を睨むリタ。

「分からねえから聞いてんだろぅが！！なのはと会って半年程度のお前らに、何が分かる！！？」

ヴィータはいきり立つようにリタに食って掛かる。

だがリタは睨むことをやめず、

「じゃあ逆に聞くわよ？あんたらナノハと十年以上の付き合いらしいけど、全部知ってるわけ？ナノハの全部を？分かってないからこんなことになってるんでしょう・・・・・・・・・・」

呆れたように首を横に振るリタに、カチンと来たらしい。

ヴィータはハンマーを構えると、カバーをスライドさせ、空薬莖を何発か吐き出させる。

リタはその様子に、疑問を持った顔をしていたが、一連の流れを見守っていたナノハは、すぐに何なのかを理解した。

一瞬で、リタとヴィータの距離が詰まる。

「ギガント・・・・・・・・・・」

細身のそれから、黄色いラインが入った巨大な鉄槌へと変化したそれを振りかぶる。

リタはその変化っぷりに驚き、動きを一瞬だけ封じられた。

ヴィータにとっては、その一瞬だけで十分だった。

「ハンマアアアア ツ！！！！！！」

容赦ない一撃が振り払われる。
思わず目を閉じたりタだったが、

「っああああああっ！！！」

感じたのは、自分が鉄槌以外の何かに突き飛ばされた感覚と、守るべき仲間の悲鳴だった。

束の間意識が朦朧とするが、視界に飛び込んできた光景で、一気に現実へ引き戻される。

見えたのは、瓦礫に体を埋め、うずくまっているナノハだ。

「ナノハ！！！」

すぐに起き上がり、ナノハの元へ駆け寄る。

ジューディスも状況を察知したらしく、槍騎士との鏖迫り合いを切り上げると、バックステップでナノハの傍に近寄った。

ヴィヴィオも何とか拘束から抜け出せたようだ。

ナノハに駆け寄るや否や、治癒術をほどこし始めた。

「………これが最後の警告です、すぐに容疑者『高町なのは』及び保護対象者『高町ヴィヴィオ』をこちらに引き渡してください」

金髪の女性が前に進み出て、単語をかみ締めるように、リタたちに告げた。

「『引き渡せ』、ですって？」

「何よ、それじゃまるでナノハが物みたいじゃない！あんたら、『常識』って言葉の意味、分かってんの！？」

ジューデイスとリタは眉間に皺を寄せて、怒りを隠そうともしない。
女性は、辛そうに、小さくため息をつく。
そして『鎌』を振り上げて、

「・・・・・・・・・・・・・・・・ごめんなさい」

雷撃が、四人を襲い、麻痺させる

「蒼破刃！」

「魔神拳！」

「ワン！」

はずだった。

突然現れ、四人をかばうように立ちはだかる、男女。
四人は顔を明るくし、魔導師たちは警戒する。

「あなた方は、誰ですか？」

金髪の女性の問いかけに、その中の一人 ユーリが、自信た
つぷりに己を指差し、

「『義』を尊ぶギルド、ブレイヴウェスヘリア 凛々の明星だ！」

十番星（後書き）

明るい明日に導く黄金の勝利！『テイルズオブリリカルゴールデンビクトリー』！！（以降リリカルGVと表記）

早い話、今回から感想をあとがきで返信することにいたしました。それでは早速GO！！

だつう様

ご感想ありがとうございます。

はい、今回から元六課メンバーVS凛々の明星です。

フェイトだけにとどまらず、それぞれのキャラの心理描写とか今後の展開にご期待下さるとうれしいです！

イブニングゼロ様

スタートに衝撃を受けていただいたようで、光栄です。

小説も拝見させて頂きました！

この小説の紹介をしてくださっているのを見て、とても嬉しかったです！

思わず、そのページだけ何度も読み返してしまいました；

お互い小説の執筆、頑張りましょう！

高町霧斗様

全員のキャラを生かしているようで、何よりでございます。

必死に空気にならないようにしているので、そう言って頂けると幸いです^^

あと『ユーリをもう少し天邪鬼っぽく』というアドバイス、ありがとうございます。

わたしのユーリのイメージは『頼れる兄貴』というのですが、なるほど。

頑張ってみます。

最後に、皆さま様々なご意見感想ありがとうございます。
これからもこの小説を見守っていただくとうれしいです^^
さて次回はいに全面对決！結果は・・・！？
お楽しみに^^ノシ

十一番星（前書き）

魔導師VSギルド、結果はどうなる？
それではどうぞ

十一番星

「……………貴様等か、ナノハの知り合いというのは」

しばし続いた睨み合いを破ったのは、レイドだった。

開かれた口から出た声は重く、それでいて何か『真っ暗なもの』を伴っていた。

「……………ええ、一応」

その『真っ暗なもの』を感じたのか、金髪の女性は『鎌』を手放さないように握りながら返答する。

よくよく見ると、額には脂汗が浮かんでいた。

「ふーん、で？ナノハちゃん、あんたらにとっては『裏切り者』だっけ？今更何の用よ？」

弓に矢を番え引き絞りながら、レイヴンは軽い口調で問いかける。

「言うまでもない、容疑者だから逮捕しに来た、それだけだ」

あくまで、厳格に、ポニーテールの女性が答えた。

「それに、いま司令部から連絡が入ったわ」

オレンジ色の髪のカンナーが、レイドに視線をやる。

「あなたから、ロストロギアの反応が出ているの」

一瞬、目を見開く凛々の明星のメンバー。
だが直後、不適に笑って、

「……………そうか、ならば余計負けるわけにはいかな？」
「そうですね、わたしも皇族として、宙デインノモスの戒典を渡すわけにはいきません」

睨むレイドと、凜とした声で明言するエステル。
一方魔導師たちは目を伏せると、

「……………目標追加、あの青年が所持するロストログアを回収するぞ」

「了解！」
「結局力づくか、いくぜみんな！特にレイド！油断すんなよ！」
「応っ！」

個々のエモノを構え、ギルドと魔導師たちがぶつかる。

「うちの相手は、おまえかの？」
「ごめん、状況が状況だから、手加減できないよ？」
「のぞむ所じゃ！」

パティはハチマキを巻いた少女と対峙し、

「あら、貴方がお相手？同じ槍使いなのね」
「はい、お手合わせお願いします！」

ジュデイスは槍騎士の少年と刃を交える。

「おっさんの相手はお嬢ちゃんなのね？」

「うるせえ！とつとなのはとヴィヴィオを返せや！」
「おー、怖い怖い」

レイヴンはヴィータと撃ち合いを始め、

「ヴィヴィオ、出来そう？」

「やってみます！」

「ごめんね、ヴィヴィオ……いきますー!!」
「ギャウッ！」

リタとヴィヴィオは、竜を使役するらしい少女と向き合っていた。

「エステル！前衛はボクとラピードに任せて！」

「ワン！ワンッ!!」

「はい、サポートは安心してください！」

「3対1……か、上等！望むところよ！」

エステル、カロール、ラピードは、オレンジ色の髪のカンナーと戦闘を始めた。

そして、

「お前の武器も剣……か、公務中で無ければ純粹に戦いを楽しめたのだがな」

「よく言っぜ、ナノハの気持ちも知らねえでさ」

「それはこちらの台詞だ、それに『罪』を犯したのなら償わねばならん」

「そうかい、なら譲れない同士、戦っただけだ！」

ユーリはポニーテールの女性と斬撃を交し合い、

「いけるか？ ナノハ」

「・・・多分、大丈夫・・・それより気をつけて、あの子はスピードが一番厄介だから・・・」

「分かった・・・」

ナノハとレイドは、金髪の女性と向き合った。

「よし、用意はいい？」

「ああ、滞りない」

「・・・ごめんね、なのはちゃん」

「やあっ！」

少女の右ストレートが、パーティに向けられる。だがパーティは何の問題もなさそうに避けると、銃弾を撃ち出した。それらは少女をいくつか掠めたあと、地面や岩石にはまり込む。

「次はこっちから行くぞ？そりゃっ！」

「え、あ、わわっ！」

パーティはお返しとばかりに、短剣と銃でのラッシュを少女に打ち込む。

少女は体をひねりながら、何とか避けていた。

「そらっ、舞うが如く！」

「しゃらくせえ！コメントフリーゲン！！」

一方、レイヴンとヴィータは均衡した撃ち合いを続けていた。レイヴンの鋭い斬撃とヴィータの鉄球が、火花を散らして接触。脇に被弾しながら、短剣にわずかな刃毀れをもたらしながら、両者の接近を許す。

瞬間、レイヴンは弓を地面に向けて撃った。

だがヴィータはお構い無しに突っ込んでいく。にやり、とレイヴンの口元に笑みがこぼれた。

「な！？があっ！」

刹那、ヴィータの足元が爆ぜて、その小さい体を後方へ飛ばす。

「土竜なりってね、ようするに地雷さ」

「つぐ、このっ!!」

レイヴンの小馬鹿にしたような口調に苛立ちを募らせたヴィータは、再び鉄槌を振りかざす。

「でりゃあっ!」

「あらっ、危ないじゃない」

槍騎士の突きを、ジュデイスは難なくかわす。

そしてお返しにと槍騎士よりするどく、細かい突きを繰り返した。槍騎士は必死になってそれを全て受けきると弾丸をいくつか消費、体と槍を帯電させ、数歩下がると、己ごと突撃してきた。

先ほどのものとは比べ物にならない速さで、ジュデイスに向かってくる。

だが彼女は妖艶な笑みを浮かべると、

「崩襲月ッ!!」

「ぐあっ!?!」

ピンポイントで槍と共に脚を叩き付けた。

「筋は悪くないけど、まだまだね」

「っ、次いきます!!」

砂まみれになりながらも、槍騎士は再びジュデイスに突っ込んでいく。

「双牙斬っ!!」

「ささやかなる大地のざわめき!『ストーンブラスト』!」

「っ、フリード!ブラストフレア!!」

「ギユアアアっ！」

リタの術とヴィヴィオの斬撃をバリアで防いだ少女は使役する竜に号令。

竜はそれに答え、口に火球をチャージ、それを吐き出した。

「ツリタさん散って！なるべく遠くに！！」

「分かったわ！」

それがどんな攻撃であるかを理解しているであろうヴィヴィオの指示を信じて、リタは大きく横に跳んで退避する。

そして先ほどまでリタがいた地点に火球が着弾、ナパーム状に広がり周囲を焼いていった。

その光景を見て、一瞬背筋が凍るリタ。

だが表情を引き締めると再び帯を構え、ヴィヴィオに目配せする。

ヴィヴィオもリタの意思を悟ったのか力強く頷いた。

二つの地点に別れ、リタは帯を構えて、ヴィヴィオは剣先に左手を添えて、魔方阵を展開させる。

「正義の意思！雷撃の剣となりて咎ある者に振り落ちる！！」

同時に詠唱を始め同時に終えた二人は、手を前に突き出し、剣先を空へ高々と上げて、

「『サンダーブレード』っ！！」

上空から、二本の剣が振り落ちる。

「刃に更なる力を！『レジスト』！」

「鬼神千裂ノック！」

「ワンッ！」

エステルの支援を受け攻撃力を上げたカロールとラピードは、それぞれの技をガンナーに撃ち込む。

対するガンナーは怯む様子を見せず、ただ両手に構えられている二丁の銃を向けて撃った。

色は同じだが、性質が違う二つの弾丸がカロールのとラピードの技を打ち消す。

「今度はこっちよ！ファントムブレイザー！！」

数瞬のチャージの後、オレンジ色の砲撃がカロールたちに迫る。しかし、

「させません！！」

咄嗟に満月の子を発動したエステルが、強力な結界を展開。難なく防ぎきった。

「ごめんエステル、ありがとう！大丈夫？」

「ワフウ？」

カロールとラピードがエステルに駆け寄り、感謝を述べる。

一方のエステルは、少し肩で息をしていた。

だが問題はなさそうだ。

「ええ、大丈夫です、まだ行きますよ？」

「もちろん！」

「ワンッワンッ！」

「まったく……下手したらスバル以上のポジティブね」

意気込む三人を見て、ガンナーは一人、どこか楽しそうに呟く。

「せやっ！」

「はあっ！」

ユーリと女性の戦いは、白熱したものとなっていた。
刃と刃、衝撃と衝撃がぶつかり、大気をうねらせ、火花を散らし、
刀身を打ち付けあう。

「爪竜連牙斬っ！」

「紫電一閃っ！」

二人の技が激突、同時に大気が唸った。

鏑迫り合いの後、互いに弾き飛ばして距離を取る。
両者共に、肩で息をしていた。

「……これほどまでとはな、名はなんという？」

「名前を聞くときは自分からって習わなかったか？」

問いかけに、ユーリは警戒を解かないまま言い返す。
女性はふっと笑って、

「それは失礼した……私は剣の騎士シグナム、夜天の王を
守護する守護騎士の将だ」
ヴォルケンリッター

「へえ？大層な役職なんだな、俺はユーリ・ローウェル、ギルド凜
イヴヴェスベリア
々の明星のメンバーだ」

ユーリの名を聞いた女性
シグナムは、少し残念そうにしてか
ら、

「そうか……本当に惜しいな、何故このような形で合間見えたのやら」

「知るか」

シグナムは一瞬面食らった顔をする。

だが、不適な笑みを浮かべて、

「話はここまでにしようか？我が主の期待に答えるためにも、貴様に負けるわけにはいかん」

「悪いがそう簡単に勝たせねえぞ？俺達は『義』と仲間のためなら、全力で相手するからな？」

「それは楽しみだ！」

再び、二人の刀身がぶつかる。

「プラズマランサー、ファイアツ！！」

「魔神拳・双牙っ！」

「アクセルシューター、シュートツ！！」

雷撃の短槍と、桜色のスフィア、衝撃波が宙で激突し互いを消滅しあう。

その隙に金髪の女性は、ナノハの背後に周り込み、『鎌』で斬りかかった。

ナノハは咄嗟に小太刀を背中クロスさせ、ダメージを軽減。

振り返りざまに一閃を繰り出し、空いたもう片方の手で再び一閃を見舞った。

女性は持ち前の速さを生かして後退。

だがそれに劣らない速度で、レイドが剣を叩き付けた。

刃は空を斬り、地面を砕く。

音と見紛うような移動速度を持つ彼女は、いつのまにか離れた場所にいた。

「・・・・・・・・・・」

女性は何も言わず、ただ黙ってナノハを見つめるのみ。
対するナノハも、どこか複雑そうに女性を見ていた。

「・・・・・・・・大丈夫か？」

隣に来たレイドが、ナノハより数歩前に立って声をかけてきた。

「・・・・・・・・・・うん」

ナノハが束の間の沈黙の後、ただ頷いてそう答えた。
レイドは短く「そうか」と返し、女性に向き合う。

「・・・・・・・・・・言っておくが、俺達はそちらに二人を引き渡すつもりはない、もちろん宙デインノモスの戒典もだ」

女性はレイドの言葉に反応せず、黙って聞き入っている。

「二人はもう俺達の一員だし、宙デインノモスの戒典はこの世界に無くてはならないものだ」

「だから」、とレイドは続ける。

「俺達は全力で貴様等と戦う」

剣先を向けて、低い声で明言した。

「・・・・・・・・・・そうですか」

女性は若干俯いて、『鎌』を握りなおす。

「・・・・・・・・・・ただわたしも譲れない理由があります、だから、負けるわけには行きません」

どこか後悔と決意のあるしつかりとした目を向けて、『鎌』を構えた。

それを見ていたナノハは、何処か嬉しそうに、そして寂しそうに笑っていた。

再び斬りあおうとした時だ。

フレイヴエスベリア

凛々の明星のメンバーの四肢を新緑色と淡い蒼色のリングが拘束した。

「よし」

「成功だな」

混乱する一堂を他所に、空から舞い降りてくる二人の人影。

一人は女性で、翠を主とした服を纏った女性。

もう一人は、狼を思わせる耳と尾を生やしたたくましい体つきの男性。

ガンナーが、驚愕した顔で、二人の名を呼ぶ。

「ザフィーラさん！？シャマル先生！？」

「ええ」

「ああ」

シャマルとザフィーラはただ頷いて答えた。

「なっ！？おいシグナム！！何なんだこりゃ！？」

ユーリですら、突然の事態に混乱している。

「……これはバインド、我々が使う拘束術の一つだ」

シグナムは淡々と答えた。

彼女はかなり残念そうにしていたが、公務中故に、苦い表情でユーリから離れていく。

そして、レイドの方に歩み寄っていった。

それが何を意味するかを悟ったナノハは、必死にもがく。ヴィヴィオも何とか拘束を解こうと奮闘していた。

ふと、ヴィヴィオは動きを止める。

思い出されるのは、何週間か前の会話。

『ね、魔法って、物体を浮かせることも可能なの？』

『うん、だけど割と演算が難しいからわたしは簡単な動かし方しか出来ないんだ、お母さんならもっと複雑に出来るけど……』

『結構大変なんですね』

『そうなの、だからもっと練習しなきゃ！』

目を閉じて、精神を集中させる。

シグナムはもうレイドの目前に迫っている。

速くかつ、的確に自分の手に収めなければならない。

「……ふっ！！」

「っ！何だ！？」

シグナムの手が、宙の戒典デインノモスに触れかけたとき、突然剣が動き出し、どこかへ飛んでいった。

魔導師メンバーが咄嗟にその方向を見る。

ヴィヴィオの手に、宙の戒典デインノモスが握られていた。

彼女は剣をしっかりと掴み、集中を続ける。

やり方は分かる、だが実践は今回が初めてだ。

それでも、成功させなければならない。

ガンナーは慌てて銃口をヴィヴィオに向けて、やめさせようとした。だが次の瞬間、ヴィヴィオは剣を振った。

足元に陣が展開され、続けて剣のような紋様が回転しながら上昇していく。

そしてその波は、全体に広がった。

ほとぼしるエアルがリングに干渉し、中和させ、打ち消していく。

完全にギルドの皆にかけられていた拘束を外した時、ヴィヴィオは安堵の表情を浮かべた。

額には脂汗が浮いている。

「ヴィヴィオ……！！！」

「ごめんなさい、助かりまし」

言い切る前に、ハチマキの少女がヴィヴィオの真ん前に立つ。

そして拳を振り上げると、

「…………ごめんっ！！」

鳩尾に、一撃加えた。

ヴィヴィオは咄嗟に宙の戒典デインノモスをかばうように後ろへやると、剣での防御を試みた。

しかし少女の前では何の意味も成さず、真っ二つに折れてしまう。

物体を浮遊させ、宙の戒典デインノモスを使用したことにより、ヴィヴィオはいぶ消耗していた。

そこに強力な一撃である。

倒れない方がおかしかった。

ヴィヴィオはゆっくりと体を傾けて、うつぶせに倒れる。

少女はそれをやりきれない表情で、見つめていた。

「……………仕切りなおし、だな、さてどうする？高町なのは」
「……………」

ナノハはシグナムの問いかけに、無言になった。

倒れたヴィヴィオと宙の戒典デインノモスは、少女が抱いている。

しばらく黙り込んでいたナノハは、突然片方の小太刀ともう片方の鞘を捨てた。

そして残った一本の小太刀を逆手に持つ。

「……………『神速』」

突如ナノハの姿が消える。

そして再び現れ、

「動かないで」

ガンナーを羽交い絞めにし、その首に刃をあてた。

目を見開く一同を他所に、ナノハは続ける。

「こちらの条件を飲まない限り投降しません、この子の命も奪います」

あくまで冷静に、語気と刃をあてる力を強くして、魔導師たちを睨

んだ。

誰が見ても分かる、ナノハは人質を取っていた。

「なっ、ナノハ!？」

「何をしている!？」

「だめですナノハ!」

「早まったらいけないよ!？」

「そうだよ!ナノハはもう十分苦しんだじゃないか!!」

リタ、レイド、エステル、レイヴン、カロルは慌ててナノハを止めにかかる。

しかしナノハは首を横に振ると、

「ごめん、けどもう耐えられない……わたしので、
皆が怪我するのは嫌だ!」

なお睨みを聞かせながら、ナノハは叫んだ。

束の間周囲が静まり返る。

やがて、虫の鳴き声が耳に入り始めたとき、金髪の女性が前に進み
出た。

「……条件は、何ですか？」

「ちょ、フェイト隊長!？」

あせるハチマキの少女を他所に、ナノハはゆっくりと口を開く。

「娘のヴィヴィオは連れて行かないことと、今後一切宙の戒典には
手を出さないこと」

レイドと、リタの目が、見開かれた。

『隊長』と呼ばれた女性は、小さく頷く。

「娘さんの件については了承できます、ですが、ロストロギア・・・
・・・・デインノモス、でしたか、申し訳ありませんが、それに関し
てはちよつと難しいです」

女性は残念そうに目を伏せた。

と、そこへ何かが飛来してくる気配。

女性は反射的に掴み、それが何なのかを確認する。

この世界のものと思われる文字がびっしり書かれた、メモ紙にして
は少し大きめの紙だった。

「それ！^{デインノモス}宙の戒典についてまとめた論文よ！元々学会提出用だった
けど、この際仕方ないわ！！持っていてきなさいこの人でなし！！」

リタが、投げる姿勢から戻って腕を組みつつ、そう言った。

「ちょ、リタ！？」

「お前なにをしとるんじゃ！！」

焦り声を荒げるエステルとパティ。

リタも同じく声を荒げて、

「あたしだってこんな真似やりたくないわよ！！ナノハを犠牲に宙^デ
^{インノモス}の戒典を守るうなんて馬鹿な真似！」

「だったら！」

「けど！！」

下に向けていた視線を上げて、魔導師たちを鋭い目で見る。

「ナノハだけじゃなくて宙の戒典まで失くしちゃったら！！誰がどうやってナノハが帰ってくる場所を守るのよ！！？」

「……………え？」

「リタ、それってまさか」

その瞬間、リタの口角がいたすらつぱく上がった。

それを目にしたギルド一同もリタの意思を瞬時に悟り、釣られて不適に笑う。

「そうか……………そういうことか！」

「そうだもんね！」

「ええ、そうすればいいじゃない」

「わたし達がやらなくて、誰がやるんですか！」

「うちらはしつこいぞお？」

「仲間のためならえんやこらってね」

「まったく、リタの言うとおりだな」

「ワンツ！」

仲間達の声を受け、リタはナノハを指差し、

「そういうことよナノハ！待ってなさい、すぐにそっちに行く方法見つけて、助けに行くから！！」

ナノハは困惑している。

ブラスティア

魔導器が生きているのなら話は別なのだろうが、生憎武醒魔導器以外は全て使い物にならなくなっているのだ。

ブラスティア

魔導師たちも魔導器のことは知らずとも、考えは似たようなものだった。

リタは追い討ちをかけるように、今度は親指で自分を指し。

「あたしを誰だと思ってるの？ 学術都市アスピオが生んだ天才魔導士、リタ・モルディオ様よ！？ 次元を渡る方法なんて、すぐに見つけ出してやる！ そんであんたを迎えにいくのよ！！」

自信たつぷりに、そう宣言した。

ナノハはガンナーの拘束を解きながら、困ったように笑う。

しかしそれはいつも見せる笑顔ではない。

どこか安心しきったような、心から笑っているような、そんな笑みだった。

まどろみの中、ヴィヴィオは目を覚ます。

頭と記憶をたたき起こし、そしてはっとなった。

顔を上げると、両手を拘束され魔方陣の中央に立っている母の姿が見える。

それで全てを悟る。

「お母さん！！」

仲間の制止を振り切って、まだふらつく足を無理矢理動かして。走って、走って、走って、走って、走って、走って。思いっきり手を伸ばす。

しかし触れる触れない以前に、どうしようもない壁があった。

突然目の前にシグナムが現れる。

ヴィヴィオは咄嗟に剣を構えて、気づいた。刀身が折れているのだ。

おそらく少女に殴られたときに折れてしまったのだろうと考えながら、苦い表情をする。

対するシグナムは容赦無しに、一閃した。

「つか………!!」

『殺せない設定』にしてあるとはいえ、痛みはかなりのものである。腹部を押さえながらがつくりと膝をつく。

そうしている間にも、母の体が光の粒子になって消えていく。

「お、かあ、さんっ………!!」

絶対に助け出したかった。

コピーにすぎなかった自分に、母が手を差し伸べて救ってくれたように。

今度は自分の番だと、そう、決意していた。

だが、今回は相手が悪すぎる。

母が鍛えたフォードメンバーに、母と苦楽をともにした『友人』がいるのだ。

素人目で見れば、十分に奮戦したほうであろう。

だんだんと『この世界』からいなくなっていく母を悔しそうに見つ

めながら、ヴィヴィオは拳を握った。

「・・・・・・・・ヴィヴィオ」

ふと、ナノハが口を開いた。

「・・・・・・・・待ってるよ」

「・・・・・・・・っ！」

言い切ると同時に、魔導師たちも、母も、完全に消える。
拳をさらに強く握って、地面を撃った。

ああああああああああっ！！！！

十一番星（後書き）

スーパリータっちタイム（笑

今回のシーンを書くためにこの小説を始めたといっても過言じゃないと思います（キリッ

さて、それでは『リリカルGV』いきまーす。

V e r i t a s 様

ご感想ありがとうございます。

シャマルとザッフィーはこのためにお留守番してました^^

明星式号は・・・・そのうち出るかもですww

次回、ナノハを迎えに行く為にあれこれ準備するギルドの面々、一方、ヴィヴィオは・・・・？

それでは^^ノシ

べ、別に、V e r i t a s 様に指摘されるまで、ザッフィーとシャマルのこと忘れてたわけじゃないんだからね！？（爆！！

十二番星（前書き）

お待たせしました、十二話です。

十二番星

久しぶりに彼女の顔を見た。

髪を切っていた彼女は、少しやつれて見えた。

「……いや、原因であるわたしが『見えた』なんて他人行儀か。

訂正、『やつれていた』。

それに、笑った顔がみんな作ったものだっただ。

今思えば、わたしが見てきた彼女の笑顔は全部あれだった気がする。出会ったときから、ずっと、ずっと。

アリサやずずか、家族にすらも、そんな笑顔だったと思う。

「……もしも何か理由があるとしても、わたしは何も聞かない気にいる。」

そしてすぐにでも『第56管理外世界』に帰すつもりだ。

彼女はわたし達のところにいるより、あっちにいたほうがいい。だから……。

「ちょっと、頼まれてくれる？」

『もちろんさ！！何でも言ってくれよ！！』

「この触媒はどうでしょうか？」

「それは……やさそうね、やってみましょうか」

「はい！」

あれから数日後の凛々の明星。
ブレイヴウェスベリア

リタは早速次元移動装置を作っていた。

パティやエステルを助手役とし、様々な素材で実験を重ねていたが、これといった成果は出ていないのが現状だ。

それでも、リタは諦めていない。

世界が違うとはいえ、同じ人間が世界を渡る術を持っているのだ。自分達に出来ない道理はないと思っていた。と、そのとき。

「うやあっ！」

どかんっ！！と派手な音を立てて、パティの短い悲鳴が聞こえた。

リタとエステルが急いで音源のほうへ向かうと、派手に壊れた触媒と、幾らか焦げている床と壁が目に入る。

そして、

「あう……すまん、また触媒が無駄になってしまった……」

「」

「いいわよ、これもダメって結果が分かったから」

エステルがパティの体についた埃をはたき、リタは破片の回収作業

を始めた。

リタは小さくため息をついたものの、にこっと笑ってから、

「大丈夫よ、お陰でこの触媒はだめって結果が分かったから」

「なるほどな、何事も捕らえようじゃの」

「ですね」

エステルとリタとパティの三人で苦笑いを交わしてから、片付けの作業に入った。

そんなさなかで、ふと、パティが思い出したように顔を上げる。

「そつえばヴィヴィオは？姿を見かけんが・・・・・・・・？」

「ああ、あの子なら・・・・・・・・」

「円閃牙！」

「虎牙連斬！」

「烈波拳！」

「爪竜連牙斬!!」

街外れ、ヴィヴィオとユーリはそこにいた。

両者ともに木刀を持ち、激しい打ち合いをしている。

斬撃が頬を掠めたと思えば、鋭い蹴りが繰り出される。

拳をかわされたと思えば、衝撃波が襲ってくる。

打っては打たれての激しい攻防を繰り返していた。

刹那、凄まじい破壊音とともに、木刀が折れた。

振り切られたユーリの木刀は、ヴィヴィオの喉元に当てられている。

ヴィヴィオの右手に握られている木刀は、鐔から先が無残に破壊されていた。

しばらくそのままの姿勢で、止まる。

草原をなでる風の音すら聞こえないかと錯覚しかけたときだ。

ユーリの木刀が、ゆっくりとヴィヴィオから離れた。

瞬間、たまっていた空気が肺からいつきに抜けていく。

「……………気合入ってんな」

「はい……………あんまり、お母さんを待たせるわけには、いきませんから」

肩で息をしながら、ヴィヴィオは一礼した。

「……………あんまり無茶すんなよ？」

そのまま去っていく彼女の背中を見ながら、ユーリはぼつりと呟く。

「・・・・・・・・ふうつ！」

一旦ギルドに帰ったヴィヴィオは、別の木刀を携えて再び外に出た。

ハルルの樹の下、花びらが舞う中で、鈍く短く息を吐き出して、体に溜まった闘気を解放する。

空気が爆ぜ、闘気が淡い光を帯びた。

「蒼破刃！」

刀身に纏わせた衝撃波を打ち出す。

「閃空裂波！」

木刀を振りながら上昇、急降下しながら一閃。

「裂風空牙衝！」

宙に飛び上がり回転した後、鋭い突きを繰り出した。

「らあああっ！」

集中力、身体能力を極限にまで高め、木刀を握り締めた。

力の限り一閃を繰り出し続け、途中蹴りを入れながら最後に切り上げ

「あつ、わあっ！」

「……………かけて足を滑らせる。

体が力について行けず、バランスを崩してしまったようだ。

今ヴィヴィオがやっていたのは、『バーストアーツ』の練習。

魔導師達の部隊に乗り込むまでに何とか完成させようとしているのだが、どうも上手くいかないのが現状である。

ちなみに動きはユーリのバーストアーツ、『天狼滅牙』を参考にしているそうだ。

「……………はあ」

一旦体制を立て直すも、ため息をついて座り込んだ。

強化魔法を解除し、成長した姿から現在の幼い外見に戻る。

火照った体にあたる夕方の風が心地いい。

茜色に染まっている空を見て、再びため息をついた。

と、その時、

「ここにいたか」

「……………あ」

レイドが歩み寄ってきた。

「エステルが心配していたぞ？『昼に出たつきり帰ってこない』って」

「……………すみません」

「それは俺じゃなくてエステルに言おうな？」

「……………はい」

苦笑いしてから、レイドは隣に座った。

「……………レイドさんは、自分が弱い所為で悔しい思いをしたことってありますか？」

「ああ、あるよ」

さらつと答えたレイドを、ヴィヴィオはかなり驚いた顔で見た。口を押さえて、くすくすと笑いながらレイドが続ける。

「一番悔しかったのが……………人魔戦争で母さんを亡くしたことかな、まだ子供だったとは言え、護れなくて齒がゆい思いをした」
当時のことを思い出しているのだろうか？

レイドの横顔には、どこか暗い部分が見受けられた。

「一時期塞ぎ込みもしたけど、俺の恩人……………この宙の戒典デインノモスを託してくれた人が俺に言ったんだ、『いつまでも絶望していることを、お前の母が望んでいるのか』ってな」

「だから」と言い、レイドはヴィヴィオと向き合う。

「その、何だ、俺が言いたいのは、そんな暗い顔でナノハのところに言っても、逆に心配されるだけだぞ？」

レイドは照れくさそうにうなじをかいだ。

ヴィヴィオは一瞬ポカンとしてから、くすつと笑って返事をする。
レイドもつられて微笑んでから、

「それじゃあそろそろ帰るか、みんなが待ってる」
「はい！」

ヴィヴィオの手を引き、帰路についた。

「っし、とうちゃーくつと、あとはこれを届けるだけだね、確か馬鹿でかい桜の樹が目印らしいけど……あれかな？」

所変わって、ミッドチルダ首都『クラナガン』。
地上本部が壊滅した今、ミッドの治安は、正式に設立された部隊『機動六課』によって守られていた。

その屋上で黄昏ているのは、あの時現場にいた、『金髪の女性隊長』こと、『フェイト・Ｔ・ハラオウン』である。

「・・・・・・・・・・はあ」

今まで考えていたのは、先日容疑者　　と言つても、犯行を行つたのは確実であり、本人もそれを認めているが　　として拘束した友人のこと。

半年前のあの夜の光景は忘れもしない　　もちろん、自分が彼女に向かつて放つた言葉も　　忘れるわけが無い。

おそらく友人　　なのは、ずっと自責の念に駆られ続けたのだらう、半年前に比べてやつれていた。

若干、痩せたようにも思える。

・・・・・・・・・・記憶を遡り、切欠になった事件を思い出した。

一見、あれが全ての始まりにも思えるが、フェイトはそれを否定した。

さらに遡り、幼少時代を脳裏に浮かべる。

それと同時に蘇ったのが、いつかなのはに聞いた話。

確か『幼い頃に父が大怪我を負い、一時期寂しい思いをした』、という内容だったと思う。

その時、フェイトの中で全てが繋がった気がした。

「あ、フェイトさん！」

「探しました！」

そこへ、二人の人物が駆け寄ってくる。

『槍騎士』こと『エリオ・モンディアル』と、『竜使い』こと『キヤロ・ル・ルシエ』だ。

色々な事情によりフェイトが保護者となっているためか、二人とも慕ってくれている。

そしてまだ幼いながらも、立派な魔導師として活躍していた。そんな二人はどこか心配そうに、フェイトに駆け寄る。

「エリオ？キヤロも……………どうしたの？」

暗い思考を跳ね飛ばし、何とか二人を心配させまいと作り笑いを浮かべて、フェイトはかがんで視線を合わせた。

「いえ、ただフェイトさんが見当たらなかったので……………」
「その、大丈夫ですか？」

しかしこの二人は意外と鋭かったようだ。

現場での気迫はどこへやら、おどおどしながらも、フェイトを心配しているようだった。

フェイトは困った笑いを作ってから、ばれちゃったか、と呟く。
エリオとキヤロに背を向けて、もうすっかり暗くなった海を見つめた。

「……………モンディアル士、ルシエー士」

「……………？」

「は、はい！」

突然階級つきで呼ばれ、思わず背筋を伸ばし、敬礼するエリオとキヤロ。

フェイトはそんな二人を横目で見て、くすりと笑ってから、

「これから独り言を言います、二人は聞き流すように」

「・・・・・・・・え？」

戸惑う二人を他所に、フエイトは語りだした。

「・・・・・・・・今回のこと、なのは責められるべきじゃないって思ってる」

二人が困惑しだした雰囲気を感じ取りながらも、構わず続ける。

「元々、あの街で酷い行いをしていたあの人たちが悪いんだし、メディアだって、『自業自得だ』って騒いでる」

「けど」と言葉をつむぐフエイトの背中を見ながら、二人は落ち着きを取り戻した。

「ヴィヴィオが人質にとられたとか、あの人たちが悪いとかそれ以前に・・・・・・・・わたし達が、なのはを神聖視しすぎたからだと思う」

エリオとキャラは、息を呑んだ。

「確かになのはは魔導師として優秀だし、美人だし、言うことだつて惹かれるものがあるよ、けど、結局それだけなんじゃないかな？」

言っていることが難しく感じたのか、二人は首をかしげた。

「なのはから魔法と仕事を取ったら、結局みんなと同じ普通の人間なんだと思うんだ」

そこで、やっと意味が分かったらしい。
納得した顔になる。

「ここにいる人たちの中には、わたし含めて、なのはに助けられた人もいるから・・・そんな簡単なことに気づけなかったんだよ、もちろん、それがなのはを追い詰めてるってことにも」

罪悪感をまとった表情になった二人に、苦笑いで笑いかけてから、

「だからこの一件が落ち着いたら、すぐにあの人達の所に返してあげようと思ってる・・・十年も一緒にいたわたし達より、あの人達のところにいた方が、なのはも気楽だろうから」

苦笑いして振り向いたフェイトを、エリオとキャロはどこか複雑そうに見つめていた。

するとフェイトはぱん、と両手を叩き、

「はい、独り言おしまい！ご飯食べに行こう、まだ食堂あいてるはずだから」

「・・・あ」

「はい！」

三人は手をつないで、屋上を出た。

「・・・確かにそうかも知れんな」

三人が出て行ったあと、シグナムが姿を現した。
先に屋上に来て涼んでいたら、自然と先ほどの『独り言』が耳に入ってしまったのだ。

「・・・・・・ローエルは、許してくれるだろうか？」

この場にはいない人物を思い浮かべながら、彼女も屋上を後にする。

（アルフ、上手くやってくれてるかな？）

翌日、花の街ハルル。

ラピードが散歩していると、なにやら街の入り口の方が騒がしかった。

駆けつけて見ると、街の人々に何かの生き物が取り囲まれている。ふと、話し声が聞こえた。

「何なんだろうな？この犬」

「いや、狼かもしれんぞ？」

「何にしる橙色の毛とは珍しい」

「体格もがっしりしてるし……オスか？」

「何か啜えているぞ」

どうやら、この辺では見かけない動物が来たので、みんな珍しがっているようだ。つた。

人々は珍しいような、不安なような声や表情でまじまじとその生き物を見ている。

やがて、

「まさか、新種の魔物、とかじゃないよな？」

「そんなわけ……ないとも言い切れないか」

「あー、こういふとき結界があつたらなあ」

口々にそつといい始めた。

騒ぎは広まり、ついには物騒なものをもって出てくる者まで現れる。もちろんラピードは敵ではないと判断していたため、まずいと感じ取ったのだらう。

人ごみの中心に飛び降り、その生き物をかばうように立ってから一声鳴いた。

街の人々はラピードの行動を見てから、取りあえず物騒なものを仕舞い。

「危険なものじゃないのか？ラピード」

「ワン！」

街の人の問いかけに、当たり前だ、と言わんばかりに吠えた。それを聞き、人々はようやく警戒心を解く。

「ラピードが言ってるんなら、間違いないだろう」

今度はそう言いながら、各自家に戻ったり、仕事に戻ったりした。ラピードはそれを確認してから、後ろに振り返る。

そこにいたのは、橙色の毛並みを持つ狼のような生き物だった。体格もラピードより一回り大きいようだ。

そいつは啜えていたものを置くと、地に伏せた。

どうやら敵意は無いことを示しているようだ。

ラピードは『もういいよ』と伝えてから、場所を移動した。

ここからは、その狼もどきとラピードの会話を書かせていただく。

『ありがとう、助かったよ』

『何、俺の勘が敵じゃないって言ってたからな、当然のことをしたまでだ』

『それでもだよ、あのままじゃあたし魔物に間違えられて、下手したら殺されていたかもしれないからね』

『ほう、ところでそれは何だ？ 匂いから何か金属類と見受けるが？』

『おっと、そうだった！ 悪いけど、ブレイヴウェスベリア凜々の明星^{ツキノヒメ}って知ってるかい？

あたしのご主人の使いで、これを届けに来ただけ……』

『ああ、なら俺に渡してくれればいい、俺はそのメンバーだからな』

『そうだったのかい！？ それじゃあ頼んでいいかい？』

『任せろ、責任もって届ける』

『度々すまないね、それじゃああたしはこれで』

『まあ待て、せっかく来てくれた客人だ、せめて土産くらい持っていけないか？』

『あー悪いけど、待たせるわけにはいかないからさ、またの別の機会にもらうとするよ』

『そうか、まあ達者でな』

『ああ、色々ありがとう！それじゃ！』

颯爽と走り去っていく狼もどきを見送ってから、ラピードはギルドに戻ることにした。

ギルドについたラピードは、ちょうど開いていた窓から入る。メンバーはちょうど食事休憩を取っていたらしく、食堂にいた。

「?どうしたのラピード」

「それは何じゃ?」

食堂にいた、レイヴン、カロール、リタ、エステル、パティ、ヴィヴィオの六人の視線が、ラピードが咥えていた『届け物』に集中する。ラピードは一番近くにいたヴィヴィオに『届け物』を渡した。

「開けていい?」

「ワンツ!」

ラピードに確認を取ってから、ヴィヴィオは恐る恐る『届け物』の封を解いてみた。

中に入っていたのは、何らかのパーツと二つの書類。

一つは大きく、何かの説明書のようなだった。

そしてもう一つは手紙だった。

ヴィヴィオはその文面をざっと見て、一番下に記してあった差出人の名前を見る。

そして固まった。

「何が書いてあるの？」

様子が変わったヴィヴィオに、リタが問いかける。

ヴィヴィオは、どこか不安のような、懐かしいような顔でリタを見て、黙って手紙を渡した。

手紙を受け取ったリタは、中身はかなり重要なことが書いてあると悟り、思わず慎重に受け取ってしまう。

そして文面をぶつぶつ呟きつつじっくり読んでから、最後に差出人の名前を読み上げた。

「差出人、フェイト・T・ハラオウン……誰？」

「ヴィヴィオちゃんは知ってる？」

レイヴンの軽い口調での問いかけに、ヴィヴィオは若干震えながら、

「……わたしと、お母さんの後見人……あの時、お母さんとレイドさんと、戦ってた人だよ」

その場の全員が、驚愕した。

「じよっ、冗談、だよな？まさか敵が手紙となんかのパーツを送りつけてくるなんて……」

「慣れないことはしないほうがいいよ？」

カロールとレイヴンは口元を引きつらせながら、ヴィヴィオに問い詰める。

「ごめん、本当のこと」

短く、はっきりと告げられた事実、二人は固まる。

「それに一応敵じゃないみたいよ」

手紙をまじまじと見返しながら、リタは断言した。

「何故？」という視線を送るメンバーに、手紙をひらひらせながら。

「このパーツ、あたしがまさに作り上げようとしていた次元を移動する装置の部品みたい、もっとも、一部のパーツはこっちで調達しなきゃいけないみたいだけどね……これで、ナノハを助けてやって欲しいってさ」

とたんに、全員の表情が引き締まった。

「つまり、奴さんは味方ってことね？」

「ええ、ご丁寧にあちらさんの部隊の見取り図と、座標まで教えてくれる」

「けどばれたらやばいんじゃないかのう？」

パティは心配そうに顔をしかめる。

つられて、エステルやカロールも不安そうに目じりを下げた。

「そうですね……酷いことされなければいいんですけど」

「とりあえずそのフェイトって子の為にも、しっかりそれを完成さ

せて、知らぬ存ぜぬを決め込みましょ」

「うん！せっかく協力してくれたんだしね！」

みんなが明るい表情で、決意を固める中、ヴィヴィオは一人、窓の外に目をやる。

「・・・・・・・・フェイトママ」

十二番星（後書き）

ラピードと接触した狼もどきについては皆さんお分かりとして。
近いうち、六課に乗り込みます。

十三番星（前書き）

結構早くに書きあがったのでUPです。

今回は六課サイドが多めでございます^^

2/9：加筆。

十三番星

「・・・・・・・・・・あ」

六課内、拘置所。

『ごついナツクルを装備した少女』こと『スバル・ナカジマ』は、食事の乗ったトレーを手に、とある檻の前で立ち止まる。

そして、前に置いた食事がまったく手をつけられていないのを目にして、思わず声を上げた。

「駄目じゃないですか、ちゃんと食べないと」

その隣に今もつていたトレーを置いて、中の方に話しかける。

その声と表情は、心から心配しているものだった。

「このままじゃ、弱っちゃいますよ？なのはさん・・・・・・・・」

容疑者を拘束するには少し広い部屋のその奥に、ナノハ　　否、なのははいた。

膝を抱えて、頭をうずめていた彼女は顔を上げると、乾いた笑みを見せて、

「ごめんね、でも、食欲わかないんだ」

瞳の光は薄れて、いくらか痩せている。

スバルは浮かない顔をしてから、一礼してその場を去った。

今は犯罪者になってしまっているとはいえ、自分を救い、教え導いてくれた恩師だ。

最低の礼儀はつくしているつもりだった。

去っていくスバルの背中を見送ってから、なのはは再び顔をうずめる。

「……………待っているよ、みんな」

ぽつり。

無意識のうちに、そうこぼしていた。

「なのはさん、どうだった？」

自室に戻ってきたスバルに声をかけたのは、彼女のルームメイト兼相棒の『ガンナー』こと『ティアナ・ランスター』。

何やら話してもしていたのか、隣にはキャラがいる。

「いつもどおり、食事に手えつけずに奥の方でじっとしてるだけ」

「……………そう」

「大丈夫なんでしょうか？日に日に弱っていつてるみたいですし……………」

三人そろって、暗い表情でうつむいた。

「……………わたし達、なのはさんの何を見てきたんだろうね」

不意に、ティアナが呟く。

疑問に満ちたスバルの視線と、どこか納得しているようなキャラの

視線を受けながら、彼女は続ける。

「色んなことを教えてもらって、たくさん励ましてもらって……
・・・今度はわたし達が何かする番なのに、何にも出来てない」
「………情けないね、わたし達」

ふう、と同時にため息をついた。

「………ほんと、何してるんだろ」

「エアルホウセンダケ十本！そろえてきたぞお！！」
「こっちも鉄鉱石三つ持ってきた！」
「スチール四つ生産完了だ！」
「ありがと！そこに置いといて！」

次元移動の手がかりを手に入れた^{フレイヴウェスベリア}凜々の明星は、いつも以上に慌しかった。

フエイトからの手紙に書いてあった素材をそろえるために、全員が一丸となって四苦八苦している。

「エッグベアの爪、採ってきました!」

「ご苦労様!」

ヴィヴィオも修行を一時中断し、素材集めに所為を出していた。自室にこもっているリタはそれらを受け取り、てきぱきと装置を組み立てていく。

全員が全員、昼食をとるのも忘れていた。

もちろん腹が減っていたが、仲間の為に自分の体に鞭打ち、今日も駆けずり回る。

夜。

「くはあーっ、ボクもーだめー!」

「今日も結構動き回ったものね」

「腹減ったのう……」

リビングには、ぐだっとしているメンバーがいた。

カロールとパティは机に突っ伏し、ジュディスはソファで仰向けになっている。

「でも装置の組み立ては順調よ、あと二日か三日で終わるわ」

リタが人数分のココアを持って全員に配った。
皆開いた腹にそれを一気に流し込むと、同時に「ぷはあーっ!」と

息をつく。

と、その時、

「ただいまー」

「すみません！遅くなりました！」

今日一日出かけていたエステルとレイヴンが戻ってきた。
二人ともリタからココアを受け取り、ほっと一息つく。

「二人ともどこに行ってたの？」

「はい、今日はそのことについて、皆さんに朗報です」

『朗報』と聞き、全員が期待をこめた目でエステルを見る。
エステルはさもうれしそうな満面の笑みを浮かべて、

「わたし達が留守の間、誰がハルルを護るのかっていう課題が残っていましたよね？」

「ああ、確か救出組と防衛組で分かれようって案が出てたろ？」

「はい」

「けど」とレイヴンがエステルの話を引き継ぐ。

「その必要なくなったのよね」

ピシッと、空気が凍りついた。

そんな中で、何とかカロールだけが再起動する。

「えと、つまり？」

「実は今日、嬢ちゃんと一緒に帝都に行って騎士団長に直談判してきたのよ、元々だめもとだったけど、OKもらえちゃった」

数瞬の沈黙、直後。

リビングいっぱい絶叫が響いた。

「ど、どこの隊がくるんじゃ!？」

「皆さんご存知シュヴァン隊、元々決まってたことらしくてさ、着任する日にちを早くしてくれたんだよ」

驚愕の絶叫が喜びに変わる中、ユーリはいたずらっぽく笑いながらヴィヴィオを見る。

「よかったな、これで確実にナノハを連れ戻せる」

「あ……………はい!」

彼女が見せた笑顔は、無邪気なものだった。

「なのはさん」

場所は戻って、六課の拘置所。
いつもどおり食事を持ってきたスバルが、なのはに話しかけた。

「なあに？」

「あの、向こうではどんな生活をしていたんですか？」

すると、なのはは黙り込んでしまった。

「あ、えと、その、すみません、あまり思い出したくない……
・ですよね、えーっと……」

まずいことを聞いてしまったかと思い、スバルは慌てて話題を変えようとする。

だがナノハは小さく、弱々しく、くすつと笑って、

「……向こうは、ミッドと違って大きなビルもないし、人々の生活も、こっちに比べたら貧しいよ、だけど、みんな明るくて精一杯生きてる、いいところ」

「！……そ、そうなんですか」

「うん」

陰りがさし、弱々しいとは言え、なのはが明るい表情を見せたことに気づき、スバルもつられて笑顔を見せる。

なのははスバルに語った。

魔物と呼ばれる危険生物がいること、国が一つしかないこと、少し前に災厄が再臨した話、その災厄を打ち払った人々の話。
フラスティアー

ギルドのこと、騎士団のこと、魔導学のこと、魔導器のこと。
そのどれもが、スバルにとっては新鮮で、爽快で、楽しくて。

子どものように、続きをねだっていた。

閑話休題。

もうかなり『テルカ・リュミレース』について話し込んだ頃、急になのはが咳き込んだ。

話を聞いていたスバルは思わず駆け寄りかける。

だが、鉄格子があることをもろに忘れていたため、顔面にぶつけてしまった。

なのははそんなスバルをみて、少し齒がゆい思いをしながら、

「スバル、大丈夫？」

「そ、それよりなのはさんですよ！どこか具合でも悪いんですか？」

「わたしは大丈夫、横になれば楽になると思うから」

「・・・・・・・・・・」

スバルはどこかやりきれない顔でなのはを見つめていた。

対するナノハは三度弱々しく笑って、

「今日は楽しかった、久々にこんなに話せてよかった・・・・・・・・・・
ありがとう」

「っ・・・・・・・・・・どう、いたしまして」

無理やりに笑顔を作ってから、スバルは逃げるようにその場を去っていった。

勢いに任せて、一気に駆け抜けていく。

途中何人かに声をかけられたが気に留めることなく屋上に駆け上がり、空を仰いだ。

頭の中は悔しさでいっぱいだった。

実力が上がっても、鉄格子の中の恩師を助けられない。

そもそも、恩師が悩んでいたのに気づけていない自分がいる。

助けられてばかりで、教えてもらってばかりで、そのくせ何も返せていない。

ただ見ることしかできない無力な自分。

うわああああ

っ！！！

己に絶望し、一人感情に任せて叫ぶ。

時は進み、再び場所は戻って、翌日、フレイヴエスベリア凛々の明星。

リタの自室は異様な沈黙が漂っていた。

慎重に、慎重にネジをまわし、パーツをはめていく。

そしてカチャ、という音を最後に、部屋から音が無くなった。
十秒とも、十分ともつかない時間が流れる。
刹那、

「できたああ　　っ！！」

拳二つ分ほどの大きさのそれを掲げて、飛び跳ねた。

「なんだってー！？」

「ほんと！？」

「やったのうリタ姉！！」

声を聞きつけ、どこかと仲間達が入ってくる。

「ほんとよ！夢じゃないのよ！！」

出来上がった装置を見せて、がらにもなくはしゃぐリタ。

仲間もつられてはしゃぎだし、仕舞いにはリタを胴上げし始めた。
もちろん、完成した装置はちゃんと避難させてある。

「あらあら、みんな可愛いわね」

「だってやっと完成したんですよ！？あとはナノハのところに行く
だけです！」

エステルも胴上げには参加していないものの、うきうきとした様子
を見せた。

そんな中、ヴィヴィオはどこか緊迫した表情をしていた。

別に完成がうれしくない訳ではない、むしろみんなに混じってはし
やぎたいくらいだった。

だがそれでも、彼女は難しい顔をしている。

レイドとユーリはそれに気づき、二人で示し合わせて、ヴィヴィオの隣に立った。

「出来てよかったじゃねえか」

「流石はリタだな、思ったより早く完成させおった」

「・・・・・・うん」

なお明るくならないヴィヴィオを見て、二人は苦笑いをする、

「なーに浮かない顔してんだよ」

「お前はまだ子供だ、別にあの中ではしゃいだって、誰も文句は言わないさ」

「・・・・・・うん」

二回とも帰ってきたのは生返事。

レイドとユーリは再び苦笑いをした。

「何か不安なことでもあるのか？」

「・・・・・・あの人達と戦って、勝てる自信が無い」

「別に勝たなくてもいいじゃねえか、俺達の目的はナノハを連れ戻すことだ、あいつらを倒すことじゃない」

すると、ヴィヴィオはぐつと下唇を噛む。

「・・・・・・でも、あの時は何も出来なかった」

表情は読み取れなかったものの、不安と後悔でいっぱいなのだろう。肩が若干震えていた。

そんなヴィヴィオを見た二人はふつと微笑んで、

「なら今回で挽回すればいいさ」

「ああ、それにあの時のお前は善戦していたと思うぞ？」

「・・・・・・・・」

ヴィヴィオは二人を見上げた。

不安が残っているようだったが、いづらか解消できたようだ。

「っそだ、みんな！ちよつと！」

突然、胸上げから開放されたリタが声をあげた。

皆が注目する中、彼女は机に寄ると、小さなピンのようなものを取り出す。

ヴィヴィオのぞく人数分そろっているそれには、色とりどりの宝石がはめ込まれていた。

「フェイトの手紙の中にあっただけど、向こうの世界にはエアルが無いんだって、代わりに『魔力』って呼ばれるものがあるそうなの」

一人一人にそれらを見せながら、リタは説明を続ける。

「で、フェイトが案をくれてあたしが作り上げたのがこれ、ボーディプラスティア武醒魔導器に取り付けることで、向こうでも術技の使用を可能にするものよ」

「ということだ」とリタは徐に片手を前に突き出した。

「あんたらのボーディプラスティア武醒魔導器、貸しなさい」

「うん、分かった！」

「それを取り付けるの、リタにしか出来ないですもんね！」

「任せたわ、リタ」

個々が自身の一部とも言える武醒魔導器ボーディプラスティアをリタに渡しているとき、
レイドが手を上げた。

「すまん、俺はどうすればいい？」

レイドの武醒魔導器ボーディプラスティアは、右目に埋め込まれているのだ。
が、リタは特に気にした様子も無く、

「あ、じゃあこの場でつけるわ、多少痛みはあるかもだけどね」
「・・・・・・・・」

何はともあれ、移動手段を手に入れた凛々フレイヴエスベリアの明星。
部屋に戻ったメンバーは、武器の手入れや、強化の計画を練っていた。

スキット『名前』

パティ：そうじゃ！こいつにも何か名前をつけたらどうじゃ！？

ジユデイス：それって明星式号みたいに？

レイヴン：おっ！俺様それにさんせー！

エステル：同じく賛成です！

リタ：まあ、次元移動装置じゃ長ったらしいし、ここはうちの名づけ係の出番ね

カロール：はいはいはいはい！韋駄天壱号！

ユーリ：明星壱号っぽいな

リタ：でもいいんじゃない？がきんちよにしちゃ珍しくまとも名前だし

レイド：韋駄天壱号、か、うんいいと思う

パティ：よおーしっ！装備と体調を万全にして、乗り込むだけじゃ！
全員：おーっ！

スキット『武器』

ユーリ：ヴィヴィオ、ほれ

ヴィヴィオ：ふえ？あ、わわわっ！…………あの、これって

ユーリ：ああ、俺の刀だな

ヴィヴィオ：ど、どうして…………

ユーリ：あいつら相手にバトルソードや木刀じゃ流石にきついだろ、
ナノハの教え子やダチと一戦交えるんだ

ヴィヴィオ：けど、そしたら師匠の武器が…………！

ユーリ：別に心配いらねえよ、俺にはもつと奥の手があるからな

ヴィヴィオ：・・・・・・？

ヴィヴィオは『小さな明星』の称号を得ました。
アイテム『韋駄天壺号』を入手しました。

十三番星（後書き）

眠気って怖いですね、時たま重要なことを忘れさせやがるので本当に冷や冷やもんです。

はい、前回返信しなかった言い訳終了！
それではリリカルGVいきまーす。

イブニングゼロ様

はい！栄養です！！

感想だけでお腹いっぱいになります^^

辛口で……いえるかなあ……？自分チキンなので……
お互いに更新頑張りましょう！

アスベル様

新年最初に感想してくださってる……！（おめでたい！

アスベル様の活力になれているようで、幸いです！

ラピードの口調はものっそい頑張りました（笑

次回もどうぞお楽しみに！

Veritas様

毎度ご感想ありがとうございます。

犬語は我ながらいいアイデアだと思っていたので、正直なところ、
してやったりな心境ですww

アルフであってますよ、忘れちゃだめですよ（笑

さて、次回はついに殴りこみ！！クライマックスの始まりだあ！！
それでは^^ノシ

十四番星（前書き）

大変長らくお待たせしました、十四話です。
ついに決戦が始まりました。
あちこちで火花が飛び散る！
それではどうぞ。

2 / 9 : 後書きに加筆。

お返事を脱字するってどうよ．．．．．o r z

十四番星

「お久しぶりです！シュヴァーン隊長！」

「シュヴァーン違うって、ただのレイヴンだって」

いよいよ出発の日。

レイヴンは、街の守りを担当してくれることになったシュヴァーン隊の様子を見ていた。

その少し離れたところにいたヴィヴィオは、初めて見る騎士の姿に興味津々である。

「はっ！すみません！ただのレイヴン殿！」

びしつと敬礼する小隊長『ルブラン』を見て、レイヴンは苦笑いをしたが、その目つきは部下を信頼しきっているものだった。

一方、レイヴンと談笑している騎士達を見ていたヴィヴィオは、はっと我に返り、ユーリに譲ってもらった刀『ニバンボシ』の手入れを始める。

刃こぼれが無いが、錆はないかと入念に刃を見つめていた。

「はりきってますね、ヴィヴィオ」

「あ、エステルさん！」

そんなヴィヴィオに語りかけたのは、エステルだった。

エステルはにこにこ笑って、ヴィヴィオの隣に座る。

「いよいよ今日、ですね」

「はい」

刀身に手入れ用の油を塗っていたヴィヴィオは、特に言葉を重ねずにただ肯定する。

しばらくヴィヴィオの手入れの様子を見ていたエステルは、ふと思いついたように一旦その場を離れ、戻ってきた。手には、自分の剣を握っている。

「一緒にやってもいいですか？」

「あ、どうぞ！」

ふつと微笑んでから、二人並んで刀身を手入れし始めた。

「バーストアーツは完成できましたか？」

「全然、ただど感覚はつかめてきてるので運がよければ現地で完成しちゃったりするかもしれません」

「そうですか……フェイトさん、でしたか、普段はどんな人なんです？」

何気なく投げかけられた問いに、ヴィヴィオは一瞬止まる。だがすぐに動きを再開した。

「なんというか、子供はいないのに、親ばかって感じの人です」

「お、親ばか？」

「はい」、と苦笑いをしながら、ヴィヴィオは続ける。

「わたしが転んでも、立てるようになるまでじっと待ってくれるお母さんと違って、真っ先に駆けつけるんですよ」

「それは……子供が好きな人なんですネ」

「うん、まだ幼い甥っ子さんと姪っ子さんがいたり、自分より小さい子の保護責任者になってたりっていうのもあるんですけど、やっ

ぱり、自分自身が小さいときに、悲しい体験をしたのが大きいみたいです」

首をかしげ、はてなをうかべるエステルに対しヴィヴィオは、

「まだ詳しくは教えてもらってないんですけど、とにかくそんな感じで、自分と同じ思いをしてほしくないって言うのが一番の理由みたいですよ」

「……………優しい方、ですね」

「わたしもいっぱい甘えさせてもらいました」

ふふつと笑いあつて、二人は刀身を鞘に納めた。

「さて、あとは道具を揃えなきゃ！」

「あ、ついていきますよ、わたしもちょうど買う物がありましたから」

「えへへ、じゃあ一緒にいきましょう！」

手をつないで笑いあいながら、店を目指す。

その無垢な顔が戦場に染まるのは、もうすぐ。

場所は変わって、レイドの自室。

「……………母さん」

愛用の、自身の身長とほぼ同じの剣を見つめ、語りかけるように呟くレイド。

アレクセイ
「あの父親に右目をいいようにされて、恨まなかった日はなかった、
一時期人が信じられないこともあった、誰も愛してもいけないし、
愛されてもいけないって思ってた」

けど、

ブレイヴウェスperia
「凛々の明星に出会って、また信じようって思えて……..
ナノハに出会って、いくつかが許された気がした」

だから、

「今度は俺が手を伸ばして、許す番だ」

そして、夜。

「こいつを取り出すのも、久しぶりだな」

そう言つてユーリが手にしたのは、空を思わせる刀身を持った、細身の剣。

『明星式号』。

それがこの剣の名前だった。

三年前、災厄を被うために使用されたそれは、ユーリの切り札として大切に保管されていた。

ユーリは刀身に自身の顔を映す。

「……………こいつを振るのは、人を斬るためじゃなく、仲間を護るため」

まるで己を戒めるように呟くと、自作の鞘にそれを収めた。自室を出て、玄関を出て、重々しく扉を閉める。振り返った先にいるのは、共に戦ってきた仲間たち。

「準備万端ね？」

ジユデイスが確認を取るように呟くと、全員が黙ってうなづく。

「それじゃあ……………行くぜ？」

「応っ！」

ケープ・モック大森林。

エアルクレーネの前に集まった一行は、リタを中心に円になっていた。

そして四方に、魔物でも、かといって人でもない存在がいる。

『精霊』。

三年前、世界に飽和していたエアル、及び星喰みを解決するために
エンデレケイア始祖の隸長の一員であった『フェロー』『グシオス』『ベリウス』
『クローム』の四体に協力を仰ぎ、転生させた存在である。

「よし、それじゃあお願いね！」

承知。

お任せを。

・・・・・・。

御意。

応えた順に、フェローが転生した『イフリート』、ベリウスが転生した『ウンディーネ』、グシオスが転生した『ノーム』、クロームが転生した『シルフ』。

それぞれの返事を聞いたリタは韋駄天壱号を起動させ、精霊達を頂点とした陣を展開させる。

フェイトからの手紙に書いてあった方法はこうだった。

まず、次元移動装置を完成させた後、エアルクレーネのすぐ側で起動。

次に精霊を中心とした陣を展開、六課の座標を入力し、エアルクレーネと精霊の力で転移するというものだった。

術式を制御しつつ、リタはてきぱきと座標を入れていく。

そしてチェックを全て終え、小さくうなづいた。

「準備完了！あとは転移だけよ！」

ヴィヴィオ以外、異世界へ渡るのは初めての経験だ。

正直、不安もある、しかし、向こうで待っている仲間がいる。表情を引き締め、武器を硬く握った。

「座標、固定！転移　　ッ！！」

エアルと、精霊達が発した光がほとばしる。

数瞬の瞬きの後に残ったのは、夜の中で変わらずに光る、穏やかなエアルクレーネだけだった。

「・・・・・・・・・・はあ」

部隊長室にてため息をついたのは、『ブリッジの艦長席に座っていた女性』こと、『八神はやて』である。

ここ『機動六課』の長である彼女は、今日も一日中書類と向き合っていた。

それもたった今、ひと段落着いたのだが。

しかし彼女のため息の訳は、それだけではない。

はやては徐に、一つの報告書を手に取った。

書かれている内容は、拘置所に拘束中の『高町たかまちなのは』についてだった。

「……………相変わらず食事に手をつけず、日に日に弱って来ている、か」

ぽつりと、その一文を読んだ。

彼女はしばらくそれを見た後、突然、力任せに机の書類をぶちまけた。

白い紙がはらはらと視界に舞い、そして床を真っ白にする。それを見届けた彼女は、静かに目を閉じた。

なのはを逮捕したときの様子は、今でも鮮明に思い出せる。向こうでの仲間に対し、心を開いた笑顔を見せていたこと。

『友だち』や『部下』と対峙したときのおびえた表情。

ヴィータの攻撃を、身を挺して防いだ瞬間。

かつての部下を人質に取ってまで護りたかったであろう、娘とあの世界。

そういえば艦内に連行した直後、人質にしていたティアナに何度も謝っていた。

完全に陰りがさした表情で、申し訳なさそうに頭を下げた彼女。

自分に対しても、フェイトに対しても、ただ『ごめんね』の四文字を繰り返していた。

「……………それはこっちの台詞やっちゅーに」

愚痴を言うように、呟く。

フェイトと違い、迷っている彼女に対して何も言ってやれなかった自分。

十年も一緒にいたはずなのに、十分に分かり合えていたはずなのに。
『彼女が人を殺した』の一報を聞いたとき、真っ先に思ったことは、

裏切られた。

今でも、当時の自分が馬鹿らしく思える。

正義感が強く、悲しいことを放っておけない優しさを持った彼女を知っていたはずなのに、見当違いな感情を抱いた自分がいた。

分かっていたはずだ、分かっていたはずなのに、ほんの一瞬でも憎悪を抱いてしまった。

「これじゃ、『友だち』失格やね」

自嘲気味に笑った時、アラムがそのうるさい音を隊舎中に響かせた。

ゆつくりと、目を開ける。

広がったのは、知らない空と、見たことのない構造の建物。
一瞬で悟った。

とうとう、来たんだ。

「覚えてるじゃろ!？」

「うん!まずエステルとパーティとジュデイスにレイヴンで、表で思いつきり暴れる!」

パーティの確認にカロルは勢いよく頷き、応える。

「その間、リタとボクとラピード、レイドとヴィヴィオとユーリで
ナノハと、ナノハの武器を探して取り戻す!」

一人一人と視線を合わせながら、カロルは組み分けを述べていく。

「無事にナノハを助け出した後、あの訓練スペースに集合して、脱
出、でしょ?」

ジュデイスの締めには、全員が肯定の表情をした。

「それじゃあ、作戦通りに散開するよん?」

ブレイヴエスベリア
凛々の明星が、四方に散る。

「グリフィス、何があつたんや!？」

「八神部隊長！」

司令室に入ってきたはやてに反応したのは、『グリフィス・ロラウ
ン』。

彼女の右腕のような存在になっている。

「敷地内に次元震を観測、同時に何者かが部隊に進入してきました
！」

「映像です！」

オペレーター『ルキノ・ルルイエ』の声に促され、はやてとグリフ
イスはモニターに目をやった。

三つに分かれた画面、特に中央に表示されているものに写っている
ものに、

『やーいやーい!!--!』

『こつちに来て御覧なさい?』

『お、おといきやがれ……です!』

『ほれほれ! ウツボみたく引きこもってないで、でてきたらどーじやあ!?!』

明らかに馬鹿にした様子の中年男性と、指をくいくいと動かすグラマラスな体系の若い女性、慣れない様子で挑発する少女と、慣れた様子で挑発する少女がいた。

不覚にも一瞬イラっとするはやてだったが、それもつかの間。すぐに冷静さを取り戻した。

「……フォアード陣をあの四人のところに向かわせて、出来れば投降の説得するように伝えて」

「了解!」

はやての指示に従い、グリフィス含めた官製担当のチーム『ロングアーチ』が動き出した。

「ヴィヴィオ、六課のルートは……」

「だいたいなら！ だけど変わってる部分もあるかもだから、対応できないところもあるかもしれない！」

「わかった、それじゃあ気をつけて！」

「リタさんも！」

エステル達と別れた一行は、ここで二つに分かれる。

予定通り、ヴィヴィオとレイドとユーリ、リタとカロールとラピードの二手に分かれて、六課内を突き進んでいく。

閑話休題。

途中に控えている武装局員を蹴散らしながら進んでいた、ヴィヴィオ、レイド、ユーリの三人は開けた場所に出た。

中庭と思われるその場所の中心に、見覚えの有る赤毛が揺れている。

「……副隊長」

思わず歩みを止めたヴィヴィオが、呟いた。

「……通すわけにはいかねえ、悪いことは言わないから、帰ってくれ」

鉄槌をヴィヴィオに向け、警告するヴィータ。

だがヴィヴィオは抜刀することで答えた。

「嫌です」

きっぱりと言い放ち、ヴィータに向き合う。
が、

「おいおい、目的忘れてねえか？」

そんなヴィヴィオの肩を叩きつつ、ユーリが前に進み出た。
明星式号の刀身を放ち、切っ先をヴィータに向けて、

「こいつは俺に任せな、早く先に行け」

「っ、そんなっ……」

ユーリに何かを言おうとしたヴィヴィオを、今度はレイドが止める。
どこか不満げに見上げてくる彼女をじっと見てから、小さく首を横
に振った。

「気をつける」

そしてユーリにそれだけ告げると、ヴィヴィオの手を引きその場を
走り去る。

「せ、師匠！」

中庭から出る際、ヴィヴィオが声を上げた。

「その人の一撃、気をつけてください！」

彼女なりの忠告に、ユーリは振り向かず手を振った。
その手を下ろしてから、ヴィータに問う。

「よかったのか？ 追いかけて」

「あたしはベルカの騎士だ、背後から狙うなんて汚え真似はしない」
「そうか」

合図をするわけでもなく、同時に構えて、同時に駆け出す。

「たゆたう闇の微笑！スプレッド・ゼロ！」

「轟々レボリューション！」

「ワン！」

一方、リタ、カロール、ラピード一行も、武装局員を蹴散らしつつ進んでいた。

殺すわけにも行かないので、もちろん峰打ちである。

瞬間、背後に気配を感じたカロールは、咄嗟に防御の体制をとった。予想通り、斧に衝撃が加わる。

カロールはそれを満身の力で弾き飛ばして、構えた。

「……筋はいいな、だがまだ若い」

視線の先に、凜とした雰囲気を漂わせて立っているシグナムは、剣を構え直して睨んで来る。

リタとラピードも思わず戦闘態勢をとるが、カロールがそれを制した。一人と一匹は難色を現したものの、小さくうなづいて先へと進んで

いく。

「わたしに一人で立ち向かうか……いい度胸だ」

闘気と刃が同時に研ぎ澄まされる感覚がする。

一瞬逃げ腰になるカロルだったが、強く強く斧を握り締めて、

「凛々の明星首領！カロル・カペル！」

シグナムも、名乗り返す。

「ヴォルケンリッター守護騎士、剣の騎士シグナム……参る！」

「聖なる槍よ、敵を貫け！ホーリーランス！」

「風よ吹け！さつと動いてそつと消えろ、ウィンドカッター！」

「I am伝説のギャンブラー！いくぞおー！カードザギャンブル！」

「翔舞槍月閃！」

「ブレイヴエスベリア凛々の明星一派は、術と技を繰り出し、

「メッサーアングリフ！」

「リボルバーシュート！」

「ヴァリアブルシュート！」

「フリード！ブラストレイ！」

機動六課フォード陣は、魔法でそれに応戦する。しばらく均衡を保っていた撃ち合いだが、両者ともに突然それを中断。

今度は接近戦を始めた。

「それぞれそれぞれ！どうじゃあ！！！」

「まだまだあ！おりやあああつ！」

スバルとパティは、前回と打って変わって白熱した攻防を見せていた。

短剣と箆手がぶつかり合い、銃身と具足が火花を散らす。

途中途中に技も割り込ませていたが、大半が純粹な武術だった。

二人とも不謹慎だと思いつつも、かなりノリノリで相手の攻撃を見切り、かわし、捌いていく。

どちらとも笑っていたが、スバルは相手が上であると実感した上で苦笑いで、パティは余裕の笑顔だった。

「いつも心はピンク色、くらえ恋心！アリーヴェデルチ！」

「シューティング・レイ！」

レイヴンの発した技をキャロに乗せたフリードが回避。

キャロは回避が完了したことを確認すると、すかさず簡易型のシューターを発射。

桃色の光がレイヴンに降り注ぐ。

だが彼は特に驚く様子もなく、なれたステップで回避した。

にやり、と笑ったレイヴンを見て、キャロは表情を引き締める。

「スータルメッサー！」

「月光！」

ギンッと、槍同士が耳障りな音を発した。束の間のつばぜり合いの後、即座にジユデイスは横に大きく薙ぎ払う。

エリオは槍を縦にして防ぐと、高速移動魔法を使い背後に回りこむ。勝負あったかと思われたが、彼女はしゃがむことで回避。

目を細め、薄ら笑いを浮かべるジユデイスとは対照的に、エリオは眉間にしわを寄せた。

「スターストローク！」

「シユートバレット！」

遠距離からの撃ち合いの後、接近戦を始める。

エステルは三年前の旅の中で培ってきた剣術で、ティアナはなのはに鍛えられた我流の短剣術で。

ぶつかる度に接触した箇所が火花を散らして、夜闇を照らす。

二人のまなざしは真剣そのもので、何者も邪魔できない雰囲気醸し出していた。

ヴィヴィオとレイドはただ走る。
前方に武装局員。

「蒼破っ！」

「天魔刃！」

二人は慌てることなく、床を蹴り壁を足場にして、気絶させたり戦闘を避けたりしていた。

そうしている内に、再び開けた場所に出る。

道を確認するために、一旦立ち止まって辺りを見回していた時だ。ヴィヴィオは、後ろに何者かの気配を察知した。

レイドもそれに気づいたらしく、ほぼ反射的かつ同時に振り向いた。佇んでいたのは、黒く短い髪を持った男性。

体格もよく、両手には小太刀が握られていた。

レイドは突然現れたそいつに警戒するが、ヴィヴィオは違った。驚いた様子で半分構えを解き、男性に声をかける。

「おじ……………さん」

危うく、『おじいちゃん』と言いかけたのを飲み込んだ。

今改めて見ると、祖父と呼ぶには聊か若すぎる外見をしている。

「……………知っているのか？」

聞いてきたレイドに、ヴィヴィオは重々しく唇を動かして答えた。

「……………高町士郎、さん……………お母さんの、お父さん」

言い終わった途端、男性　　士郎が走りだす。

戸惑いながらも臨戦態勢をとったヴィヴィオの横を通り抜けると

「・・・・・・・・っ！」

レイドを斬り付けた。

十四番星（後書き）

お返事待たせてしまつてすみません！
リリカルGVいきまーす！

マーボー様

主人公の劉くんも初めまして！感想ありがとうございます。
スバルのシーンを上手くかけていたようで、安心しました；
文才なんてわたしには最初っからありませんよ！
ぶっちゃけた話、わたしが書いてる小説は全て（ここ重要）5%
のアイデアと95%の暇でしか出来てません！！
次回も見てくださいと嬉しいです！

金色の戦姫様

正直な話、戦いの組み合わせは声ネタが混じつてたりします。
H A H A H A！すみません、うちのなのはさんは魔王分皆無に等しいです。

なのはさんだつて乙女なんだよ！良妻賢母でもいいじゃない！って
考えなので；

ただ魔法で瞬殺は出来そうですね！
素手で剣を受け止めるなんて危ないですよ！非殺傷設定じゃないから、下手したら指スパーンですよ！？

次回、何故士郎さんがここに？そしてもう一人の味方も……？
それではノシ

十五番星（前書き）

さて、今回もバトル！

十五番星

暗い

見えるのは自分だけ。

冷たい

身を刺すような寒さって、このことをいうのかな？

怖い

気がつくと手が真っ赤。

さみしい

人が、いない。

映像が変わる。

何日か前に、お父さん達が来たときのものだった。

お母さんは大変だったねって言うだけで、事件については何も触れないでくれた。

娘が人殺しなのに、何もしてあげられなくてごめんねって言われた。すぐく申し訳ない気持ちになって、泣きそうになったけど、そうもいかなかった。

お父さんがわたしをじっと見て言う。

「お前は自分が何をしたのかを理解して、償え」

いつも以上に厳しい表情だったのを、よく覚えていた。

「お母さん！」

聞き覚えのある声に、なのはは目を開けた。

ぼんやりとした世界の中心に覚えのあるハニーブロンドがある。

「ヴィヴィ・・・・・・・・オ？」

最近余り声を発していなかった所為か、若干かすれてしまった。
直後、抱きつかれる。

かなり驚いてしまったものの、ハニーブロードが娘であるとはつきり理解していたなのは、優しく抱き返した。

ふと、疑問が出てくる。

解決の為に視線を動かすと、無残に破壊されている鉄格子が見えた。
なのはは困ったように苦笑いをして、

「よっぽど慌ててたんだね、ヴィヴィオ」

「だって・・・・・・・・だってえ・・・・・・・・！」

姿は成長しても、やはり中身は十にも満たない女の子だ。

離れようとしてもしないまま、ただ母親の胸で泣くじゅくっているヴィヴィオを、ただ優しく撫でる。

しばらくそのままだったが、はっとヴィヴィオは声をあげた。

「いけない、忘れるとこだった・・・・・・・・！お母さん、わたし達来たよ！迎えに来たんだよ！」

まだ涙の残る顔で、ヴィヴィオはやや緊迫した表情をする。
なのははまた困ったように苦笑いして、

「そつか・・・・・・・・うん、とりあえず出ようか？」

「うん！」

ヴィヴィオに手を取られ、歩き出した直後だった。
ふらっと、体が傾く。

「わっ、お、お母さん？」

しっかりと握った手は離さないまま、力なく座り込んだのはを案じてしゃがむヴィヴィオ。
偶然、手のひらが額にあたった。

「っお母さん、凄い熱！」

気付けば呼吸も辛そうだ。

気付けなかった自分を責めながらも、咄嗟に魔方陣を展開させた。

「卑しき闇よ退け、リカバー！」

光がなのはに入り込んだ。

と同時に、なのはは呼吸だ幾分か楽になったのを感じる。

「ごめん、こんなのが出来ないけど……！」

「……ありがとう……いこう？」

ヴィヴィオは、黙って頷いた。

「デバイスルーム……ここね」
「ワンツ」

その頃、リタとラピードは目的地にたどり着いていた。

手に持っていた地図で場所を確認し終わると、それを閉まって、帯を取り出す。

そして、大きく振り払った。

「邪魔するわよ!？」

誰もいないだろうと思いつつも、気分でそう告げて入る。
すると、

「邪魔するんなら帰ってください」
「……はい？」

誰もいないと思っていた室内から、返事が聞こえた。

見ると、メガネをかけた長い髪の女性がイスに腰掛けている。

その手には、なのはの小太刀とデバイスが握られていた。

女性は笑いながら『冗談ですよ』と言うと立ち上がり、リタに向き合ってそれらを手渡す。

呆然としているリタに一礼してから、

「フェイトさんの補佐をやっています、シャリオ・フィニーノ執務官補佐です」

「フェイトって……あ、あんた」

リタは珍しく驚いた表情をしていた。

シャリオはだまって頷いて、

「なのはさんのこと、お願いします」

沈黙する二人と一匹、だがその顔に驚きや戸惑いはなく。

一方はただ黙って肯定の意を示して、一匹と共に去っていった。

役目を終えたシャリオは、イスに座り込みふうつとため息をついた。

「見た目、わたしとそんなに変わらない感じの子だったな……」

・機械に強そうだったし、話してみたいな」

「っだあ！」

「はっ！」

カロルの斧と、シグナムのレヴァンティンが火花を散らした。

戦いに夢中になっていたらしく、室内だったはずの戦場が、いつの間にか外に出ている。

だが二人にとってそれは問題ではない。

（この人、下手したらデュークやアレクセイより強い！）
（やるなこの少年……わたしが押されるとは）

二人同時に思考して、二人同時にふっと笑う。

そしてすぐに表情を引き締めると、再び相手に斬りかかった。

カロルの重い一撃が、シグナムの脳天に向けて振り下ろされる。

シグナムはレヴァンティンでいなしながら避けた。

そしてすぐにカートリッジをロード、炎を纏って突撃した。

受け止めるも、衝撃で壁にぶつかるカロル。

それを見逃す彼女ではなかった。

更にカートリッジを装填、刀身から凄まじい炎が吹き出す。

「紫電………！！」

カロルはそれを本能的にまずいと判断し、おもむろに斧を振り上げる。

「一閃！！」

シグナムの炎がカロルに襲い掛かる。

だが彼は慌てる様子も無く、腕を振り下ろす。

「活心エイドスタンプ！」

「なっ………！！」

斧が剣を叩き付け、同時に魔方阵が現れる。

そこから翡翠色のスフィアがはじけ飛び、カロルの傷を癒した。

シグナムは、剣を封じられたことに不覚にも驚いてしまう。

それを見逃さないカロルではなかった。

「僕だつて!!」

青白いオーラを解放し、シグナムを打ち飛ばす。

シグナムは一瞬怯んだものの、すぐに体制を立て直した。
だが、目の前にはカロルの姿が……。

「巻き起これえ! 超牙旋滅タイフーン!」

体ごと斧を振り回し、突風と斬撃を見舞う。

それでもシグナムは、攻撃の嵐の真っ只中だというのにそれらを捌いていた。

しかし、確実にダメージは与えられていた。

やがて風と斬撃が止み、距離を取る。

カロルは全身に切り傷やかすり傷を負っており、若干髪が乱れているシグナムもまた同様だった。

「……………そっちは、ナノハの友達なんだよね?」

「……………ああ、そうだ」

徐にそう問うたカロルに、シグナムは返答する。

カロルは少し寂しそうな顔をして、

「じゃあなんで? どうしてナノハの味方をしてあげないのさ!？」

「……………っ」

思わず、構えを解く両者。

シグナムは顔をしかめてから、

「……………我々は法のもとで動いている、その我々が法を犯す

わけには………」

「ナノハだつてその法のもとで動いてたじゃないか！」

カロルの悲痛な叫びは続く。

「ナノハ、何度もうなされてたよ！何度もごめんなさいって謝って、苦しそうに息して、起きたら起きたでまるで罰受けるみたいに生活してて！」

目から涙がこぼれる。

その姿は年相応の子供のもの。

先ほどまで激戦を繰り広げていた少年と同一と思えないそれに、シグナムは戸惑っていた。

「人殺しは確かに許されない！けどそうでもしなきゃ止められない、助けられない人は大勢いるんだ！」

その目は、立派な首領のそれだつた。^{ボス}

「ラケーテン・ハンマー！」

「蒼破追蓮っ！」

ドンっと、衝撃波。

「っぐ！」

「ちいつ！」

互いに弾き飛ばされ一旦退きはしたものの、再びエモノを握って走り出す。

鉄槌と刃が、耳に残りそうな音を立てていた。

ユーリが鏑迫り合いを切り上げ、サマーソルトを放つ。

ヴィータはそれを受けきると、着地直後のユーリにグラーフアイゼンを振るった。

必死になってそれを避けたユーリは剣を曲芸のように振り回してから、続けざまにくるヴィータの猛攻を受け流していた。

体を大きく仰け反らせてから、大きく蹴り上げた。

ヴィータは受身を取って着地すると、ユーリから距離を置いた。

ユーリは再び剣を振り回してから、肩に乗せた。

「お前……………なんでなのはに構うんだ？」

「あ？」

戦闘中だったためか、どこか不良っぽく反応してしまう。

ヴィータは一瞬むっとしてしまったが、気にしないことにして続ける。

「……………なのはは、あたし達の希望だった、戦い以外何も出来なかったあたし達に、居場所を与えてくれて……………」

グラーファイゼンを握り締めるヴィータ。
ユーリはそれを黙って見つめる。

「だから、あいつが人殺しをしたときは、裏切られたと思った、今でもそう思ってる」

ギリギリと、手に力が入っていた。

その様子をみたユーリは呆れたと言わんばかりにため息をつく。
ヴィータは再びむっとした。

「だったら俺もみんなに嫌われてるな」
「・・・・・・・・・・？」

困ったようににやつと笑うユーリを見て、ヴィータははてなを浮かべる。

「俺だって殺してるぜ？ 外道な執政官様や騎士様をな」
「・・・・・・・・・・っ」

「そんな俺を、エステルやみんなが受け入れてくれた、仲間だって笑ってくれてさ」

そこで区切り、剣先をヴィータに向けた。

「だから、今度は俺があいつを受け入れる番だ」

不適に笑ったその顔は、仲間を思っているものだった。

壁は所々大破し、床も広範囲にわたって抉れている。
両者ともに室内だからと言って、遠慮する様子は見られなかった。

「魔神大地顎！」
「・・・・・・・・つ」

レイドの剣が床にめり込み、士郎は後ろに下がりつつ飛んできた瓦礫を斬り捌いていた。

続けて小太刀を振り上げ、剣ごとレイドを突き飛ばす。

対する彼は宙で体制を建て直し、壁を蹴って上から一撃。

士郎の小太刀に重量が加わり、若干後ずさる。

鏑迫り合い、が、すぐに切り上げて両者ともに距離をとった。

すると士郎が少しだけ構えを解く。

「・・・・・・・・君は、今回のことをどう思っている？」
「・・・・・・・・？」

レイドも同じくらい構えを解いてから、『何を言い出すのか？』という表情をした。

ほんの少しだけ、士郎がため息をついて、

「どんな理由であれ、なのはが人を殺したのは事実だ、そうやって

出来た罪は償わなければならない」

はつきり語る彼の目から、嘘は見受けられなかった。
レイドの視線を受けながら、続ける。

「あの子は罪人だ、逃げることなど許されない」

言いたいことは言い終えたらしい、再び構えてレイドに斬りかかった。

大剣が防げる範囲を超え、刃が喉元を狙う。
咄嗟に、腰から抜いた。

「・・・・・・・・つ!？」

布に巻かれたそれで防ぎ、間髪いれず顎に蹴りを入れる。
思わずよろけた士郎は、再び距離を取った。

「・・・・・・・・あなたは親だろうが・・・・・・・・!」

今度はレイドが士郎に接近し、剣の柄で力任せに腹を殴る。

(そうだ・・・・・・・・アレクセイなんかとは違う・・・・・・・・ナノハにあんな思いをさせるわけには・・・・・・・・まだ間に合うはず・・・・・・・・だからこそ!)

体制を立て直した士郎が、レイドに再び切りかかった。
レイドは俗に言う『二刀流』で応戦する。

「親であるあんたが味方でなくてどうするんだよ!」

双剣を交差させるように一閃。
士郎を怯ませ、後退する。

「片付けるっ！」

体を一瞬縮めて、吠えるように上を向いた。
青白い闘気を纏い、剣を振る。

「舞い飛べ双剣っ！」

剣が独りでに飛ぶと同時に、一方の布がはじけ飛び、デインノモス宙の戒典が姿を現した。

「はっ・・・・・・・・だっ・・・・・・・・！」

レイドは腕を振り、剣を操る。

剣は意志をもっているように飛び回り、士郎を攻め立てていく。

士郎はめいいっぱい体をねじり、腕を振り、捌いていた。

レイドは振っていた腕を振り下ろした。

二点に刺さる剣。

そこから滑るように光の筋が延びて、陣を形成していく。

中心にいるのは、士郎。

何が起るのかを一瞬でさとした彼は、なのはも使う奥義『神速』を駆使して、離脱しようとする。

だが、解き既に遅し。

「双覇っ嵐星塵っ！！」

「・・・・・・・・っ！！」

陣が発光し、光が立ち上る。

それに弾き飛ばされ、士郎は床に体を叩きつけた。

レイドはため息を一つついたあと、次のアクションを取ろうとした時だ。

外で、一筋の光が空を照らした。

そこでレイドは、ここに来る前の作戦会議を思い出す。

無事ナノハとその武器を取り戻せたら、空に向かって術で合図すること、そして即撤退よ？

ちらつと、士郎を見る。

ダメージが大きいらしく、動こうにも動けない状態のようだ。

・・・・・・このまま去っていくのもなんだったので、ライフボトルを置いていくことにした。

機動六課、訓練スペース。

ヴィヴィオは術で雷撃を空に打ち、合図をおくる。
と同時に、リタとラピードが駆けて来た。

「リタさん！」

「こっちも回収完了！後はみんなの到着を待つだけ！」

そう、リタはぐつと親指をつき立てる。

次になのはに近寄り、その顔を覗き込んだ。
そしてみるみるその目が見開かれていく。

「ちょ、ナノハ熱あるんじゃない……！」

「そうなの！早く戻って休ませないと！」

ヴィヴィオもかなり焦っているようだ。

とりあえずなのはをしゃがませ、みんなを待つことにする。
その時、

ふっと、風が吹いた。

ヴィヴィオは咄嗟に刀を後ろに回す。

ガキンっと、手ごたえがあった。

自分を心配するリタとラピードの声を他所に、刀を力づくで振り払う。

真っ黒な服を着た、金色の死神。

フェイトが、そこにいた。

彼女は黙ったまま、再び斬りかかってくる。

ヴィヴィオはまた刀で鎌を弾いた。

手に痺れが来る。

（やっぱり、フェイトママ速い！今のだってほとんど勘で受けたんだもん）

居合いの構えを取り、フェイトを見据えた。

（……………こんなことで、フェイトママと戦うなんて……………）

やりきれない気持ちを覚えつつ、戦闘準備をする。

十五番星（後書き）

まいたけ総権っ！！

・・・・・・いえ、何も。

4/16：腹搔っ捌いてお詫びしたい気分です！！（
感想がちゃんと来てたのに見逃すとはなんたる不覚っ！
とりあえずお返事いきます！！

マーボー様

お返事お待たせしてすみません；

士郎さんはたまたま面会に来ていました。

手に汗握る展開をかけているとうれしゅうございます！！
それではっ！

十六番星（前書き）

お待たせしました。

5/26：自分で読み返して、なんか変だなっと思ったのでちょこちょこ書き直し……。ちゃんと編集しろって話ですよ、すみませんorz

十六番星

「クロスファイヤー！シュートッ！」

「星よりも清かに、エクストリームスターズ！」

ティアナが撃った無数の魔力弾に対し、エステルはバーストアーツを発動。

向かってくるそれに勝る突きを繰り出す。

「降れ降れ星屑！グリッターズレイン！」

「っディバイイイイ ンッバスタアア ツ！！」

パーティが降らせた星屑を回避し、スバルはカートリッジを装填。右腕に魔力を溜め、撃ち出した。

「飛散！数撃ちや当たる！」

「ブラストレイツ！」

「ギユオオオオオオオッ！！！」

レイヴンが放った矢の乱撃を、フリードが回避。口に炎を溜め込み、吐き出した。

「切り刻め、風の如く！風塵！封縛殺！」

「サンダアア ツレイジイイ ツ！」

風と稲妻が混じり、反発し、仕舞いには大きな音を立てて両者を弾き飛ばす。

ジュデイスもエリオも、疲れは見ていたが、まだ戦えそうだった。

「っどうして……！！」

戦火の中、エステルがティアナの攻撃を盾で防ぐ。

ティアナはダガーを叩き付け、防御を破ろうとしていた。

そしてエステルの口から出た言葉に、ティアナは耳を傾ける。

「どうしてナノハを支えてあげなかったんですか？」

「……………」

「っ答えてください！」

ピアズクラスター！

「……………」

鋭い突きの連続、直後に盾での一撃、ティアナは咄嗟に受身を取り、着地。

エステルは構えを解き、やりきれないような顔でティアナを見つめる。

「どうして、ナノハのこと、庇ってあげられなかったんですか？」

「……………あくまでわたし達は管理局員、法を守らなければいけません」

「法の守り手なら仲間を裏切っていいんですか！？」

「っそういうことは言っていない！」

両手にダガー、それぞれ順手と逆手に持ち、突っ走る。

「本当は、裁判相手をぶん殴りたかったわよ！！この外道って思い切り罵りたかったわよ！！けどねぇ！？もう何もかも遅いの！！」

時折弾丸を撃ちながら、ティアナは自棄を起こした。
エステルの剣と激しくこすれあって、互いの刃が欠ける。

「あの人を神聖視した時点で！この結果は決まっていたのよ！！いまさら間に合うわけないでしょ！！？」

「まだ間に合うよ！！」

「っ！？」

響いた第三者の声。

ティアナが思わず振り向くと、巨大な武器を構えた少年が見えた。

「絆っていうのは、簡単に切れないものだ！今からでもまだ間に合うよ！！」

「世の中みんなそんなだったら、どんなによかったか！！」

「っあ、カロール！！」

完全に激情しているティアナは、エステルを盾ごと蹴り飛ばし、カロールに突撃。

懐に入り込み、ダガーを振り上げる。

カロールは仰け反って避けると、ダガーを受け止め、弾き飛ばした。

「そうだよ！でも、絆を信じたっていいじゃない！仲間なら、なおさらだよ！」

そう叫んだカロールの体は、青白い闘気が湧き出ていた。

「全身全霊で叩く！！」

ティアナの腹に打ち込み怯ませると、自身は高く飛び上がり、バツグから武器を四つ取り出した。

「1！2！3！豪霸連刃インパクト！！」

轟音と衝撃が、六課全体をゆらす。

不安そうに見つめるなのは視線を他所に、二人は戦っていた。

「ハーケンセイバー！」

「蒼破刃！」

色の違う衝撃波がぶつかり合って爆ぜる。

息つく間もなく、鎌と刀が火花を散らした。

一瞬の鏢迫り合い、直後に金属音。

蜻蛉返りを繰り出したヴィヴィオは、フェイトを見逃さないように顔を背けない。

フェイトは鎌を握りなおし、大きく薙ぐように振る。

ヴィヴィオはバックステップで避けるものの、袖を少し掠める。

「魔王炎撃波っ！」

発火した刀身がフェイトに迫るが、彼女はシールドを展開。

余波の熱に顔を歪めたが、無傷で済んだ。

ヴィヴィオは苦虫を噛み潰した表情を見せ、直後に刀を逆手に持つ。足に魔力を込め、地面を滑るように移動、すれ違いざまに斬りつける。

肩のバリアジャケットが裂け、薄っすら赤いラインが刻まれた。

「・・・・・・・・・・っ」

「っ!？」

フェイトが何か呟いた途端、突然プラズマを走らせて消える。瞬間、ヴィヴィオは全身に冷や汗をかいているのを自覚した。恐れていた、フェイトの『ソニックムーヴ』。音速に近い動きになるそれは、師匠や母ならともかく、修行を始めて数ヶ月の自分に避けられるわけが無い。

「ふっ!」

「っわぁ!？」

背後から、衝撃。

派手に地面を転がっていったものの、すぐに再起した。

間髪入れず、フェイトが急接近、力任せの縦一閃を繰り出す。

ヴィヴィオは咄嗟に刀を傾けて防御、再び鏑迫り合いが始まった。

ギリギリと耳に残りそうな音を立てて、互いの武器を押し合う。

「・・・・・・・・・・お願いフェイトママ、もう邪魔しないで・・・・・・・・・・」

苦し紛れに、ヴィヴィオはそう口を開く。

フェイトは黙ったまま、何も答えない。

「何で・・・・・・・・何でお母さんが責められなきゃいけないの？」

なお黙るフェイト、それでもヴィヴィオは続ける。

「お母さんは・・・・・・・・確かに人を殺したよ・・・・・・・・でも、それはわたしの、所為、だから・・・・・・・・！」

若干俯くヴィヴィオ、呼応するように腕の力も少し弱まる。
しかし、直後にフェイトを押し返し始めた。

「わたしの所為で悩んで、わたしの所為で裏切られて、わたしの所為で苦しんで・・・・・・・・全部、わたしの所為なんだ！」

ついに、フェイトをはじき返した。

「もう弱いのは嫌！！守られてばかりは嫌！！だから！！」

ごうつと、闘気を開放。

青白いそれを纏って、フェイトに急接近する。

「絶対負けない！守るんだ！相手が・・・・・・・・あなたでも！！」

夜闇に刃が翻り、ギラッと光り。

フェイトはそれが只事ではないと悟った。

「来ませ！運命の友！！」

「え、うええっ！？」

青白い光を纏ったパーティがそう唱えると、上空からルーレットが降ってきた。

慌てたスバルは飛びのいてその場を離脱する。

パーティはスバルの位置を確認しつつ、ルーレットに飛び乗った。

「何が出るかのう？」

回転する盤上でスキップをして、

「あうっ」

転ぶことにより、項目を導き出す。

パーティが転んだ目には、青い碇のマークが刻まれていた。

ルーレットが輝き、入れ替わるようにして魔方阵が現れる。

そこから召還されてきたのは、いかにも海賊という風貌の、それでいてどこか紳士的な雰囲気漂わす男性。

手には碇のような大剣、腰には一丁の銃を携えていた。

突然現れた人物を警戒し、近づこうとしない。

ゆっくりと目を開けた男に、パーティは嬉しそうに笑いかける。

「サイファー！」

サイファー、そう呼ばれた男は不適に笑って、

「ボスの呼び声に答え、ここに参上！」

一瞬。

それがスバルの元にたどり着くまでの時間だった。

突然のことに、思わず防御の姿勢を取るスバル。

それは意図的なものではなく、本能的なものだった。

「いざ、参る！」

当然、そんなもので防げるわけがない。

荒れ狂う怒涛の連撃が、スバルを襲った。

「おっさんいつちゃうよ？」

レイヴンも同じく青白い光を纏い、変形させた弓と短剣を構える。

キャロは危険と判断し、騎竜フリードリヒを普段のかわいらしい姿に戻すと、防御結界を張った。

「華麗につ！」

宙を回転し、文字通り飛び掛ってきたレイヴン。

交差するように振り下ろされた刃と結界がぶつかり、火花を散らす。思った以上の鋭い攻撃に驚いたキャロ。

「ターゲットオン！」

レイヴンは再び夜空に舞い、魔方陣を展開し、自身は逆立ちの姿勢で弓を構えた。

ワンテンポ遅れて、結界が破壊される。

「クライシスツ………」

驚愕と絶望の表情を浮かべたキャラに、内心で謝罪し、

「レインっ!!」

数多の矢を放つ。

「月光!」

「っぐああ!」

ジユデイスの一撃を受けて、怯むエリオ。

もちろん彼女はその隙を逃さない。

ついさつき合図があがったのだ、早急に撤退すべきと判断した。

さきほどカロルが相手の一人を倒してくれたので、向こうの陣形に穴が見え始めた。

おそらく彼女が現場での司令塔だったのだろう。

他のメンバーも応戦しつつ撤退を始めたので、自分もそろそろ………と考えた。

念のため、目の前の少年を気絶させることにした。

「行くわよ?」

青白い闘気を纏い、槍を振りかぶる。

「我に仇なすものを………冥府へと送りし、朧月の棺!!」

連続で斬りつけ、打ち上げる。

「霸王っ!!」

宙に打ち上げられたエリオは、とっさに防御の姿勢を取った。

「朧月槍おーっ！！」

投降された鋭い一撃が、エリオを襲う。

槍が、接触。

エリオは必死にそれを受け止めて、全身に力を込めた。
ジューデイスは、受け止められたことに驚愕したものの、行く末を見守る。

「っだあああああああ！！」
「・・・・・・・・っ！？」

ついにエリオは、満身の力で槍を弾き飛ばした。
だが、飛んでいった方向を見て、その顔が一気に青ざめる。

「腹、括って！」

その時リタは、月に照らされて翻る、踊り子を見た気がした。
これはヴィヴィオの戦い、だから手を出すのは本当に危なくなっただけ。

そう決めて、弱ったのはを守るために、ラピード共々、流れ弾の

処理に勤しんでいた。

そして目の前で始まったそれに、目を奪われる。

ヴィヴィオは大きく振りかぶって、刀を振る。

大降りで豪快な連続攻撃、避けられそうに見えるが、確実にフェイトに当たっている。

蹴りが加えられているものの、その動きに、リタは見覚えがあった。故に確信して、思わず笑顔を浮かべる。

「てんおうめつが天王滅牙あーっ!!」

仕上げに大きく斬り上げて、着地。

肩で大きく呼吸をしているものの、フェイトから目を離さない。

一方のフェイトは、最後の攻撃が効いたらしい、足元がいくらかおぼつかない様だった。

ヴィヴィオは腰が抜けたのか、力なくへたりこむ。

相手は倒れていない、だが、ヴィヴィオの勝ち。

リタは笑顔を満面に広げた。

そんな風に、客観的に見ていたからこそ、気付いたのかもしれない。フェイトの背後から、槍が接近してきていた。

「.....っ!!後ろ!!」

明らかに直線コース、しかも嫌な予感しかしない。

リタの声に気付いたのか、振り返ろうとするフェイトだが、足元がふらついて倒れる。

「あー、もう!!」

苛立たしげに叫んで、フェイトの元に走り出す。
直後に考えなしで動いたことを後悔したものの、すぐに打ち切って

走り出す。

いざとなったら打ち落とせばいいと、半ば物騒な思考をめぐらせながら、フェイトを庇おうと速度を上げた。

先ほどまで敵だったが、それは思いをゆずれなかった故。

何の罪もない人が死ぬかもしれないと来たら、話は別である。

しかし、槍の方が遙かに速い。

リタは、内心で舌打ちをし、魔術で打ち落とそうと詠唱を始める。

その時、リタの隣を、風が駆け抜けた。

ドスッ

全員の視界に、亜麻色が翻る。

十六番星（後書き）

やっとこさヴィヴィオのバーストアーツが出せました。

．．．．．名前もアクションも、ユーリの天狼滅牙をアレンジしただけのものですけどね！！

さて、リリカルGVいきまーす。

V e r i t a s 様

始めはレイドと土郎のやりとりだけのはずだったんですけど、気がついたらカロールとユーリも混ざってました（）

はい、一応彼女がラスボスですよww

p . s . 個人的に『レイド版まいたけ』を書いて大満足ですwww

さて、次回ついに．．．．．！！
それでは。

深夜（前書き）

ついに、完結！！

深夜

「・・・・・・・・・・っ!」

司令室。

モニターの向こうで起こった出来事に、はやては思わず立ち上がる。

ぱた、ぽた、ぽた。

フェイトの頬に、生暖かく、鉄の臭いがする液体が落ちた。

覚悟を決めて目を瞑っていた彼女は、自身が負傷したんだと思考し、ぐっと下唇を噛む。

噛んだところで、気付いた。

刺さったにしては、痛みがない。

いや、痛みが過ぎてむしろ感覚がなくなるといふこともあるだろうが、それにしても痛みがなさ過ぎる。

そもそも、自分に刺さったのなら、なぜ液体が『落ちてきた』？
勢いよく、くわっと。

目を見開いて、

「・・・・・・・・・・っ!..!」

絶句した。

目の前のなのは、ふっと微笑みかける。

「あ、フェイトちゃん？大丈夫？血、かかっちゃったね、きれいな顔が台無しだ」

震える手で、顔を拭ってくれたのはに対し、フェイトは同じく震えながら頷くしかできない。

「そっか、よかつ・・・・・・・・・・」

口の両端から、

「・・・・・・・・・・ごほっ」

血を吹き出して、

「・・・・・・・・・・っ」

もたれかかるように、

「や、だ．．．．．っ嫌あ！！お母さん！！」

訓練スペース全体に、ヴィヴィオの絶叫が響いた。

「．．．．．あ．．．おの．．．あ？」

フェイトは完全に震えてしまい、声がまともに出てこない。

体にかかる、生暖かいものの感触と、なのはに突き立てられている『ソレ』を見て、冷静さが失われた。

「なのは．．．．．なのは．．．．．？」

返事は無い。

ただ自分の手で、苦しそうに呼吸をするだけ。

喉の中に血がたまっているのか、首元に近い方の耳から、ゴボゴボと音が聞こえる。

「っなのはあ！！」

「お母さん！！お母さん！！」

腕に横抱きで抱いて、ヴィヴィオと一緒に名前を呼んだ。

「何で！？どうして！？っしっかりして！！」

「やだ、そんな、なんでえ．．．．．！」

何度も揺さぶり、二人一緒に槍に手をやって、とめられた。

「っ！」

「二人とも落ち着いて！むやみに引っ張ったら、大量出血で即あの世行きよ！！」

リタは半ば怒鳴りつけながら手を引っ込めさせ、槍がこれ以上動かないようになのはの体を横にして、傷の具合を見た。
槍はなのはを貫通しており、傷口からは血が染み出してきている。
誰が見ても、重傷と判断できた。

「なんでえ……………おかあ、さ……………」

身体強化が解け、本来の7歳児の姿に戻ったヴィヴィオは泣きじゃくり、リタはそれをしっかり抱きしめる。

「この馬鹿、なにしてんのよ……………」

大声で泣き始めたヴィヴィオをラピードに任せて、なのはに声をかけた。

なのはは自嘲気味に笑って、

「ごめ……………気がつ……………た……………あら……………飛び出して……………」

ごぼつと、咳き込みながら、血を吐き出した。

「っ分かったから！もうしゃべっちゃだめ！！」

ヴィヴィオを抱いたまま背中をさすり、どうするべきかを考え出す。
といっても、これだけの怪我、エステルにまかせるほか無かった。
ちようどそこへ、戦闘を終えたメンバーが走ってくる。

「っナノハ！？」

「そんな……………」

「おい、しっかりしろ!!」

全員がなのはに駆け寄り、大声でなのはを呼ぶ。

「大丈夫じゃ！まだ沈没せんぞお！」

「若いもんが死ぬとこ見たくないわよお!？」

「頼むから！死ぬな！」

その後方で、ブレイヴエスベリア 凛々の明星を追ってきた六課のフォアードメンバーもやってきた。

彼らも一瞬で事態に気付き、なのはの元にやってくる。

「なのはさん？なのはさん!!」

「しっかりしてください!!」

「そんな、死なないで!!」

「やだ、なのはさん!!」

「何やってんだ！なのは!!」

「まだ助かるぞ!!」

ギルドのメンバーに混ざって、なのはを励ます。

「み、ん、な」

自分を取り囲み、懸命に声をかけてくれる。

人殺しで、弱くて、誰にも相談しない頑固者で。

それなのに、こんなに心配してくれる『みんな』がいて、

「ごめんなさい、ごめんなさい！僕が……… 槍を弾き飛ばしちやったからっ………!!」

「わたしにも責任はあるわ、その槍はわたしのだもの」

とりわけ必死に謝ってきたのは、エリオとジュデイスの二人。
なのは弱々しく、二人に笑いかけた。
もう一度、血の混ざった咳をして、

「……………あたし」

「しゃべらないでください！」

何かをしゃべろうとするが、エステルに止められてしまう。
エステルは治癒術を発動しようとして、槍が邪魔だということに気付いた。

「誰か手伝ってください！槍が抜けないことには、かけられる術もかけられません！」

「ならわたしが」

「僕も、やります！」

エリオとジュデイスが名乗りを上げて、槍を握った。
触れた際の振動が伝わり、なのはの体が痛みで跳ね上がる。

「ごめんなさい、ナノハ！もう少しの我慢です！！」

必死にそう言ったエステルは、魔方陣を展開し詠唱を始めた。

「タイミングはわたしに合わせてくれれば良いから、落ち着いて」
「分かりました！」

エリオとジュデイスの手に、力がこもり、ゆっくり動かし始めた。

「聖なる恩恵を！キュア！！」

「今！」

「はい！」

深く刺さっていた槍も、二人分の力が加われば抜け落ちる。

そこにすかさずエステルが治癒術を打ち込んだ。

一瞬の静寂、やがて波のさざめきと、なのはの苦しそうな息が聞こえてくる。

どっと、敵味方関係なく安堵のため息をついた。

「……………よかった！」

「成功だ！」

このときばかりは、ギルドも六課も手をとって喜んでいた。

がらにもなくはしゃぐティアナとリタ、エステルもそれに混じっている。

ふうっと息を吐いたエリオに、ジュディスとキャロは労いの言葉をかけ、パティとスバルとカロルはハイタッチ。

レイドとユーリはほっとため息をつき、レイヴンとシグナムとヴィータは互いに笑いあう。

感極まったフェイトは、泣きながらなのはを抱きしめていた。

「……………わたしはね」

弱々しい呼吸の下で、ぽつりと、なのはが語り出す。

「弱いくせに……………誰にも相談しない頑固者で……………
…あの時も、一人であの街にいったの」

「けど」と自嘲的に笑って、目を閉じる。

「同時に甘ちゃんでもあるからさ……だからあの子にあつてすぐに、あんな早まったこと考えちゃったんだ」
「っそんなことない!!」

フェイトはなのはと向き合い、それを否定する。

「なのはは追い詰められていただけだよ！それに、言ってくれば、わたし達でも力になれたのに！」

目をそむけないように、まっすぐに目を見て言うフェイトに、なのははまた笑って、

「じゃあフェイトちゃん……六課のみんなも、わたしが行った時と同じ時間にあの子に会えたとして……言えた？」「いつか仇をとってあげるから、今は我慢して死んでください」って、言う事できた？」

「……っ」

苦笑いしながらそう告げられたそれに、六課の面々は口を紡ぐだけだった。

それを見ていたエステルは、くすつと笑う。

集まった視線に、少し慌てる様子を見せてから、

「あの、みなさんを笑ったんじゃないんです！ただ、優しいんだなっつて」

「そうね、けど、ナノハと違って行動に出なかったわ」

ほっとした表情になった六課だったが、ジュディスにさらっと毒を吐かれて、また沈んだそれに戻る。

なのはは黙って、また苦笑いをした。

「・・・・・・・・・・さてと、そろそろ決めなきゃだね」
「な、何を？」

緊張した面持ちで聞いてきたカロルに、なのはは苦笑いのまま答える。

「・・・・・・・・・・法を犯したものは、きっちり裁かれなといけな
い」

「ちよつ・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・あの人たちがやったことは許されない・・・・・・・・
けど・・・・・・・・・・わたしがやったことだって、許されないよ」

そうやってまた笑ったなのはの顔は、作り物に逆戻りしていた。
やりきれない表情をしてから、カロルはなおも食い下がった。

「で、でも、困るよ！ナノハはもう凜々フレイグウェスベリアの明星のメンバーだし、そ
れにヴィヴィオだって・・・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・・・ヴィヴィオはともかく、わたしは逃げちゃダメ・・・・・・・・
・・・・・・・・・・相応の罰を受けないと」
「つやだ！」

そこで声を張り上げたのはヴィヴィオだった。
目に涙をいっぱい浮かべて、なのはの服の裾を握る。

「そんなの、やだ」
「・・・・・・・・・・でも、悪いことをしたら・・・・・・・・・・ちゃんと怒
られないと」

「じゃあなんでお母さんはテルカ・リュミレースに逃げたの！？」
「・・・・・・・・・・それはあなたがいたから・・・・・・・・・・あの世界ならミ

ツドチルダやわたしのことを知ってる人、いないし」

そう、ゆっくりと、ヴィヴィオの手を離す。

そのまま手をしっかり握って、先ほどのフェイトと同じく、真っ直ぐに目を見て、

「見つかった時点で、これは決まっていたことなの……お願い、聞き分けて」

『お願い』を、口にした。

皆が沈んだ表情をする中、一つ、盛大なため息が聞こえる。

「ったく……そこまで言うんなら、何でさっき『決まなきゃ』って言ったんだ？」

レイドだった。

彼は少し呆れた顔で、なのはの前に出る。

「……もちろん、覚悟だよ」

「その割には、まだ悩んでいるようだ？」

「っ……」

「だいたい、『そろそろ決めなきゃ』ってあたりから、間が多すぎるし、作り笑いばかりだし、まるで言葉を選んでみるみたいで……
……テルカ・リュミレースに来たばかりの頃と同じだな」
「……」

黙り込んだのはに、レイドはまた溜め息をついて。

「一回くらい、周りの言葉を素直に聞いてみたらどうだ？自分で決めるのは大事だが、いつまでもそうじゃある意味引きこもりだ」

「…………一応、話は聞いてるつもりなだけだな」

「聞いているだけだし、それに『つもり』だろ？」

「…………でも、結局わたしは犯罪者、罪人は罪人らしく、独りであるのがいいと思う」

「おいおいおい、俺たちの器量、舐めてもらっちゃ困るぜ」

会話に乱入してきたのはユーリだった。

「自分でこんな話するのもなんだけどなあ？こちとら三年前にや色んな人と出会って、始祖エンテレケイアの隸長と協力して、災厄ぶっ飛ばしてんだ」

胸を張り、自信満々にそう告げるユーリは、視線を仲間たちに向けた。

無言で話を振られた凛々ブレイウウエスベリアの明星も、しっかりと頷く。

「それに、前に言っただろ？ここにいるメンバーはみんなワケ有りなんだ、今更一人増えようが、どうってこと無えさ」

「そういうことだ」

不適に笑った二人を、交互に見て、なのは俯いた。

ただぼうっと、そこにある空間を見て、何かを考え込んでいるようだ。

彼女の真下にいたヴィヴィオは、必死に悩んでいる母の姿を不安げに見つめる。

すると、誰かがなのはの肩を叩く。

おもわず肩を跳ね上げ、振り向くと、フェイトがいた。

フェイトは黙って微笑むと、思いつきりなのはを、また服の裾を握っているヴィヴィオごと突き飛ばす。

その先には、凛々ブレイウウエスベリアの明星の面々。

なのははヴィヴィオと一緒に、倒れかけた体をなんとか再起させて、

再び振り向いた。

その顔は、明らかに困惑している。

フェイトは笑って、

「十年も友達やってて、何もわからなかったこつちより、半年で理解してくれたそっちのほうが、安心して任せられる」

なのはは困惑したまま、だがギルドを代表して、カロールが頷いた。それから、リタに向いて、

「リタ！韋駄天壱号を！」

「りょーかい！エステル！精霊達！またお願いね！」

帯をまわして術式を展開し、精霊を四方に配置。

転移の準備を進めた。

そんな中、ユーリは何を思ったのか、いきなり剣を抜刀し、フェイトに切りかかる。

フェイトはとっさにそれを受け止めて、今度は彼女も困惑した。

六課のフォアード陣もそれは同じで、思わず臨戦態勢を取り、隙あらば攻撃しようと身構える。

そんな六課メンバーを見て、ユーリはまた不適に笑った。

「『犯罪者を情で取り逃がしました』じゃ、上からお小言つけるだろ？」

鏑迫り合いを切り上げて、バックステップ。

剣を軽く振り回して、構えた。

「それより、『完璧なまでに叩きのめされて、取り逃がしました』の方が、幾らかましだと思っただけだな――！」

ユーリの意図を悟ったのか、今度はレイドが飛び出し、重たい一撃を撃つ。

衝撃波が起こり、『敵』は思わず後退した。

「一人でも、なおさら怒られるはずだ、二人の方がもっといいと思うぞ?」

「っはは! 違いねえ!!」

二人は笑って、

「飛ばしていきますか!」

「片付けるっ!」

オーバーリミッツを発動させた。

「舞い飛べ双剣!!」

先に手を打ったのはレイド。

デインノモス
宙の戒典と大剣を飛ばし、ダメージを負わせる。

「双覇! 嵐星塵!」

二点に突き刺さった双剣からエネルギーが溢れ出し、『敵』を全て吹き飛ばす。

もちろん急所は外してある為、悪くても気絶する程度だ。

「俺に力を!」

なんとか受身を取り、着地した敵を待っていたのは、

「瞬け！明星の光っ！うおおおお　　っ！！」

空を衝くように聳える、巨大な白い羽だった。

その美しさに、威厳に、フェイトも、シグナムも、ヴィータも、全員が目を見られる。

「これぞ災厄『星喰み』を退けた剣、『明星式号』！そしてこれが、その力だっ！！喰らいやがれっ！！」

いかにも重たそうに、両手で掲げたそれを、

「天翔！！」

打ち下ろす。

「光翼剣っ！！」

明らかに外されたそれは、ダメージを与えない。

だが、視界を奪うには十分すぎるほどの光が溢れた。

「っフェイトちゃん！フェイトちゃん！！」

それでも友人の身を案じたなのはは、腕で目を庇いながら、その姿を探した。

幾ばくか収まった光の中で、ぼつりと存在する黒を発見する。

「なのは！」

向こうもなのはを発見したようだ。

同じく腕で目を庇いながら、またなのは名前を呼ぶ。

なのはは、ただ彼女が無事な事にほっとした。

すると、体が少しずつ薄れ始めた。

転移が始まったと理解し、再びフェイトを見る。

フェイトは巻き起こった風にも耐えながら、こちらを見ていた。

おそらく不安げにしているであろうなのはの顔を見て、にっこり笑って、

「幸せになって!!」

ただ、それだけを告げた。

告げられた、シンプルなそれに、どう返事するべきかを迷って、口を開きかけた時。

視界がブラックアウトする。

高町士郎が目覚めたのは、ベッドの上だった。

隣にいた妻　桃子に、あの後何が起こったのかを聞こうかとしたとき、ちょうどはやてが入ってくる。

はやては一礼した後、なのはが奪還され、逃げられるまでを詳しく

話して聞かせた。

ことの顛末を聞いた士郎と、知っていたものの、改めて聞き少し暗い顔をした桃子は、溜め息と、「そうか」という言葉を吐いて黙り込む。

そんな二人を見て、はやては自分の實力不足だと詫びると、また一礼して去っていった。

「・・・・・・・・・・あの子は、大丈夫だろうか？」

何となく、そう口にする士郎。

桃子はしばらく沈黙してから、

「・・・・・・・・きつと大丈夫・・・・・・・・あの人たちは、災厄すら打ち払った人たちだそうよ・・・・・・・・だからきつと、あの子も・・・・・・・・」

「・・・・・・・・結局人に任せるのか・・・・・・・・ダメだな、俺たちは」

そうこぼした士郎に対し、桃子はまた笑って、

「そうね、けど・・・・・・・・あの子が人を手にかけて理由を聞いて、むしろ安心したわ」

「・・・・・・・・？」

「だって」と桃子は一旦区切ってから、

「あの子、わたし達が思っている以上に、優しい子に育ってくれていたんだもの」

夕暮れのハルル。

その樹の下で、なのはは風に揺れる髪を掻き分けた。

久しぶりに見るテルカ・リュミレースの景色に、ため息が出る。

同時に、少しばかりの虚無感を感じていた。

何だろうとぼんやり夕日を見ながら考えて、記憶をまさぐり出す。

だが、答えはすぐに出てしまった。

出た結果に、なのはもう何度目か分からない自嘲的な笑みを浮かべて。

頑丈な根を枕に、寝転がった。

目線が真上に行き、視界いっぱい桜色が広がる。

見事なまでのそれにまた溜め息をついて、ぼっとした。

途端に視界がぼやけて、顔を暖かい何かがつたう。

何事かと頬に触れて、一瞬で気がついた。

「……そっか、もう戻れないもんね」

力なく腕をだらりと下げて、なのはは黙って涙を流す。

考えれば考えるほど、涙の量は増えて、ぼろぼろと際限なくこぼれ出した。

起き上がって、幹にもたれかかり、ゆっくり、静かに目を閉じて、

「……………う……………う……………つく……………
……………」

顔を隠し、声を抑えることで精一杯だった。

涙を拭おうともせず、それでいて泣いていることをひたすら隠してこの先もう会えないであろう友人たちを想って、ただ一人泣いた。ふと、誰かに抱きしめられる感覚がして、思わずがりつく。

一瞬、見覚えの有る銀髪が見えて、安堵した。

必死に声を押し殺して、それでもなのはは泣いていた。

もう顔も隠さない。

罪を背負っている故、頑固者故、吐き出したい言葉を何度も飲み込んで、ただ涙を流す。

彼は何も言わずに、なのはを抱きしめていて。

強い一陣の風、花びらが舞い散り、遠くへと飛んでゆく。

深夜（後書き）

結構長かったですね、やっと最終話です。

・・・・すみません、ほとんど深夜のテンションで書き上げたので、若干残念になってるかもしれないですorz

本当は昨日書きあがっていたのですが、眠気に敗北しましたです、はい。

リリカルGVはお休みです。

っていうか、こんな矢継ぎ早に更新されたら感想書く暇無いと想います（キリッ

次回？もちろんエピソードですよ。

それでは。

夜明け（前書き）

早い話がエピソード。

連続更新であります！隊長！

5 / 3 1 : もろにキャラの名前を間違えていることが発覚。
もちろん修正。

夜明け

拝啓、フェイトちゃんへ。

「ツバキ、エレン、待ってえ〜」

「アリアナ、大丈夫？」

「ほら、手え貸すから、つかまって！」

相変わらずのどかなハルルの街。

そのシンボルである満開のハルルの樹の上に、三人の子供が上っている。

あれから、機動六課はどうですか？

わたしのせいで、きつい目にあっていませんか？

「ほら、もうすぐだよ！」

「あとちよつと、頑張って！」

「う・・・うん！」

桜色の髪の少年と、こげ茶色の髪の少年が、黒髪の少女に手を伸ばして、引き上げた。

二人の間に割り込むようにして枝に到着した。

一息ついてから、落ちないように慎重に振り返って、

「わぁ！」

「やっぱきれー！」

「だろー？」

三人一緒に景色を見て、落ちないようにはしゃいでいた。

原因であるわたしが言うのもおこがましいのですが、

しばらくそのまま会話を交わしていた三人。

やがて話題は、将来の話になっていた。

みんなが無事かどうか、わたしは心配しています。

「アリアナは騎士団に入るんだろ？」

「うん！それで親衛隊みたいな強い騎士様になって、お母さんを護るの！」

「俺はギルドに入る！プレイウヴェスベリア凜々の明星のメンバーになって、父さんみたいな人になるんだ！」

「ツバキはどうするの？」

そう聞かれたこげ茶色の少年は、うーん、と悩んだ後、

「二人みたいにはつきり決まっていかなあ、父さんみたいに世界中を旅するのもいいし、母さんみたいに街のみんなに好かれる人間になるのもいいし、あ、ねーちゃんみたいに強くなるのもいいかも」「そっか、じゃあ何になるのか楽しみだね！」

「なはは、うん！」

わたしがテルカ・リュミレースに来て、もう七年がたちました。

「ツバキのお父さんとお母さん、それにお姉さんも、かつこいいよねー」

「それを言うなら二人のお父さんとお母さんもだろー？『黒狼の剣士』と『癒しの副帝』だもん」

三人並んで、夕日を見ながら、また話は盛り上がっていく。

ミッドチルダに比べて、不便なところもありますが、とてもいい所です。

「……つと、もう大分暗いよ？」

「ほんとだ、帰らないと……」

「じゃあ降りな……きゃああああああっ!？」

悲鳴を上げて、少女が足を滑らせた。

幸い下は草が生い茂っているが、子供の頭でもまずいことになるのは分かっていた。

「アリアナ！」

「アリアナエエエ!！」

少年二人は、意味が無いと分かっている、必死に手を伸ばす。地面に直撃、良くて怪我、悪くて……。

そんな場面が頭に浮かび、少女は強く目をつむった。

ぼすん、と、柔らかい何かに受け止められる。

「大丈夫？」

ヴィヴィオもすっかり一人前になって、親としては嬉しいやら寂しいやらで、ちよつと複雑な気分だったり……。

「ねーちゃん！」

「ヴィヴィオさん！」

「ふえ？……あ……」

少女を受け止めた人物、ヴィヴィオは、少し緊張した面持ちからため息をついた。

アリアナを下ろしてから、二人を見上げて。

「エレンとツバキも！もう遅いから、早く降りてきなさい！」

「はい！」

少年二人は足元に気をつけながら、樹の幹を伝いなれた様子で降りてくる。

どうやら、この二人は何度も登っているらしい。降りてすぐに、少女に近寄った。

「怪我、ないか？」

「お母さんがいるから、仮に怪我しても大丈夫とか思うけど……！」

「だ、大丈夫だよ！ヴィヴィオさんが受け止めてくれたから！」

必死に無事を確認してくる二人に対し、少女は笑って答えた。
ヴィヴィオは三人と並んで、帰路につく。

罪を犯したわたしが、平和なここにいていいのかどうか、時々疑問に思ったりするけど。

「ヴィヴィオさん！あの樹のてっぺんまで登れたら、騎士様になれると思いますか？」

「うーん……ごめん、分からない、けどきつとなれるよ」

少女は明るく笑って、ヴィヴィオと握っている手に力を込めた。

「俺は？俺もあそこまで登れたら、なれる？」

「エレンもきつと大丈夫」

「やった！」

こげ茶色の少年もヴィヴィオの前方ではしゃいだ。

「ねーちゃん、俺は？……俺は、何かになれるかな？」

「なれるよ、それにあなたたち、まだ7歳だよ？まだまだこれからなんだから、何になりたいかは、ちゃんと自分で決めなきゃ」

「……うん！」

ギルドのみんなや、子供『達』がいるから。

だから、

夕暮れに照らされる部屋で、届かない手紙をしたためた彼女は、そつと日記帳を閉じた。

小さく息を吐いて、外の景色をぼんやりと見る。

人間では確認できないほどゆっくりとした早さで、夜が近づいてきていた。

しばらく脱力した状態ではっきりとしていると、

「ただいまー！」

やがて聞こえてくる、子供達の声。

彼女はイスから立ち上がって部屋を出て、玄関に向かう。

「お母さん！ただいま！」

「ただいま、母さん」

「ナノハさん、ただいま！」

「ただいまー！」

元気に手を振ってから、飛びついてくる子供。

年長である長女は飛びつきこそしないものの、笑顔で近づいてくる。

彼女　　なのはは、いっぱい笑顔を見せてから、

「おかえり、みんな」

わたしは笑顔でいます、元気です。

夜明け（後書き）

色々突っ込みどころが多いでしょうが……耐えねばならんだよ（（（（（

最後の一文は、一期EDから取って来たり。

とりあえず、これにて本編は完全に完結です。

この後は小ネタをちょこちょこ更新してから、×ようかなと……。

それでは、リリカルGVいきまーす。

ダメ様

一応いる子………なんですが………！

自分で読み上げたら、前半でオリキャラとなのはを絡ませすぎた感が個人的にあつたのと、後半戦闘パートが出てきたので、気がついたら若干影が薄くなっていましたorz
文才が欲しいであります！サー！

それではまた次回にでもお会いしましょう。
本編ご愛読、ありがとうございました。

おまけその1『温かい胡椒』（前書き）

そんなわけで、おまけその1。
タイトルはほとんどオリジナル。

おまけその1『温かい胡椒』

所詮だたのお遊び、シチュエーションを妄想したり、本編のシーンに当てたりしてみると面白いはず。

『しりとりの1』

レイヴン：カクテルの名前でしりとりしよ！

リタ：スクリュードライバー

レイヴン：ばっ……ば……ば……ば……ば……バツ

テラ……ミルク……！

エステル：そんなカクテルあるん！？

ジューデイス：あります！

エステル：嘘！？クーポン使える！？

『しりとりの2』

ナノハ：カクテルの名前でしりとりしよ！

レイド：スクリュードライバー

ナノハ：っば……ば……ば……ば……ば……馬刺しソ

ーダ！

レイド：そんなカクテルあるん！？

ナノハ：あります！

レイド：嘘！？クーポン使える！？

『宴会』

フェイト：こんなところで酔っ払って寝てる場合じゃないですよ！？

ヴィヴィオ：宴会芸始まるで！

スバル……トップバッターですよ、部長

リタ：今日も口から鳩だすの？

ティアナ：いや、今日は鳩の代わりに、口からクーポンマガジンの

ホットペッパーを出すんですよね？

『パーマ』

リタ：美容院でクーポン使えますか？って優しく差し出せばいいんですよね？

ナノハ：ホットペッパーでヘアカットをお願いします、ってクーポンなげちゃだめですね

ヴィータ：部分パーマ、してくれ！

リタ：あー先生、部分パーマって・・・古いですねえ

『歌』

（演奏中・・・）

パティ： 居酒屋クーポン

ナノハ：まだ伴奏です

パティ：あ、すみません

ナノハ：はいここから！

パティ：え、あ、ああっ 居酒屋クーポン

『歌2』

（演奏中・・・）

フェイト：・・・っつ（こ、今度はちゃんと歌うぞ・・・

！）い、居酒屋Y

はやて：もう、終わりました

フェイト：う、うう・・・もう・・・居酒屋クーポン・・・

『梅1』

エステル：あ、あの、焼酎のお客様、どちら、さまでしょうか？

シグナム：ああ、俺やはやく・・・あつ、お前それ、梅入ってへん

やないか、梅が、梅、梅いれてくれ、梅

エステル：お前は梅おじさんか

『梅2』

ティアナ：焼酎のお客様……あ、梅入れるの忘れてきました、すみません

ユーリ：ああ、梅いらん、梅いらん、梅はいらん、梅いらん、送別会に来ているやつら全員、梅いらん
ヴィータ：……梅嫌いか？

『無礼講』

カロール：今年の忘年会は、みなさん無礼講いうことで……
ユーリ：お前無礼講ゆつてもなあ？親しき仲にも、礼儀ありやぞ？
カロール：……社長にお前言うな

『歓迎会』

エステル：歓迎会をやる意味で、新入社員の山田君から、一言
ナノハ：おお、分かった……まあ、あのー、よろしゅ頼むわ、なっ！

レイド：……君ほんとに二十二歳か？

『送別会』

リタ：じゃ、送別会をやる意味で、転勤する山田君から一言
ナノハ：おーけーおーけー、ニューヨークイズベリーコールド、バツトアームストロング、んっんっ
ジユデイ：……お前大丈夫か？

『乾杯』

ジユデイス：ビールでかんぱーいってしましようか？ホットペツパーが新しく出るの記念して

エリオ：かんぱーい！

ジユデイス：あ、ジョッキ投げないほうがいいですよ

ティアナ：赤坂六本木中野公園寺品川田町かんぱーい！
ジユデイス：あ、先生・・・・・・・・素敵♡

『元合唱団』

ユーリ：君が飲んでるそのカクテルクーポン券で一杯だーけた
ーだなのよー んふふっ
ヴィヴィオ：・・・・・・・・..
ユーリ：ボク昔少年合唱団入ってたん

『スパゲッティ』

フェイト：スパゲッティ食べたでしょ？
ナノハ：食べてないよ！
スバル：ケチャップついてるやん
ナノハ：・・・・・・・・食べました！！
キャロ：わたしのクーポン券使って？
ナノハ：使ったよーな気がします！クーポンマガジンのホットペッ
パー！

『壊れた鍵』

フェイト：えー、ホットペッパーで盛り上がった宴会も、そろそろ
もう終わり・・・・・・・・..
レイヴン：ちょっと待て、その前に、おい、女子トイレの鍵、あれ
壊れてんぞ、直せ
ティアナ：・・・・・・・・何で君がそんなん知ってるの？

おまけその1『温かい胡椒』（後書き）

突っ込みは感想へどうぞ。

誤字、脱字あらばご報告を。

それでは、リリカルGV〜W

00フリーダム様

初めまして、さばくです。

はい、これからもちよこちよこ短編更新するので、お楽しみにWW

それと、今回から次回予告は無しです。

だってそのほうが面白いですからWW私がWW（（（
それでは。

おまけその2 『戦闘関連のボイスと称号』（前書き）

タイトル通り。

おまけその2 『戦闘関連のボイスと称号』

ED終了時点で獲得済みの称号、ついでにもろもろのボイスも。

ナノハ・アンダースカイ（本名：高町なのは）

『放浪の母』

故郷を追われ、娘とともに世界をさ迷う。

作り物の笑顔の裏にあるものは、いったい何なのだろうか？

『シングルマザー』

女手一つで子どもを育てる。

強くて優しいお母さん。

『元教導官』

今は離れています、教導の腕はまだまだ健在。
かつて戦い方を指導していたものの称号。

『ママさんファイター』

闘技場にて、勝利をつかんだ母親の称号。

この称号をつけていると、衣装が中華風になる。

『謎の杖の使い手』

突然現れた謎の杖。

大火力を誇るその正体とは………？

この称号をつけていると、十分の一の確率で、武器がこの杖になる。

『闇を持った剣士』

心に闇を抱えて、精神的に独りぼっち。

助けを拒み、助けを求める、矛盾した心を持つ称号。

『優しい人殺し』

優しさゆえに鮮血に染まり、堕ちた者の称号。

この称号をつけた状態で戦闘を続けると……。

『不屈のエースオブエース』

本当の名前が明かされ、本来の能力を一部発揮。

この称号をつけると、十分の一の確率で衣装が *striker's* の
エクシードモードになる。

『桜色ビキニ』

戦いの前線に出てるおかげか、かなり引き締まったボディ。
とても子持ちとは思えません。

この称号をつけると、衣装が桜色の水着になる。

『流麗』

凛としたドレス姿は、道行く人を振り向かせます。

この称号をつけると、衣装がドレスになる。

レイド・アルタイル（本名：アレクト・ディノイア）

『隻眼の大剣士』

顔半分を覆う眼帯をつけた、剣士。

冷静の裏には秘めた優しさの裏返し。

『火炎の虎』

闘技場にて勝利を掴んだものの称号。

この称号をつけると、衣装が中華風になる。

『右目の魔導器』

父によって生かされ、父によって実験台となった。
今は亡き父に、やり場のない憎しみを密かに抱く。

『大罪人の血族』

三年前、罪を犯した大罪人の実子。

口にこそ出さないものの、過去は重くのしかかる。

『《役目》の継承者』

エアルクレーネを沈めて回る・・・それが恩人から受け継いだ《役目》。

それが贖罪に繋がると信じて、世界を駆ける。

『パーカー』

水着の上に着たパーカーは、自己主張しない彼なりのスタイル。
この称号を付けると、衣装が水着になる。

『クールスーツ』

冷静な彼も、聖夜くらいは着飾ります。
この称号を付けると、衣装がスーツに変わる。

ヴィヴィオ・アンダースカイ（本名：高町ヴィヴィオ）

『放浪の娘』

母と共に、世界を旅する少女。

その瞳は全てを移して輝く。

『聖王の器』

その昔栄えた王のコピー。

現在は優しい母の元で、すくすくと成長している。

『決意の弟子』

悩み、打ちひしがれる母の姿は、少女に決心を抱かせる。
目指すは、背中を守る強さ。

『小さな明星』

最愛の母を取り戻すために、少女は譲り受けた刀を握る。
この称号を付けていると、攻撃、防御が5%UP。

『麦わら帽子』

例え戦うことが出来ても、子どもらしく波打ち際で遊ぶんです。
この称号をつけると、衣装が水着になる。

『うさちゃんパジャマ』

今夜はサンタさんがやってくる！だからいい子は早く眠りましょう！
この称号を付けると、衣装がウサ耳のかわいいパジャマに変わる。

諸々のボイス

ナノハ

戦闘中

「やっ」

「はっ」

「たあっ！」

「それっ！」（緑フェイタルストライク時）

「よいしょっ！」（青フェイタルストライク時）

「ふっ！」（赤フェイタルストライク時）

「うっ」（ダメージ）

「くあっ！」（ダメージ）

「っきゃあ!」(ダウン)

「頭冷やそうか!」(ダウン復帰)

「そんな・・・っ!」(リタイア)

「その構え、なつてないよ!」(挑発)

エンカウント

「行くよ?」

「参ります!」

「邪魔しないで!」

「後ろから!」(背後からエンカウント時)

「多いと思うなあ・・・」(大量エンカウント時)

「これも作戦だよ?」(アドバンテージ時)

「まだまだ!」(HP少量時)

「ちよつと、まずいかも?」(HP少量時)

レイド

戦闘中

「ふっ」

「はっ」

「せいっ」

「斬るっ!」(緑フェイタルストライク時)

「斬り上げるっ!」(青フェイタルストライク時)

「斬り下すっ!」(赤フェイタルストライク時)

「ぐっ」(ダメージ)

「っ!」(ダメージ)

「があっ!」(気絶)

「・・・すまない」(気絶復帰)

「ぐ・・・あっ・・・」(リタイア)

「それは飾りか?」(挑発)

エンカウント

「・・・通せんぼか」

「物好きな奴等だ」

「どけ！」

「背後からか・・・」(背後エンカウント時)

「弱い奴ほど群れるそうだな？」(大量エンカウント時)

「悪く思うな」(アドバンテージ時)

「問題ない」(HP少量時)

「・・・流石にきつい」(HP少量時)

ヴィヴィオ

戦闘中

「やっ」

「はっ」

「ていっ！」

「てやっ！」(緑フェイタルストライク時)

「そりやっ！」(青フェイタルストライク時)

「えいっ！」(赤フェイタルストライク時)

「わっ」(ダメージ)

「いたっ」(ダメージ)

「くうっ・・・！」(ダウン)

「もう怒った！」(ダウン復帰)

「きゃああっ!!」(リタイア)

「どいてよ」(挑発)

エンカウント

「行きます！」

「邪魔！」

「頑張ります！」

「やばっ」(背後エンカウント時)

「ちょ、これ全部仲間!?」(大量エンカウント時)

「あまりいい気はしないけど・・・」(アドバンテージ時)

「ちよっとくらい大丈夫！」(HP少量時)

「…………めん、痛い」(HP少量時)

おまけその2 『戦闘関連のボイスと称号』（後書き）

そんなこんなでおまけその2。

私的に、水着とクリスマスものは必須だと思っていますww
ヴィヴィオのは途中から参戦なので、称号は少なめです。

あと、今回からリリカルGVもしばらくお休み。

理由？後でのお楽しみww

それでは。

おまけその3『最凶タッグ』（前書き）

前回の後書きで勘違いしていらっしやる方がいるかもしれないので補足。

リリカルGVのお休みは、お返事をしばらくお休みするだけで、感想はじゃんじゃん書き込んでもらっても構いません。

………っていうか、書いてくれないとあとで困る………（

ぼそぼそ

っは！それではおまけその3、どうぞ！

おまけその3『最凶タッグ』

「・・・・・・・・っ!!」

迫ってきた弾丸を弾き飛ばすレイド。

衝撃で体が傾くものの、前転を応用して立ち上がる。

間髪入れず、再び弾丸。

今度は二発。

「守護方陣!」

剣を地面に突き刺し、陣を展開させて打ち消した。

ついでに自身の体力も回復させて、やりきれない表情で相手を見る。

(・・・・・・・・どうしてこうなった?なんでこんなことに・・・・・・・・
・・・・・・・・!!)

敵は目の前、地面から数メートルの位置を浮遊していた。

白と青を基調とした、どこか女の子らしく、それでいて勇ましい服装をしている。

『戦姫』、という言葉が似合いそうな格好だ。

手には愛用の小太刀、周囲には彼女を守るように、何かの機械が旋回していた。

表情は虚ろで、目も焦点があっているかどうか怪しい。

その証拠とでもいうのか、時折彼女の背後に、何かの影が見え隠れした。

レイドは彼女の身を案じて、叫ぶ。

「ナノハ!聞こえるか?しっかりしろ!!」

ことの起こりは数時間前。

ナノハ救出から二週間経ったこの日は、彼女の復帰が決定していた。久々に働けることが嬉しいのか、ナノハは先ほどから軽い柔軟を行ったりと、落ち着きが無い。

表情はいつにも増して明るく、半年前と比べると、見違えるような変わり様だった。

エステルは、本音を言えばもう少し休んでいて欲しかったらしいのだが、ナノハに拝み倒され、根負けしたのだという。

そんな話を聞いて苦笑いしながら、レイドはナノハを誘った。

依頼内容は難破船の調査。

あのアーセルム号がカプワ・ノール近くの海岸に乗り上げているらしく、歴史的価値の高い物資を運び出すを手伝って欲しいというものだった。

少なくとも戦闘は起こらない依頼内容なので、肩慣らしにはちょうどいいだろうと踏んでのことだった。

ナノハとしては、仕事が出来たら何でも良かったらしく、すぐに了承する。

レイドは、初めて見る心からの笑顔が仕事方面に向いていると思うと、少しやるせないような気分になったが、これが本来の彼女なのだろうと思うと、割と早く割り切れた。

そんなこんなで任務を終えて、帰還している最中のことだ。

近くの茂みから物音が聞こえて、二人は本能的に臨戦態勢に入る。顔をのぞかせたのは幽霊のような魔物。

額には黒光りする宝石がはまっていた。

緊張が走るものの、魔物はすぐに去って行ってしまふ。

だが、疑問符を浮かべつつ警戒を解くレイドと違って、ナノハは思いつめた顔をしていた。

何かあったのかとレイドが聞くと、ナノハは、魔物の額にはまっていた宝石が、ロストログアという危険物かもしれないということを話した。

「ごめん、でもどうしてもほっとけなくて……」

そこまで言うのなら、と、レイドは魔物を追跡することを決めた。

ナノハは彼に短く感謝を述べて、先頭を歩く。

曰く、腕についているデバイスが、位置を教えてくれるという。

異世界の技術に関心を持ちながら、二人は森の奥へと進んだ。

が、不意をつかれ、目的の魔物がレイドを襲撃。

それをナノハがかばい、体に乗っ取られ、今に至る。

『Error!Error!』

ナノハの周囲を浮遊している、彼女のデバイスだったものが、警告を発している。

この場にリタがいれば、『持ち主以外から強制的な干渉を受けているため』と推測を立てることが出来るが、生憎彼女はここに居ない。さらに今は戦闘中である。

ナノハをどう救出しようか、頭がいっぱいっぱいで、思考が回ら

なかった。

「・・・・・・・・アクセル」

虚ろな声でなのはが呟くと、周囲に桜色のスフィアが出現。
しかも大量である。

一瞬呆けてしまうレイドだが、操られているナノハは、復帰するまでの時間を与えなかった。

「シュート」

再び虚ろな声で、号令。

刹那、それらが一斉に発射され、レイドを襲った。

弾幕の中を必死に駆け抜ける。

結果、数発当たりはしたものの、距離を取ることが出来た。
しかし、

「・・・・・・・・ターン」

「はあっ!？」

地面に被弾せず、生き残っているスフィアが急旋回。
真っ直ぐレイドに向かって来た。

魔法のことをよく知らない彼でも理解できる。

「誘導弾か!？末恐ろしいな!!」

とうとう宙デインノモスの戒典まで抜刀して、二刀流で応戦し始めた。
なんとかナノハに接近し、剣を振り下ろす。

ナノハは小太刀で弾き飛ばして、再び弾丸を撃ち出した。
これまでの戦いで、レイドが理解したことが一つだけ。

ナノハが攻撃のモーションをするたびに、あの魔物が実体化するということだ。
なんとかそこを狙えないかと、ナノハの猛攻を受け流しながら、そう思考する。

「・・・・・・・・」

ドンつと、ナノハが闘気を纏った。
連続して繰り出される技を、レイドは必死になって捌いていく。

「・・・・・・・・星の煌き、天の裁き・・・・・・・・」

ぼそぼそと呪文のように呟きながら、ナノハはレイドを小太刀で翻弄し始める。

レイドはそれらを防ぎながら、冷や汗をかいていた。

（秘奥義までつ・・・・・・・・さすがにやばい！）

完全に防戦一方になったレイドは、必死にナノハの攻撃を受け止める。

「その身に受けよ・・・・・・・・」

突然大きく斬り上げてからの、バックステップ。

瞬間、周囲に大量のスフィアが星空を描いた。

レイドの顔が強張るが、すぐに表情を引き締め、ナノハの後ろの魔物を睨んだ。

ナノハは構わず、号令をかける。

「シュート・・・・・・・・」

スフィアが一斉に発射され、レイドを襲った。
被弾し、土煙で視界が悪くなる。

だが、ナノハを操っている魔物は、勝利を確認していた。
声こそ出さないものの、ニヤニヤと負けたレイドを嘲笑う。
そして、攻撃モーションを行っていないのに、実体化した。
完全に気が抜けている証拠だ。

土煙の中で、何かが光る。

笑顔を絶やさないまま疑問符を浮かべた魔物は、次の瞬間

意識がはつきりしてきて、覚醒を覚える。

わたし、何していたんだっけ？

ロストログアを持っていた魔物を追いかけて……………

思い出すのは、レイドをかばった自分が、彼を攻撃する光景。

「……………っ!？」

勢い良く起き上がって、最初に目にしたのは、赤々と燃える焚き火だった。

「暗いけど、おはよう」

「・・・・・・・・あつ」

隣を見ると、所々ボロボロになっているレイド。
もう一度、先ほどの情景が頭に浮かび、血の気が引いた。
背筋が一気に凍りつく。

自分は、何をしていた？

下手をしていたら、今度は・・・・・・・・！！

ガタガタと、体の震えが止まらない。

あの官僚のみならず、仲間まで斬ろうとしていたのか・・・・・・
・・・・・・・・？

それだけが、ただ単に恐ろしくて。
自身が怖くなった。

突然震えだしたナノハを、レイドは黙ってその頭を撫でた。

「庇ってくれてありがとう、悪かったな」

なるべく優しく語りかけながら、手を動かす。

ナノハは感情が高ぶったのか、レイドに抱きついた。

その姿はまるで、暗がりやを怖がる子供である。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
・・・・・・・・」

「怖かったな、もう大丈夫だ」

泣き出すナノハを抱きしめ、あやす。
この前と違って、声を上げて泣き出していた。

それからしばらくその状態が続いて、ナノハの目は真っ赤である。

「……………ごめん」

「大丈夫だって、まあさすがにきつかったけど」

未だにうつむいているナノハに対し、レイドは苦笑いした。

「さーで、帰るまでに考えなきゃな」

「……………何を？」

「エステル達を『心配させずに』理由を言う方法」

「あ……………」

依頼内容からいけば、今日中に帰れるはずだったが、先の程のアクシデントだ。

あたりはもう真っ暗で、迂闊には動けない。

ヴィヴィオも心配しているだろうと思うと、何となく気が重くなつた。

二人してため息をつく、腹の辺りから音がする。

ぱつと視線を向けるレイドと、さつと視線をそらすナノハ。

思わず、くすつと笑ってしまった。

「ちよつ、ど、どうせ笑うならもつと大声で笑ってよ！恥ずかしい
って！！」

「くくくくつ……いや、悪い、うん、やっぱりお前は人間
だな！」

まだ込みあがつてくる笑いを抑えながら、レイドは先ほど作ったサ
ンドウィッチをナノハに渡した。

ナノハはまだ納得していない顔でそれを受け取り、口にする。

そうやって食べているうちに食欲が勝ったのか、いつの間にか不機
嫌な表情は消えていた。

「……さっきのが、お前の本当の戦い方か？」

「……うん、正確には、小太刀は使わないんだけどね」

「遠距離・中距離専門なの」と、ナノハはサンドウィッチの最後の
一切れを食べて、飲み込む。

「じゃあ、あの格好は？」

「バリアジャケット、こつちで言う防具だね」

「なるほどな……じゃあ、フェイト達は普段からあの格好
じゃないんだな？」

「うん」

焚き火を見つめて、ナノハは頷いた。

「……わたしがいた世界は、ここでもミッドでもないとい
ろなの、魔物もいなくて、魔法は架空の存在だって言われてた」

レイドは薪をくべながら、黙って話に聞き入る。

「だから、なのかな？魔法の力を手にした時は、すごくわくわくした……一番楽しかったのは、空を飛んでいるとき、風にあたりとすごく気持ちいいの」

懐かしそうに目を細めて、話すナノハは、少し寂しげに見える。

「でも、管理局に入って、いろんな事件を捜査していくうちに、だんだん何が楽しかったのか、分からなくなって……」

「けどね」と、結んだ。

「テルカ・リユミレースに来て、もう一度空を見て、あの頃がどんなに楽しかったかを思い知って、それで、そこを捨てた自分を恨んだ」

「……そうか」

それ以外に、言う事が出来なかった。

むしろそれ以上を言ったら、彼女を傷つけてしまいそうで、だからレイドは、それだけ返す。

そして座りっぱなしで凝った体を伸ばして、立ち上がった。背後に組み立ててあるテントを指差して、

「とりあえず、お前はあの中で寝ろ」

「え、でもレイドは……」

「外で見張り、でも大丈夫さ、テントには魔物が嫌うニオイが塗つてあるから、二人とも寝られるはずだ」

「……ん」

普段のナノハならここで粘るのだが、今回はあえて退いた。

レイドも安眠できるのならというのもあるが、寝不足で動けなくな

るなど、これ以上の迷惑をかけなくなかったのが大きかった。
テントに入るとき、なんとなくレイドの方を振り返ると、彼の背中が見えた。

心なしか、胸が締め付けられる感覚がした。
そこで、はたと気づく。

（あれ？背中、あんなだったっけ？）

なんというか、以前より美化されて見えるそれについて、首をかしげながらも、眠りにつく事にする。

ほどなくして、ナノハは意識を手放した。
それからしばらく起きていたレイドだが、徐にナノハの元に行くと、その寝顔に手を当てる。

だがすぐに離してから焚き火の傍に戻り、星空を見上げた。
ちやうど流れた星に、そつと願いを呟く。

彼女に、良い夢を

おまけその3『最凶タッグ』（後書き）

魔物とロストロギアが組んだら、すごいことになりそうだと思っちゃうわたしがいたりします。

今回はなのはがレイドに惚れる切欠……的なものを書きたかったのですが。

あえなく撃沈ですね、はい。

誤字、脱字あらば感想へどうぞ。

おまけその4『叙情的な勝利・前編』（前書き）

台詞ばかりなので、読みづらいかもです。

おまけその4『叙情的な勝利・前編』

某所　　。

カロル：ここ、だよね？手紙に書いてあった場所

ユーリ：そのはず、なんだが……………

パティ：暗いのう……………深海魚でもない限り、はつきりとは見えんぞ？

リタ：あ、向こうに誰かいるわ

エステル：本当です！すみませーん！

フェイト：あれ？なのは！？

ナノハ：ふえ、フェイトちゃん！？

レイヴン：ハンマーのお嬢ちゃんに、竜使いのお嬢ちゃんまで！

ジユデイス：槍騎士の坊やもいるわね

ヴィータ：お嬢ちゃん言うな！

エリオ・キャロ：こ、こんにちは！

エステル：あ、あなたは……………

ティアナ：……………久しぶり、でいいのかしら？

パティ：おお！お主、久しぶりじゃのう！

スバル：ど、どうも……………

はやて：なんや、もしかして全員ここに来とるん？

シグナム：どうやらそのようですね

ユーリ：な、もしかしてお前らんとここにも、これ来たか？

シャルマル：ちよつと待ってください……………ええ、間違いありません

レイド：一体何なんだ？

カロル：さあ？

ヴィヴィオ：なんでみんなここに……………？

はやて：な、目が慣れてきて分かったんやけど、ここ、テレビのスタジオっぽくあらへんか？

ナノハ：あ、そう言えば……………

レイド：てれび？すたじお？

ナノハ：ああ、えつとね……………

レイヴン：なるほどねえ、でもなんで俺達がそのスタジオに来ているんかね？

ティアナ：さあ？

シャマル：手がかりゆうたら、この手紙くらいやし……………
ラピード：わふう

ガチャン、つかつかつか………

ヴィヴィオ：っ誰か来た！！

シグナム：何なんだ？

はやて：全員警戒態勢や！気いつけえや！！

……………あー、マイクテスー、マイクテスー

……………出張版ですかね？しっかりやってくださいよ？

???：そそ、出だしから噛むとか、無しだからな？
???：まかせてちょーよお！それではー、んっんっ……………
・さあさあ！こちらでも始まりました、このコーナー！
???：明日へ導く、叙情的な黄金の勝利！！
???：テイルズオブリリカルゴールデンビクトリーッ！！！（以下リリカルGVと表記）い！

パッ

ヴィータ：はっ……………？

ゼロス：司会進行は、『テイルズオブシンフォニア』より、この俺
ゼロス・ワイルダーと！

ジェイド：『テイルズオブジァビス』より、私ジェイド・カーティ
スです、そして特別ゲストの……………

さばく：はいはい！この小説の作者である私、砂原さばくです！
よろしく！！

ゼロス：以上三人でお送りするぜ！！

エステル：あ、あの、これは……………

さばく：題して！『裏話アリ、お返事アリ！お疲れ様でした回』っ
！始まるぜ……………！！

ジェイド：ネーミングに関しては、突っ込みは無しですよ？

ティアナ：……………何よ、これ

スバル：つまり、本編が終了したのを記念して、最後の最後で騒ぎ

立てようって魂胆なんですね？

ユーリ：だからこの手紙で俺達を呼びつけたと・・・・・・・・

さばく：ザツツライト！そういうわけで、まずは感想へのお返事がらっ！

> 緑異様

はやて：なんや、エピソードまでの展開見て、切ない思うてらっしやるみたいやね

さばく：ぶつちゃけ、連載開始のころから決まってた展開だから、自分としては無事完結できて、うわーって感じです

ゼロス：一時期思うように執筆が進んでいないみたいだったからな、俺様としちゃ出番がこないんじゃないかってハラハラしたぜえ

さばく：そそ、打ち切りとかにならないよう必死にだったから、肩の荷がおりた感じだよ

ユーリ：後半ではその切なさを返せって言われてるけどな

さばく：前々からやって見たかったんだよ！個人的に、宴会芸とスパゲッティ、あと梅のくだりが気に入ってる

ジュデイス：どれも本編に当てはめたら雰囲気ぶち壊したもののね

さばく：そのぶち壊しっぷりが『温かい胡椒』の醍醐味なんだ、と思うー！！

> isuzu様

スバル：この人、愛読してくれていたみたいだね！

さばく：おかげさまで、無事完結できました！

ジェイド：いやはや、物好きな方ですね、こんなに最初から最後まで駄文なこの小説を、最後まで読みきるとは・・・・・・・・

ティアナ：余計な言葉だと思っわ、それ

エリオ：ほっとぺっぱーって、結構昔のものなんですね

フェイト：そう、クーポンがいつぱいついてる雑誌なんだよ
さばく：しかもただで配布されていたからさー、今はどうしてるんだろ？

ナノハ：あ、でも時々スクリュードライバーって聞くよね

レイド：ごくたまに、だがな

ゼロス：さーて、続けて裏話に入りたいと思うんだけどよ、これは
どういう形式でやるんだ？

さばく：この場にいるゲストのみんな全員の疑問に、私が答えるつ
て形で進めるよ

ジェイド：なるほど・・・・・・というわけで！作者さんに質問
がある方、手を上げてくださーい

全員：はい！！

ゼロス：って全員かい！しゃあねえ、じゃあその金髪のお姉さん！

フェイト：あ、はい、あの！作者さん！

さばく：なんですか？

フェイト：この小説でのわたしの最初の台詞があんまりだと思いま
す！そもそも開口一番に『最低』って・・・・・・

さばく：そうでもしなきゃ物語始まらないじゃん、もとからこっ
うスタートだつて決まってたんだから、諦めな

フェイト：そんなあ・・・・・・

ゼロス：はい解決！次、亜麻色の髪のお姉さん！

ナノハ：本編でのわたしの扱いが酷い気がします！

ジェイド：プロローグでは友人に最低と言われ、テルカ・リュミレ
ーヌに来て早々エッグベアに襲われ負傷、闘技場ではアナゴと死闘
し、ついには心労で倒れる、ここまで不幸な目にあっているのはあ
なただけでしょね

ナノハ：あううつ、改めて言われると傷つくなあ……………

さばく：好きだからこそその結果よ？あたし、リリカルなのはではな
のはさんが一番好きなんだから

ナノハ：だったらなんで……………！

さばく：ほら、よく言うでしょ？『好きな子ほどこいぢめたい』って。
……………ww

ナノハ：……………

レイヴン：駄目だ、この人真正銘のSだわ……………

ゼロス：んまあ、気を取り直して、次はその橙色の髪のお嬢さん！
ティアナ：はい、あの、戦闘シーンとかで、わたし達フォアード戦
のキャラの組み合わせはどういう基準で？

さばく：他はともかく、スバルVSパティと、ティアナVSエステ
ルは始めから決めてたよ？

ユーリ：どういう基準でだ？

さばく：……………スバル、パティのまねやってみ？んで、パ
ティはスバルのまねやってみ？

スバル：え？

さばく：そんで、エステルはティアナのまねやって、ティアナはエ
ステルのまねやってみ

エステル：や、やるんですか？

パティ：それしかなさそうじゃの

ティアナ：まったく……………んんっ……………マーシー
ワルツ！

エステル：え、えと、それでは……………クロスファイヤーシート！

スバル：えーっと……………クリティカルモーメント！

パティ：いっちょやるかの……………デイベインツバスター！！

全員：！？

ヴィヴィオ：そっくり！

さばく：はい解決、他の人達に関しては、ジュデイスとエリオは槍繋がりで

ジュデイス：確かにそうね

エリオ：はい

さばく：んで、シグナムに関しては、一回目は剣士同士としてVS
ユーリに、二回目は守護騎士の将と、ギルドの首領ってことでVS
カロルにしたんよ

シグナム：なるほど

ユーリ：確かに共通点はあるな

カロル：うん

さばく：おっさんに関しては、余り者

レイヴン：ちよっ！？それは酷いよ作者！！

キャラ：あの、もしかして、わたしも……………

さばく：キャラに関しては、本当は一回目も二回目も後衛つながり
でリタとぶつけたかったんだけどさ

リタ：あたしと？

さばく：そそ、けど、リタは機械系にも強いから、レイジングハートさん奪還に周ってもらって、んであまったおっさんをキャラとぶつけたの

キャラ：そ、そうなんですか……………

さばく：ちなみにヴィータは、二回目の相手はお説教的な意味でVS
ユーリってのは決まってたけど、一回目が決まらなくてさー、結局
余り者同士で戦わせたっていう

ヴィータ：酷えな、おい

レイヴン：お嬢ちゃんはまだマシよ！おっさんなんで正真正銘の余り者なんだから………

ゼロス：んじゃあ次は………その身長的にハーフェルフのガキンちょを思わせる赤毛のぼーず！

エリオ：エリオです！あの、レイドさんの両親の設定って、どうなっているんですか？

さばく：父親に関しては言わずもがな、母親は、人魔戦争の舞台になった場所の近くの地域住民って設定

ジェイド：手元の資料によると、黒髪で大和撫子な人物だったようですよ

カロール：そうだったの？

レイド：ああ、だが、少しばかり天然が入っていたというか、ぼけっとしていたというか………今思えば、幾らか危なっかしい人だった

リタ：へえ、割と抜けている人だったのね

さばく：言つとくけど、アレクセイはその抜けている人に一目ぼれして、骨抜きにされたからな

レイヴン：………あのアレクセイが………

パティ：一目ぼれ、じゃと？

ジュデイス：骨抜きに………ねえ？

ジェイド：それでは次の方、と行きたいところですが、一旦CM入ります

おまけその4 『叙情的な勝利・前編』（後書き）

ゼロス「作者に語ってほしい裏話はまだまだ募集中！どんどん感想に入れてくれよな！」

おまけその5『叙情的な勝利・後編』（前書き）

若干短いですが、最後までお付き合いくださいませ。
今回まで、前ユーザー名を使わせていただきます。

おまけその5『叙情的な勝利・後編』

ゼロス：んじゃ続きな！その女医の方！

シャル：あのっ！緑異様に指摘されるまで、わたしのこと忘れてたって、本当ですか！？

ザフィーラ：答えようによつては……………

さばく：マジ、大マジwww

シャル：そんなあ！

ザフィーラ：……………

さばく：ぶつちゃけ、ザツフィーもシャル先生も影薄いからね

シャル：そこまではつきり言わないでください！

ザフィーラ：……………くすん

ゼロス：さーて、続きましては……………その！オッドアイで将来楽しみなお嬢ちゃん！

ヴィヴィオ：は、はい！あの、エピローグに出てきた子供がいるじゃないですか、あれって何者なんですか？

さばく：双子に関しては、髪の色で一発で分かるだろうからスルー、もう一人の男の子に関しては……………母親はまずナノハさんで間違いないよ

ナノハ：そうなの？

さばく：そうそう、んで父親は……………ちと、ネタばれになるから、お口チャックな、強いて言うなら父方の祖母の黒髪の遺伝子が出て、亜麻色の髪がこげ茶色になってるのさ

リタ：なるほどねえ

ユーリ：……………父方の祖母？

レイヴン：……………黒髪？

パティ：……………

ジェイド：それでは次は・・・・・・・・はい、では二代目舞茸を襲名された、眼帯の方！

レイド：舞茸ってなんだ・・・・・・・・おまけその1の内容、各方面から突込みが飛んできそうなんだが？

シグナム：大阪弁にされたり、クーポンの歌を歌わされたり・・・・・・・・

さばく：さつきも言ったけど、前々からやりたかったネタなんだよ、スパゲッティと合唱団のくだりはすでに出来ていたから、あとは動画を見ながらちまちまと
ヴィータ：動画を止めたり再生したり、よくそんな面倒な作業出来るよな

さばく：そういう作業が好きなのさ！あと、梅は六課とギルドが対になるようにした

はやて：梅好きなシグナムと、梅嫌いなユーリさんか・・・・・・・・

さばく：サイトさん見てるとユーリ「甘党って公式が出来上がったから、酸っぱいのを拒絶される側にもってこいだな」と、シグナムさんに関しては、雰囲気？

スバル：確かに、シグナム副隊長って焼酎飲んでるイメージ！

シグナム：む、そうなのか・・・・・・・・

ゼロス：そんで次は・・・・・・・・ぺったん胸！

リタ：あんた、後で燃やす！・・・・・・・・おまけその3で、ろすとろぎあと魔物が融合していたじゃない？どうしてあんなったの？それと、そのろすとろぎあと設定はある？

さばく：魔物とロストログアはたまたま出くわしたっていう感じ、偶然魔物が拾って合体したってワケ、設定については、単なる増幅剤っただけな

ジェイド：なるほどー、取り付いて操るという能力については……

さばく：おまけだな

シグナム：それはそうと……惚れる切欠といいつつ、ほとんどそうだった要素が見られないが？

さばく：いやー実はさー、本当は雨宿りのついでに会話するって予定だったんだけど、何をトチ狂ったのか、どうもノクターン向けの方にしかいなくなっちゃってさーww

ヴィータ：おまつ………！

レイヴン：一応聞くけど！作者さんいくつよ！？

さばく：聞いて驚け！もうすぐ花の十七歳だ！

フェイト：だめだこの人！？

ジェイド：じゃあ続きまして………黒髪の方！

ユーリ：俺だな、おまけその2の称号の基準は何だ？

さばく：本編に出てきたのは言わずもがな、水着、闘技場、クリスマス関係の称号に関しては、テイルズでは外せないって個人的に思ったのさ！

ティアナ：下手したら、シリアスなシーンにパジャマとか、水着とか、空気が読めない奴に大変身ね

さばく：ちなみになのはさんの水着は一度雑誌で出たやつだぞ？ヴィヴィオはvivid二巻のアニメイト限定版の奴に、麦わら帽子をプラスしたやつな

エステル：そうなんです？

さばく：おうよ、気になる人はぐぐってね！！

ゼロス：さーて、大方語りつくしたかな？

ジェイド：そのようですね、それでは作者さんに〴〵もらいましょ
うか？

さばく：はいはい！んんっ………一時は進行が思うように
進まず、どうなることかと個人的に不安になったりもしましたが、
みなさんの感想や、アクセス記録を見るたびに、がんばることがで
きました！完結できたのは、ひとえにみなさんのお陰だと言い切っ
ても過言ではありません、『LyricalVesperia』墮
ちた不屈と凜々の明星達』、未熟な部分が多い小説でしたが、最
後まで読んでいただきありがとうございました！

パティ：しかし、いざ終わってみると、いささか寂しい気がするの
う………

エステル：そうですね、本編も切ない形で終わってしまいましたし、
未来でナノハが友達に再会できるといいですね

ナノハ：にやはは、ありがとう

フェイト：LyricalVesperiaは終わっちゃったけど、
まだ完結していない作品もあるし、みなさんが応援してくれると、
嬉しいな

ジュデイス：そうね、特に、作者さんのナノハのいぢめっぷりに今
後も注目かしら？

ナノハ：それは………ちよつと………

キャロ：あの、これからも、ご感想とか送ってあげてください！

エリオ：作者さんや、僕達の励みになります！

ゼロス：うおお………この二人、いい子だ………

ユーリ：んじゃあ、この辺で本当に〴〵るか！

はやて：せやね

せーのっ

全員：長い間、ご愛読ありがとうございましたー！
さばく：他の作品や、続きもお楽しみにー！

レイヴン……うん？ 続き？

さばく：あれ？言っ てなかつ た？続編、現在製作中だよ？

何
い
い
い
い
い
い
い
い
い
つ
!
!
?

最後まで見ていただいたあなたに、最上級の感謝を！

おまけその5 『叙情的な勝利・後編』（後書き）

これにて、Lyricall Vesperia（堕ちた不屈と凜々の
明星達）は完全に完結です。

最後までご愛読、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3316n/>

Lyrical Vesperia ~ 堕ちた不屈と凜々の明星達 ~

2011年6月26日16時00分発行